

K-73 /

山形県山形市

一ノ坪遺跡

市道立谷川北志田線道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2001

山形市教育委員会
山武考古学研究所

山形県山形市

一ノ坪遺跡

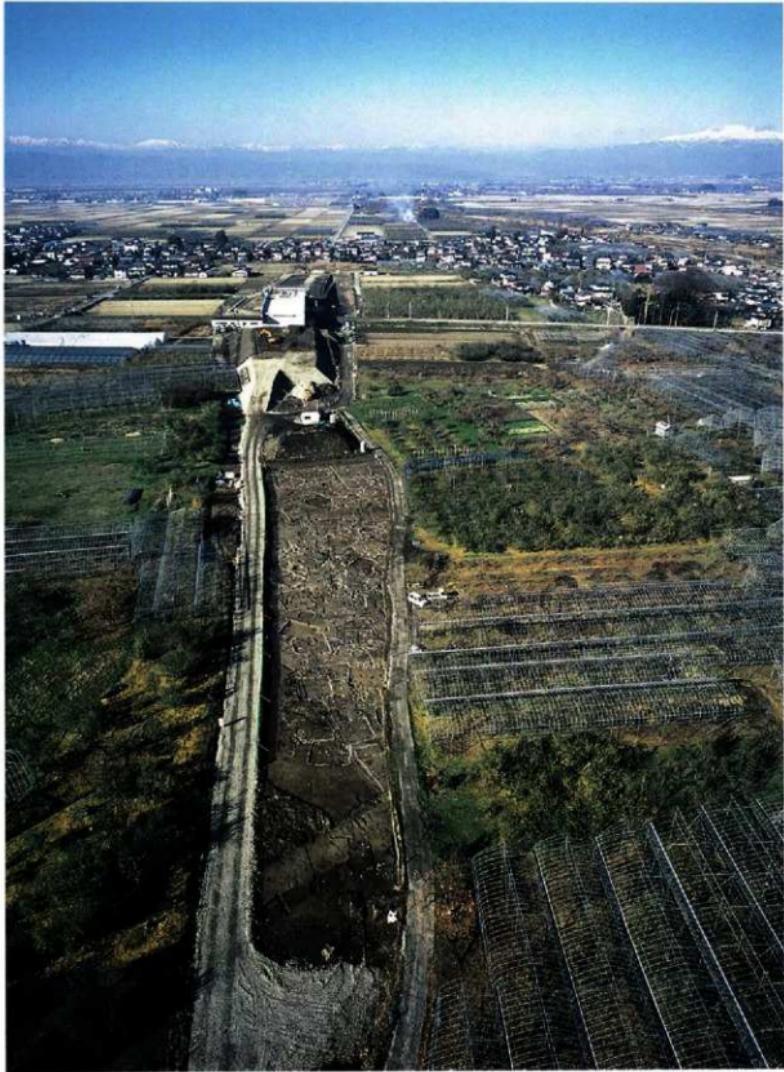
—市道立谷川北志田線道路整備事業—
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2001

山形市教育委員会
山武考古学研究所

一ノ坪遺跡

卷頭図版1
(航空写真)



遺跡遠景（東から）

一ノ坪遺跡

卷頭図版2
(出土遺物)



上. 古墳時代前期の土器



下. 古墳時代後期の土器

序 文

本書は、平成12年度緊急地域雇用特別基金事業に採択されたことを受けて、山武考古学研究所に調査を委託して実施した「一ノ坪遺跡」発掘調査の成果をまとめたものです。

遺跡のある山形市漆山は市北部に位置し、市内有数の果樹地帯になっています。毎年春には多種多様な果樹の花々が咲き誇り、奥羽山脈から雪解け水をあつめて流れる立谷川と西方の残雪をいだいた月山、朝日連峰などを背景にする景観は、春の山形を代表する風景の一つです。今調査は、この地域を通る市道の改良工事に先立って実施されたものです。

調査では古墳時代の竪穴住居跡や溝跡、平安時代では竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが多く検出され、土器や炭化した米、漆紙文書など当時の生活内容を考察する上で貴重な資料を得ることができました。

近年は、市内各所において、住民福祉の向上を目的とした各種の社会整備に関する開発事業が増加しており、埋蔵文化財保護との調整の結果、遺跡の発掘調査に至る場合が多くなっています。山形市内には約300ヶ所の埋蔵文化財を包蔵する遺跡が確認されていますが、これらの遺跡は、郷土の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。当市教育委員会では、今後とも、開発事業との調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護により一層努めてまいります。

本書が、埋蔵文化財の保護・啓蒙のために、そして皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた地元の方々をはじめ、工事関係者の皆様並びに関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成13年11月

山形市教育委員会
教育長 相田良一

例　　言

1. 本書は、山形市による市道立谷川北志田線道路整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査経費は山形県緊急地域雇用特別基金事業の基金助成を得て実施した。
3. 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、山形市教育委員会の指導のもとに山形市の委託を受けて山武考古学研究所が行った。
4. 遺跡の所在地・面積・調査期間・調査担当者は下記の通りである。

遺　跡　名	一ノ坪遺跡
所 在 地	山形県山形市大字漆山字一ノ坪2285～2294番地
調 査 面 積	9,000m ²
調 査 期 間	平成12年度
	発掘調査　平成12年5月12日～平成12年12月22日
	整理調査　平成13年1月12日～平成13年3月28日
	平成13年度
	整理調査　平成13年5月15日～平成13年9月29日
調 査 指 導	武田 和宏（山形市教育委員会 文化課文化財係 主事（平成12年度）） 齊藤 仁（山形市教育委員会 文化課文化財係 主事（平成12年度）） 須藤 英之（山形市教育委員会 文化課文化財係 主事（平成12年度）） 國井 修（山形市教育委員会 文化課文化財係 主事（平成12年度）） 岩井 良太（山形市教育委員会 文化課文化財係 臨時職員（平成12年度））
調査担当者	長谷川一郎 有山 径世 土生 朗治（山武考古学研究所員）
5.	漆紙文書、墨書き器について国立歴史民俗博物館副館長 平川南教授・東京大学大学院 新井重行氏に判読をお願いし、新井氏より玉稿を賜った。
6.	漆については東北芸術工科大学講師 松井敏也氏に分析をお願いした。
7.	炭化米の分析は㈱古環境研究所に依頼した。
8.	本書の執筆・編集は有山径世・土生朗治・武田和宏が行った。
9.	調査にかかわる図面・写真・遺物等の資料は、一括して山形市教育委員会が保管している。
10.	発掘および整理調査において下記の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。 記して感謝の意を表するものである。（敬称略）
	平川 南 佐藤庄一 植松暁彦 松井敏也 新井重行 山形県教育庁文化財課 山形市シルバー人材センター 山形県森林組合連合会（㈲新成田総合社 ㈱東日本重機 開成測量㈱ J T 空撮 ㈱古環境研究所
11.	発掘調査・整理調査参加者は次のとおりである。（五十音順）
	発掘調査
	赤坂德子 浅香憲一 芦野光雄 阿部清一 阿部正弘 荒井 功 荒井菊三郎 荒井治良 飯田利郎 五十嵐武夫 石沢富雄 伊藤省三 岩田 嶽 岩田久栄 岩淵武夫 間間恒子 枝松金一 遠藤 久 大木敏雄 大津 弘 大貫文義

大宮 努 小笠原吉二 加々尾康雄 稲谷和夫 川口昭佳 菊地きみ代 岸野松雄
熊谷 繁 熊谷 侃 栗原清子 栗原武夫 斎藤恵子 斎藤正雄 斎藤みさ子
酒井弘江 笠 利幸 佐藤昭司 佐藤智敏 佐藤 博 佐藤正光 澤口辰雄
三部秋夫 志田英信 柴田 繁 島貫昭二郎 清水理太郎 菅原 広 鈴木清志
鈴木輝男 鈴木富也 清野 愛 清野 黙 高橋清治 武田栄一 田中昭男 田中忠一
堤 操 土屋雅志 富沢啓広 土門 弘 中村達久 中村恭久 長岡 忠 長岡久男
長岡伸恭 長橋修一 新関章吾 新関久子 仁藤次郎 日塔 繁 原田茂伯 半沢郁造
菱沼一美 藤井富士夫 船山周勝 保科源則 本間ひさ代 正木恵子 増川良子
松井清司 三河真一 峰岸 勇 村岡洋子 森田 誠 山口澄子 山口又美 山崎 章
横川ひろみ 横山内宥 渡辺利喜雄
整理調査
石井百々子 伊藤順子 内野寿子 江頭宏枝 江口弘子 大橋美代子 大道登起子
大宮紀江 大竹美奈子 片岡美和子 河村公子 菅野栄子 木村泰代 黒田宣子
佐藤洋子 神保博子 末廣弘子 田口るみ子 戸嶋明夫 西渕明子 根本時子 藤井陽子
本田利子 牧野豊子 山本佐智子 山本千春

凡 例

1. 本書に使用した地形図等は以下の通りである。

第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図「山形北部」

第2図 山形市・天童市発行 1:2,500『山形市29-3七浦』『山形市29-4新開』を63%縮小編集

2. 位置図、地形図及び遺構実測図中の方位は全て座標北を示す。

3. 本書の挿図の縮尺は、下記の通りである。

全体測量図 1/300

遺構実測図 壁穴住居跡 1/60 窓 1/30 挖立柱建物跡 1/80・1/100

欄列 1/80 獣状遺構 1/120 溝跡 1/100・1/120

土坑 1/60 不明遺構 1/60

遺物実測図 土器 1/3・1/4 土製品 1/3 鉄製品 1/2

石製品 1/3・1/4・2/3 古銭 1/1

4. 遺物写真的縮尺は、下記の通りである。

土器 1/3 土製品・石製品・鉄製品 1/2

5. 遺構番号は、現地調査段階で付した番号を報告書においても踏襲した。同様に現地で欠番としたものは欠番のままとなっている。

6. 遺構・遺物番号は、本文・挿図・表・写真図版共に一致している。

7. 遺構一覧表及び本文中で用いる遺構についての用語・数値は、以下のとおりである。

壁穴住居跡

平面規模は壁部下端の辺長を計測した。周溝を持つ住居跡は周溝内側で計測した。床面積は長軸に短軸をかけた数値である。主軸方向は竈を通る中心線を軸線とし、座標北に対する傾きを記した。竈を伴わない住居跡については長軸方向とした。

掘立柱建物跡

柱間数に関わらず、平面形の長軸を「桁行」、短軸を「梁行」とした。棟方向は座標北に対する長軸方向の傾きを記した。床面積は長軸に短軸をかけた数値である。

畝状遺構

遺存していたのは「畝立て」に掘られた「サク」であり、サクは削平されて消滅しているが、このサクを「畝状遺構」と呼ぶ。サクとサクの間を「畝合い」と呼ぶ。

8. 土坑・ピットは、柱痕確認のできたもの、遺物の出土したものについて遺構番号を付した。
9. 須恵器・赤焼土器の調整技法「回転ナデ」については、遺物観察表内の記述を省略した。
10. 土層説明および遺物観察表の色調の記載は、1996年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲げる。
11. 遺構図・遺物実測図中で使用した記号・スクリーントーンは以下の内容を示す。

遺構図

地山 灰・炭化物 焼土

粘土 柱痕 跡

●土器出土位置 ■石器出土位置

遺物実測図

黒色処理範囲 赤彩範囲

油煙範囲 割れ口

● 須恵器 ○ 赤焼土器 「灰」 灰釉陶器

本文目次

序文	
例言・凡例	
序章	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 位置と自然環境	2
第3節 歴史的環境	2
第1章 調査の方法と経過	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の経過	7
第3節 基本層序	9
第2章 遺跡の概観	10
第3章 検出された遺構と遺物	13
第1節 縄文時代	13
第2節 古墳時代	15
1 竪穴住居跡	15
2 土坑	39
3 溝跡	39
4 不明遺構	39
5 遺構外出土遺物	39
6 出土遺物	41
第3節 奈良・平安時代	51
1 竪穴住居跡	51
2 掘立柱建物跡	73
3 横列	82
4 土坑	82
5 溝跡	91
6 敵状遺構	93
7 遺構外出土遺物	93
8 出土遺物	96
第4章 まとめ	119
第1節 古墳時代の集落跡について	119
第2節 奈良・平安時代の集落跡について	127
附章	133
第1節 漆紙文書について	133
第2節 古墳時代住居跡出土の炭化米分析	135

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	3	第38図 SI39・43出土遺物	47
第2図 遺跡調査区域図	4	第39図 SI43・48・49出土遺物	48
第3図 調査区グリット設定図	6	第40図 SI54出土遺物	49
第4図 基本堆積土層図	9	第41図 SK69・78・SX 5・遺構外出土遺物	50
第5図 古墳時代遺構分布図	11	第42図 SI 1	51
第6図 奈良・平安時代遺構分布図	12	第43図 SI10・41	53
第7図 繩文時代出土遺物	14	第44図 SI11	54
第8図 繩文時代遺物出土地点図	14	第45図 SI12	55
第9図 SI 2	16	第46図 SI15	56
第10図 SI 7	17	第47図 SI15竪	57
第11図 SI47	18	第48図 SI16・17・20	58
第12図 SI 3 竪	19	第49図 SI16竪・17竪	59
第13図 SI 3	20	第50図 SI18	60
第14図 SI 4	21	第51図 SI19	60
第15図 SI 5	22	第52図 SI25	61
第16図 SI 6	23	第53図 SI27	62
第17図 SI 9	24	第54図 SI29	63
第18図 SI13	25	第55図 SI30	64
第19図 SI13竪	26	第56図 SI33	65
第20図 SI22	27	第57図 SI37・38	66
第21図 SI23	28	第58図 SI44	67
第22図 SI24・46	29	第59図 SI45	67
第23図 SI31	30	第60図 SI50	68
第24図 SI32	31	第61図 SI51	69
第25図 SI39	32	第62図 SI52	70
第26図 SI39竪	33	第63図 SI53	71
第27図 SI43	34	第64図 SI55	72
第28図 SI48	35	第65図 SB 1	73
第29図 SI49	36	第66図 SB 4	74
第30図 SI54	37	第67図 SB 7	75
第31図 SI54竪	38	第68図 SB 9	76
第32図 SK69・78・SD10・SX 5	40	第69図 SB10	77
第33図 SI 2・3・7・47出土遺物	42	第70図 SB11	78
第34図 SI 3・4・5出土遺物	43	第71図 SB12	79
第35図 SI 6・9・13出土遺物	44	第72図 SB13	80
第36図 SI13・22・23・24出土遺物	45	第73図 SB16・17	81
第37図 SI24・31・32出土遺物	46	第74図 SA 1	82

第75図 土坑・ピット（1）	83
第76図 土坑・ピット（2）	85
第77図 SK 2・3・11	88
第78図 SK13・14・17・20・28・29・31・46・64	89
第79図 SK110・160・185・196・256・260	90
第80図 SK288・295・355	91
第81図 SD 5	92
第82図 SD 6	93
第83図 1号竪状遺構	94
第84図 2号竪状遺構	95
第85図 SI 1・10・11・12・15出土遺物	97
第86図 SI16・17・18・19出土遺物	98
第87図 SI20・27・29・30・33・37・38出土遺物	99
第88図 SI44・45・50・51・53出土遺物	100
第89図 SB7・9・10・11・12・13出土遺物	101
第90図 SK 2 出土遺物	102
第91図 SK 3・11・13・14・17・20・28・29・ 31・46出土遺物	103
第92図 SK64・110・160・185・196・256・ 260・288・295・355出土遺物	104
第93図 SD 5・55出土遺物	105
第94図 墨書・刻書土器写真	105
第95図 SP58・170・SX12・13・遺構外 出土遺物	106
第96図 古墳時代住居跡の規模	119
第97図 古墳時代住居跡の主軸方位	119
第98図 古墳時代住居跡の形態	120
第99図 古墳時代住居跡の構造	123
第100図 古墳時代集落変遷図	125
第101図 奈良・平安時代住居跡の構造	127
第102図 奈良・平安時代集落変遷図(1)	129
第103図 奈良・平安時代集落変遷図(2)	130
附 図 一ノ坪遺跡全体測量図	

表 目 次

表1 堪穴住居跡一覧表（1）古墳時代	107
表2 堪穴住居跡一覧表（2）奈良・平安時代	107
表3 堪穴住居跡一覧表（3）奈良・平安時代	108
表4 捶立柱建物跡一覧表	108
表5 棚列一覧表	108
表6 土坑一覧表（1）	109
表7 土坑一覧表（2）	110
表8 土坑一覧表（3）	111
表9 溝跡一覧表（1）	111
表10 溝跡一覧表（2）	112
表11 ピット一覧表（1）	112
表12 ピット一覧表（2）	113
表13 遺物観察表（1）	114
表14 遺物観察表（2）	115
表15 遺物観察表（3）	116
表16 遺物観察表（4）	117
表17 遺物観察表（5）	118

写真図版目次

- 卷頭図版 1 遺跡遠景（東から）
- 卷頭図版 2 上. 古墳時代前期の土器
下. 古墳時代後期の土器
- 図版 1 1. 西地区全景（上が北）
2. 東地区全景（上が北）
- 図版 2 1. 東地区北西側全景（上が北）
2. 東地区北東側全景（上が北）
- 図版 3 1. SI 2 炭化材出土状況（南から）
2. SI 2 完掘状況（南から）
3. SI 2-P3セクション（東から）
4. SI 7 炭化材出土状況（南西から）
5. SI 7 完掘状況（南西から）
6. SI 47 炭化材出土状況（西から）
7. SI 3 挖り方（南から）
8. SI 3 窟遺物出土状況（南から）
- 図版 4 1. SI 4 遺物出土状況（南から）
2. SI 4 貯蔵穴遺物出土状況（南から）
3. SI 5 完掘状況（南から）
4. SI 5 窟遺物出土状況（南から）
5. SI 5 勾玉・白玉出土状況（南から）
6. SI 6 完掘状況（南から）
7. SI 9 南西部遺物出土状況（南から）
8. SI 9 遺物出土状況 近景（南から）
- 図版 5 1. SII 3 遺物出土状況（南から）
2. SII 3 窟遺物出土状況（南から）
3. SII 3-P2・3 遺物出土状況（南から）
4. SII 22 完掘状況（南から）
5. SII 23 完掘状況（南から）
6. SII 23 窟遺物出土状況（南から）
7. SII 24・46 遺物出土状況（西から）
8. SII 24 窟遺物出土状況（西から）
- 図版 6 1. SI 31・50 完掘状況（北から）
2. SI 32 完掘状況（南西から）
3. SI 32 遺物出土状況 近景（西から）
4. SI 39 完掘状況（西から）
5. SI 39 窟遺物出土状況（西から）
- 図版 7 6. SI 43 遺物出土状況（南から）
7. SI 43 遺物出土状況 近景（東から）
8. SI 48 完掘状況（南東から）
- 図版 8 1. SI 49 完掘状況（北から）
2. SI 54 完掘状況（南東から）
3. SI 54 窟遺物出土状況（南東から）
4. SI 54 貯蔵穴遺物出土状況（北から）
5. SI 1 完掘状況（北から）
6. SI 1 窟遺物出土状況（北西から）
7. SI 10・41 完掘状況（東から）
8. SI 11 完掘状況（南東から）
- 図版 9 1. SI 11 窟遺物出土状況（南東から）
2. SI 12 完掘状況（北から）
3. SI 12-P 8 遺物出土状況（北から）
4. SI 15 完掘状況（南西から）
5. SI 15 窟遺物出土状況（南から）
6. SI 15 窟袖構築材出土状況（南から）
7. SI 16 完掘状況（西から）
8. SI 16 窟遺物出土状況（西から）
- 図版 10 1. SI 17 完掘状況（西から）
2. SI 18 遺物出土状況（南から）
3. SI 19 完掘状況（北から）
4. SI 20 窟遺物出土状況（北から）
5. SI 25 遺物出土状況（北から）
6. SI 27 完掘状況（南西から）
7. SI 29 完掘状況（南東から）
8. SI 30 完掘状況（北から）
- 図版 11 1. SI 33 完掘状況（南から）
2. SI 37 遺物出土状況（南から）
3. SI 38 遺物出土状況（東から）
4. SI 44 完掘状況（北から）
5. SI 45 完掘状況（北から）
6. SI 51 完掘状況（南から）
7. SI 52 完掘状況（南から）
8. SI 53 完掘状況（北から）

- 図版11 1. SI53竈遺物出土状況（北から）
2. SI55完掘状況（東から）
3. SB 1 - P 8～13完掘状況（西から）
4. SB 1 - P 14～16完掘状況（西から）
5. SB 4 全景（南から）
6. SB 7 全景（北から）
7. SB 9 全景（北から）
8. SB11全景（北から）
- 図版12 1. SB10・SD 5 全景（上が北）
2. SB10-P 3 セクション（南から）
3. SB10-P10セクション（南から）
4. SB10-P11セクション（南から）
5. SB10-P12セクション（南から）
- 図版13 1. SB12全景（北から）
2. SB13全景（南から）
3. SB16全景（南から）
4. SB17全景（北から）
5. SK 2・3 遺物出土状況（南から）
6. SK160完掘状況（南から）
7. SD 6 磚出土状況（東から）
8. SD10完掘状況（東から）
- 図版14 繩文時代出土遺物・SI 2・3・7・47出土遺物
- 図版15 SI 3・4・5・6・9出土遺物
- 図版16 SI13・22・23・31・39出土遺物
- 図版17 SI32出土遺物
- 図版18 SI43・48・54・SK69・78・遺構外出土遺物
- 図版19 遺構外出土遺物
- 図版20 SI 1・10・11・12・15・16・18出土遺物
- 図版21 SI18・19・27・29・30・33・38出土遺物
- 図版22 SI45・50・51・53・SB 7・9・11・12・13出土遺物
- 図版23 SK 2・3・11・13・14出土遺物
- 図版24 SK17・20・28・29・31・46・64・110・185出土遺物
- 図版25 SK196・256・260・288・295・355・SD 5・55出土遺物
- 図版26 SP58・170・SX12・13・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いちのつばいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	一ノ坪遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	有山徑世 土生朗治 武田和宏
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 Tel 0476-24-0536
発行機関	山形市教育委員会 〒990-8540 山形県山形市旅籠町2-3-25 Tel 023-641-1212
発行年月日	2001年11月30日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町 村	遺跡番号					
いちのつばいせき 一ノ坪遺跡	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 おおむねさんじや 大学棟山 あざいちらのづ 字一ノ坪	6201	平成9年度登録	38度 18分 58秒	140度 21分 21秒	20000512 ～ 2001222	9,000	市道立谷川北 志田線道路整 備事業

種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
集落跡	縄文時代 晩期末			縄文土器 石器		大洞A'式期併行の土器出土。
	古墳時代 前期・後期	竪穴住居跡 土坑 溝跡	20軒 2基 1条	土師器、須恵器、円筒埴輪、土玉、土製紡錘車、砥石、石製模造品(勾玉・臼玉)、炭化米、漆		村山地方で例の少ない古墳時代の良好な資料出土。
	奈良・平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 櫛列 土坑 溝跡 畝状遺構	26軒 10棟 1条 266基 24条 2群	土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、風字硯、漆紙文書、羽口、刀子、銅錢		S K 160から漆紙文書が出土。墨書土器、刻書土器、風字硯出土。 (出土遺物総箱数170箱)

序 章

第1節 発掘調査に至る経緯

本遺跡は、山形市漆山地内に所在し、主要地方道山形天童線道路改築事業に伴う山形県文化財課による分布調査により新規に発見された遺跡で、平成9年度に登録されている。

平成10年2月に山形市建設部長から、山形市教育委員会に対して市道立谷川北志田線道路改良計画に係る「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会があった。当該事業地の一部には、周知の埋蔵文化財「一ノ坪遺跡」が所在することから、その取扱いについて関係機関で協議をおこなった。

教育委員会では、当該事業地が「一ノ坪遺跡」にかかること及びその事業面積が31,000m²と規模の大きい開発であることから、平成10年4月30日に事業地の全域を対象に表面踏査を実施した。その結果、「一ノ坪遺跡」の存在が再確認されるとともに、加えて2ヶ所の遺跡可能性地の存在も予想された。この結果を受けて関係機関でこれらの遺跡及び遺跡可能性地の取扱いについて再度協議をおこない、当該事業地の買収が終了した区域から順次試掘調査を実施していくこととなった。これにより、平成10年7月28日から29日、同年12月25日及び翌平成11年5月24日から28日の3度に涉って試掘調査を実施した。その結果、当該事業地のほぼ全域から遺構・遺物が検出されて、「一ノ坪遺跡」が広範囲に広がることが明らかになった。また、2ヶ所の遺跡可能性地でも同様の遺構・遺物が検出されて、「一ノ坪遺跡」の広がりに含まれるものと判断された。ちなみに平成11年度には、同遺跡の県道にかかる部分について山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。その結果、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などがそれぞれ数棟検出されるなど、良好な古代の集落遺跡であることが明らかになっている。

こうした事前調査等の結果を受け、当教育委員会では関係機関と遺跡の保存協議を再度おこなった。協議の結果、同遺跡への工事の影響が及ぶ部分約9,000m²については全域を発掘調査の対象として記録保存をはかることとなった。なお発掘調査については、調査事業が平成12年度の緊急地域雇用特別基金事業に採択されたことを受け、民間の山武考古学研究所に委託して実施したものである。

第2節 位置と自然環境

一ノ坪遺跡は、山形市の北部、天童市に近接した山形市大字漆山字一ノ坪に所在する。JR奥羽本線漆山駅の北東約700mの果樹園中にあり、標高は約112mを測る。

この付近は山形盆地の南部低地に位置し、地形的には馬見ヶ崎川・立谷川扇状地と須川沿岸低地とに区分される。このうち、立谷川扇状地は奥羽山脈の面白山付近に源を発して西流し、須川に注ぐ立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川へ注ぐ村山高瀬川によって形成された複合扇状地帯である。本遺跡はこの扇端部分に当たる。

遺跡は、立谷川左岸の自然堤防上に立地しており、調査区の東西両端の地山では河床礫が確認されている。このことから、遺跡の北を流れる立谷川の度重なる洪水により、川の流路が頻繁に変遷し、上流から運搬された大量の砂礫などが堆積して次第に地形が形成されていったことが窺える。

また、調査区内では古墳時代と奈良・平安時代の遺構が地表下約50cm未満のはば同一レベル上で検出され、この時期に居住地として利用した地盤は比較的安定していたと考えられる。

現在この付近は果樹園であるが、かつては水田地帯として利用されていた。洪水が自然堤防上を越えて後背湿地に適度の肥料を供し、生産基盤としての好条件を備えた地域であったと考えられる。

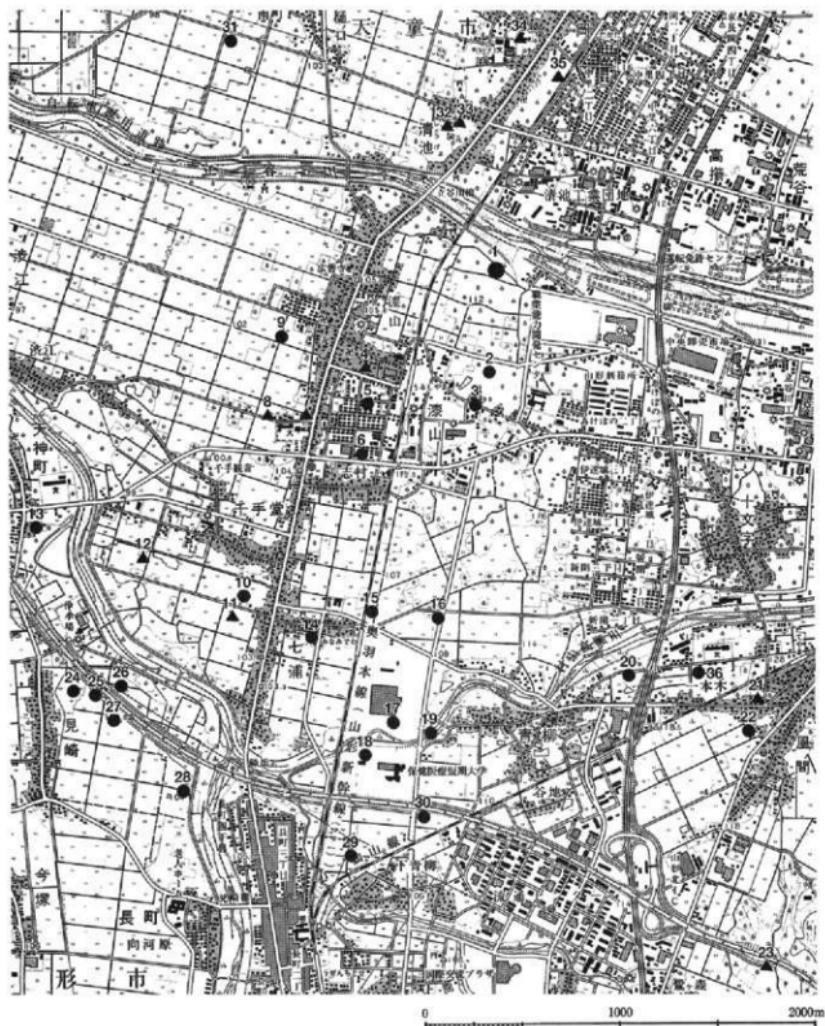
第3節 歴史的環境

遺跡周辺には、自然湧水の豊富な立谷川扇状地や村山高瀬川扇状地の扇端部付近に遺跡が集中している。本格的な稲作の営まれる弥生時代以降の遺跡は、低湿地を利用した水田經營に適した平野部へと進出する様相が窺える。

遺跡の南側には北柳1遺跡が所在し、縄文時代晩期終末～弥生時代中期初頭の土器が出土している。南西方向には弥生時代中期の樹形圓式の土器が出土した漆山遺跡、後期の桜井I式の土器や石包丁が出土した七浦遺跡、桜井II式の粉痕土器が出土した江俣遺跡が所在している。

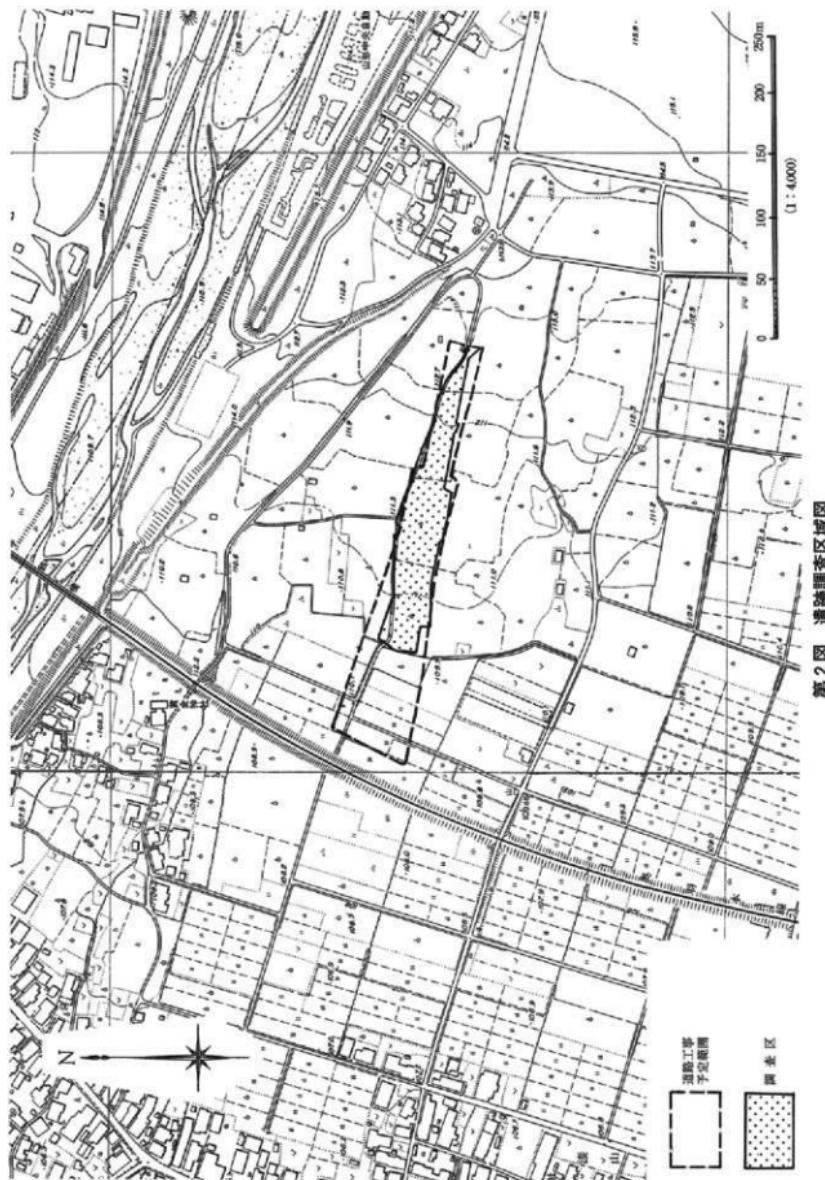
古墳時代に入ると遺跡数は増加する。集落遺跡としては本遺跡の南側に在る下柳A遺跡、ほぼ同じ等高線上に在る梅ノ木遺跡が知られている。また、南西1.2kmには、昭和28年の道路工事の際に発見され、学史的にも著名な衛守塚古墳群が所在している。墳丘の周囲に木柱を立て並べ削竹形木棺を埋設した円墳や、箱式石棺を主体部とした古墳が確認されている。南西約800mには柴崎古墳群、6～7世紀末のお花山古墳群、7世紀後半の風間古墳、七浦古墳群等が所在し、盛んに古墳が築造されたことが窺える。

奈良・平安時代になるとさらに遺跡数は多くなる。本遺跡と同等高線上に位置する8世紀後半～9世紀代の漆山長表遺跡、村山高瀬川上流部の左岸地域の一本木A、一本木B遺跡、寺西遺跡、下流域白川左岸の境田C'、境田D遺跡、見崎遺跡、天神遺跡、新井田遺跡等、広範で密な分布を示している。



- (1 : 25,000)
- | | | | | |
|------------------|-----------------|---------------|---------------|----------------|
| 1 一ノ坪遺跡（古・奈～平） | 2 那ノ木遺跡（古・奈～平） | 3 伊達の城跡群（室） | 4 衛藤古墳群（古） | 5 北道上A道跡（奈） |
| 6 北道上B道跡（奈～平） | 7 南守郷古墳群（古） | 8 守郷2号墳（古） | 9 建山遺跡（弥） | 10 七浦遺跡（3塁） |
| 11 七浦（風山）古墳群（古） | 12 七浦（風山）2号墳（古） | 13 天神遺跡（奈～平） | 14 五反道跡（古） | 15 大明神遺跡（奈～平） |
| 16 風山長良遺跡（古・奈～平） | 17 北桜1号墳（弥） | 18 下桜C道跡（奈～平） | 19 下桜A道跡（古） | 20 一本木B道跡（奈～平） |
| 21 間所免古墳（古） | 22 寺西遺跡（奈～平） | 23 お花山古墳（古） | 24 埼田C道跡（奈～平） | 25 埼田C'道跡（奈～平） |
| 26 埼田B道跡（奈～平） | 27 埼田D道跡（奈～平） | 28 埼田A道跡（奈～平） | 29 白山堂遺跡（古） | 30 下櫻B道跡（古） |
| 31 高麗南遺跡（古） | 32 火矢原1号墳（古） | 33 火矢原2号墳（古） | 34 下達矢塚古墳（古） | 35 上達矢塚古墳（古） |
| 36 一本木A道跡（奈～平） | | | | |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡



第1章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

発掘調査

調査区は、公共座標を基準とした10mのグリッドを設定して調査区全域に被せた。グリッド番号は、北西隅のX=-186710、Y=-41910を起点とし、南北方向は北から南へA・B・C…Jと付し、東西方向は西から東へ1・2・3…26と付した。さらにグリッドを4分割して、5mの小グリッドを設定し、北西を(a)、北東を(b)、南西を(c)、南東を(d)とした。呼称は、大グリッド番号を前に付して「A-1(a)」のように表記した。

調査は、工事の都合上、11ライン（Y=-41810）を基準に東西に区分して行った。先に工事を着工する調査区の西側から調査を開始し、次いで東側へと移った。東側は、さらに調査区南端から12m幅を基準として南北に分け、南側を優先して調査を行った。

重機による表土除去の後、人力で遺構の検出及び精査を進めた。遺構完掘後は全体清掃を行い、ラジコンヘリコプターを使用して航空写真撮影を実施した。

遺構・遺物の記録は、縮尺1/20を基本として平面・断面図を作成した。竪穴住居跡内の竈や遺構内の細部は1/10、溝跡は1/40で実測した。写真撮影は、調査の各段階で適時行い、白黒35mm、カラースライド35mm、白黒6×7判を用いて記録した。

整理調査

整理調査は、山武考古学研究所において、発掘調査により得られた資料・遺物を対象にして実施した。遺物は遺物収納箱（大）170箱分が出土した。

出土遺物については、細片に至るまで全量水洗いした後、インクジェットプリンターを使用して、微細片を除き注記を行った。注記には、以下の略号を用いた。

一ノ坪遺跡	…イチノツボ	竪穴住居跡	…S I	竈	…カ	炉	…ロ
掘り方	…掘り方	床直	…床直	掘立柱建物跡	…S B	横列	…S A
土坑	…SK	溝跡	…SD	ピット	…SP	不明遺構	…SX
覆土	一括	…無表記					

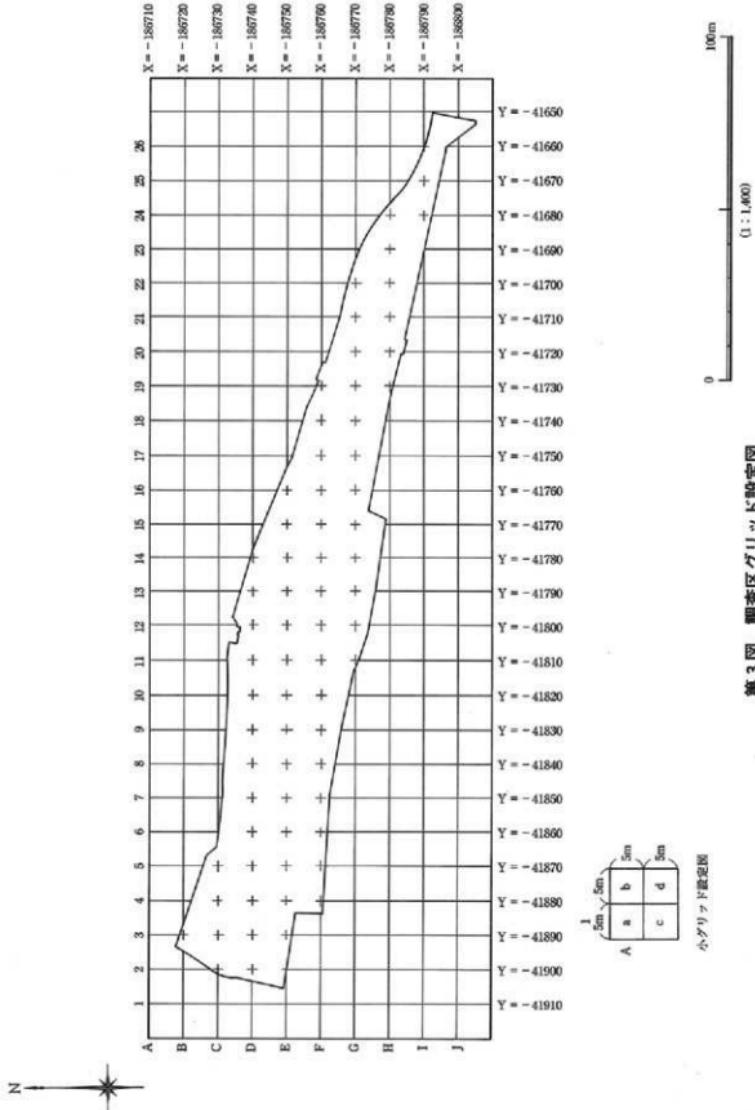
例) 一ノ坪遺跡 1号竪穴住居跡Na1 遺物 …イチノツボ・S I 1・1

一ノ坪遺跡 A-1 (a) グリッド遺物 …イチノツボ・A 1 a

接合にはセメダインCを使用し、全ての遺物に関して可能な限り行った。復元はエポキシ系樹脂（バイサム）を用い、報告書掲載遺物について実施し、一部展示に耐え得る状態になるまで行った。実測は、同じく報告書掲載遺物について原寸で行った。記録写真は、白黒6×7判を使用して撮影した。

遺構については、個別に検討して図面修正を行った。また修正を加えた平面図を元に、縮尺1/200の全体測量図を作成した。

なお、今回の調査に関わる図面・写真・遺物等の資料は、本報告書作成後は一括して山形市教育委員会が保管している。



第2節 調査の経過

発掘調査は平成12年5月12日～同年12月22日まで行い、その後、整理作業を平成13年1月12日～同年3月28日と平成13年5月15日～同年13年9月29日の2期に分けて行った。

発掘調査日誌抄

平成12年

5月

12日、プレハブの設営、発掘機材の搬入を行う。中～下旬にかけて調査区内の樹木の伐採作業を行う。下旬、調査区西側より重機による表土除去を開始し、追って遺構確認作業を行う。方眼杭・基準杭を打設する。

6月

上旬、調査区西側の表土除去及び遺構確認作業を継続する。中旬、西側の遺構調査、東側南の表土除去を開始する。

7月

上旬、調査区西側の遺構調査を中心に作業を進める。東側南半は表土除去と並行して、遺構確認作業を行う。中～下旬、西側と東側南の遺構調査を継続する。東側南に方眼杭・基準杭を打設する。

8月

上旬、調査区西側は遺構調査を継続する。また、東側南は表土除去及び遺構確認作業を継続する。その結果、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡等が切り合って多数検出されたため、遺構確認作業は困難を極めた。中～下旬、西側・東側南の遺構調査を継続する。表土除去は東側北へと進行する。東側北に方眼杭・基準杭を打設する。プレハブ設営地区の遺構調査を行うため、プレハブを移設する。

9月

上旬、調査区西側の航空写真撮影を行い、調査を終了する。東側北の表土除去を継続する。また市教育委員会、市道路河川課との協議の結果、雇用対策による作業員の増員及び、10月上旬の調査区東側北の道路工事着工が決定した。これに伴い、市教育委員会から調査員が着任する。また基礎整理のため、山武考古学研究所より調査員を増員する。中～下旬、全ての表土除去を終了する。東側北に方眼杭・基準杭を打設し、遺構確認作業及び遺構掘り下げ作業を開始する。



表土除去状況



遺構掘り下げ作業状況



遺構実測状況



航空写真撮影

10月

上旬、調査区東側南の調査を終了する。東側北は調査を継続する。特に中央部分では東側南同様に遺構が高い密度で遺存している。

11月

調査区東側北の遺構調査を継続する。奈良・平安時代の遺構を中心に調査を進め、追って古墳時代の遺構調査を行う。25日、現地説明会を実施する。



現地説明会

12月

上旬、調査区東側北の遺構調査を継続し、航空写真撮影を行う。中旬、遺構調査を全て終了する。19日、市教育委員会及び市道路河川課により終了確認を行う。発掘機材、出土遺物等を撤出する。プレハブの解体を行い、22日、現地での作業を終了する。

整理作業日誌抄

平成13年

1月

12日、整理調査を開始する。遺物の水洗いを行う。現場で作成した遺構図面の修正を行う。



遺物水洗い状況

2月

遺物の水洗い・注記・接合を行う。遺構図面修正を行い、全体測量図を作製する。



遺物接合・復元状況

3月

遺物の注記・接合・復元、遺構図面のトレースを行う。

6月

遺物の復元・写真撮影、遺構写真的版組を行う。

7月

遺物の実測・写真版組、台帳類の作成を行う。

8月

遺物実測図のトレース、遺構・遺物図面の仮版組を行う。台帳類の作成を行う。

9月

遺構・遺物図面の版組、台帳類の作成を行う。返還準備を行い、整理調査を終了する。

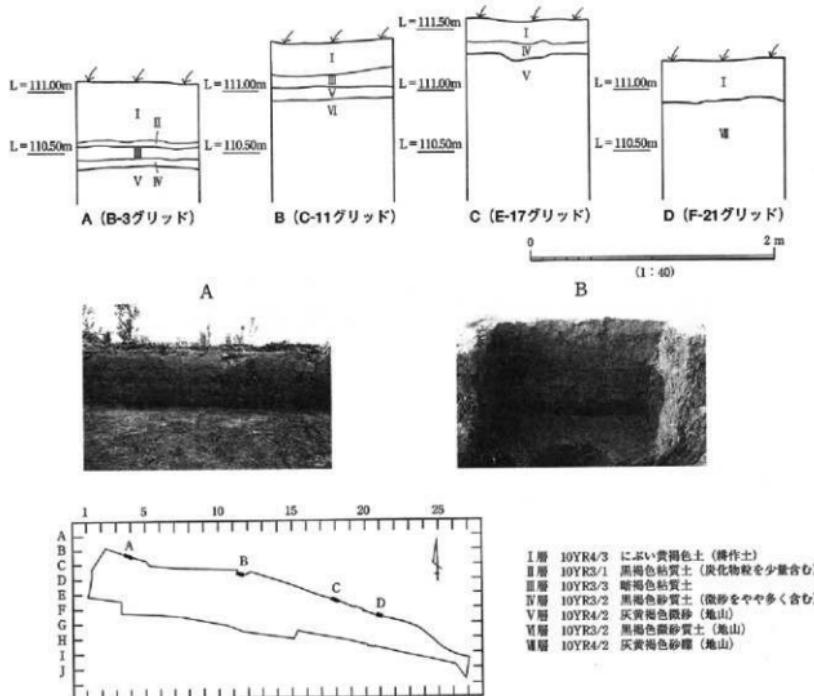


遺物実測状況

第3節 基本層序 (第4図)

遺跡の土層堆積の観察は調査区北壁で行った。その結果、遺構確認面の地勢は東から西に向かって緩やかに高さを減じ、その比高差は2mを測る。堆積土層は、遺跡の北を流れる立谷川の影響を受け、場所により微妙に土色・含有物・層厚に差が生じている。また、全体に酸化鉄及び白色微粒子が含まれている。

I層は耕作土（層厚20~50cm）である。II層は黒褐色粘質土（層厚5~10cm）で、所々耕作を受けているため断続的にしか確認できない。III層は暗褐色粘質土（層厚5~20cm）で、調査区の西側では確認されるが、中央部から東側では確認されない。IV層は黒褐色砂質土（層厚5~20cm）である。V層は灰黄褐色微砂質土（層厚15~20cm）の地山で、遺構検出はこの上面で行った。VI層は黒褐色微砂質土（層厚10~15cm）で、調査区の中央部で確認された。VII層は灰黄褐色砂礫で、細砾及び20cm大の砾からなる。VIII層は、調査区の東西両端では、I層の直下まで上昇しているが、中央部では深く潜り込んでいるようである。



第4図 基本堆積土層図

第2章 遺跡の概観

本遺跡は、立谷川と村山高瀬川によって形成された複合扇状地帯の扇端部に立地している。この付近は立谷川の氾濫により適度の肥料が供給され、耕作地として良好な地帯であったと思われる。遺構は主に古墳時代・奈良・平安時代の集落にかかるものであり、竪穴住居跡46軒、掘立柱建物跡10棟、柵列1条、土坑268基、溝跡25条、畝状遺構2群、ピット157基、不明遺構11ヶ所が検出された。調査区の東西両端の地山は河床疊層となり、遺構の分布は疊層を避けた調査区中央部に密集して確認され、さらに南北両方向へ広がるものと考えられる。

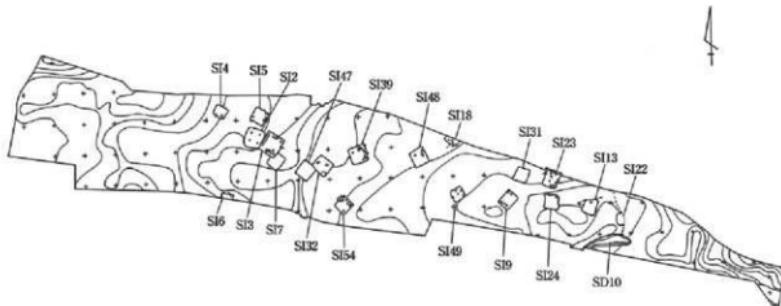
最古の出土遺物として、縄文時代晚期終末大洞A'式併行期の土器及び石錐が確認されている。当時期に該当する周辺の遺跡には、晚期後葉の埋設土器群が検出された山形市梅ノ木遺跡や、晚期終末～弥生時代中期初頭の土器が出土した山形市北柳1遺跡等が散見される。また近隣の天童市や、北村山郡の最上川中流域にも数多くの遺跡が所在し、東根市蟹沢遺跡や河北町花ノ木遺跡等が知られている。出土遺物や周辺遺跡の状況から、本遺跡に縄文時代晚期末の集落が営まれていた可能性は十分考えられるが、今回の調査では遺構は確認できなかった。

古墳時代になると、前期と後期の2時期の竪穴住居跡群が認められる。前期は調査区の西側で3軒の住居跡が検出されており、小規模な集落が営まれていたと考えられる。後期は16軒が検出された。2～3軒が前期とほぼ同地点に構築され、その後徐々に東へ展開していく様相が窺えるが、住居構造や出土遺物から各住居跡の時期差を捉えることは困難である。今回検出された中では、S I 39に見られるように、煙道を壁外に削り込む竈を持ち、竈の右脇に貯蔵穴を掘り込み、竈の右壁直下に出入り口ピットを配し、4本主柱構造となるものが典型と考えられる。主軸を北西方向に取り、北竈となる傾向がみられる。

古墳時代の出土遺物には土師器・須恵器・土製品・石製品がある。前期は小形器台・小形壇・高坏・鉢・壺・甕等の土師器がある。これらは組成中に小形精製土器の丸底壺や小形器台、中実柱状の高坏脚を含んでおり、前期でも新しい段階の土器群と思われる。これらの器種組成を山形市内の今塚遺跡 S T708出土遺物と比較すると、中実柱状の高坏や口縁外反鉢、小形壺(壇)や中形の直口壺といった組み合わせの類似から今塚遺跡 S T708とほぼ同時期のものと思われる。山形県置賜盆地以南の資料を用いた辻秀人氏による編年(辻 1993)との比較では、口縁の外反する鉢や高坏等が辻編年のⅢ-2～3期頃のものに最も近い。Ⅱ-2期は漆9群に、Ⅱ-3期は漆10群にあたるとされている。山形県内の編年案では、佐藤氏の編年(佐藤 1999)によると今塚遺跡 S T708出土遺物は塙釜式3段階に位置付けられている。後期は、土師器の壺・椀・高坏・甕・壺・甕が主体となり、須恵器は壺・甕・甕等が加わっている。土師器では、ほとんどが丸底壺、甕はやや長胴で下腰れ気味のハケ甕が主体となり、小形甕はほぼ同形態の砲弾型が多い。高坏は短脚化しており、椀は口縁部に内そぎ状の傾斜面を持つ深身のもので、全体的に見て大きな時期差を認めるような形態的な差異がみられず、ほぼ一形式の土器編年の範囲におさまる様相を示す。しかし器種ごとに見ると壺類で古い形式と見られる平底壺が少量であること、小形甕5個体の中にややくずれた形式的に新しいと見られるものが2個体であること、

遺跡内全体から出土している須恵器はTK47を主体としているが、その前後のものが少しありそうである点等から、土器群はTK47に併行する時期でおおよそ5世紀末葉、古墳時代後期初頭に位置付けられると思われる。

古墳時代後期初頭に集落が廃絶し、奈良時代になるまでの間、集落は途絶えていたようである。



第5図 古墳時代遺構分布図

再び集落が営まれ始めた奈良・平安時代は、8世紀～10世紀前半にかけて、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、横列、畝状造構等が検出された。

8世紀代は、竪穴住居跡が5軒検出された。住居跡は東西方向に並ぶように検出され、規則的な配置が窺われる。

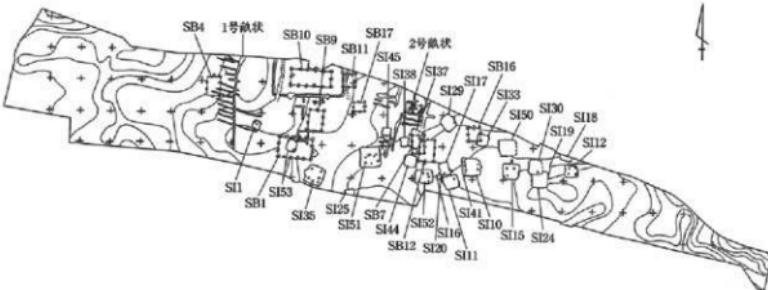
続く9世紀は、前半に大形の東西棟の掘立柱建物跡が2棟、南北棟の掘立柱建物跡が3棟、竪穴住居跡が2軒検出された。掘立柱建物跡を主体とした集落が営まれていたと考えられる。特にSB10は、その周囲を「コ」の字状に走るSD5に区画されていたと推測される。後半は、南北棟の掘立柱建物跡が5棟、横列が1条、竪穴住居跡が6軒検出された。造構の切り合いから、掘立柱建物跡群の廃絶後に、竪穴住居跡群が構築されたと考えられる。この時期から、小形で南竈を持つ竪穴住居跡が出現し始める。

10世紀は、初頭に竪穴住居跡が4軒検出された。9世紀後半に引き続き、竪穴住居跡は全て小形化し南竈が主体となる。前半には、竪穴住居跡が6軒、畝状造構が2群検出された。畝状造構の東側に住居跡が配置され、居住域と生産域とを分けた集落構成の様相が窺える。

遺跡内からは風字硯、墨書・刻書土器が出土しており、さらに9世紀代の遺物廃棄土坑であるSK160からは漆紙文書が出土している。これらの出土遺物と大形掘立柱建物跡の所在等を勘案すると、9世紀代の掘立柱建物跡により構成された集落は、何らかの公的な性格を持ち、9世紀後半の竪穴住居跡により構成された集落からは、一般村落的な性格を持つようになると推測される。9世紀後半に本遺跡の性格は大きく変化したと考えられる。

奈良・平安時代の出土遺物の大半は、土師器・須恵器・赤焼土器である。8世紀中葉～後半代の土器は、須恵器の坏・甕と非ロクロの土師器の坏・甕である。須恵器坏の底径や底部調整にわずかな違いが見られ、続く9世紀代に入っても底径の縮小化が続き、切り離し技法にも変化が見られる。9世紀後半は須恵器、土師器に加えて、赤焼土器が数多く出土している。ロクロを使用し酸化炎焼成した赤焼土器は9世紀第2四半期頃から現れ、9世紀後半から10世紀前半では主要な土器になっている。赤焼土器の坏は初め器高が高く土師器坏の器形に似ているが、10世紀になると須恵器の器高が高くなり赤焼土器の器形に近くなる。須恵器の坏はその後見られなくなり、かわって多量の赤焼土器に混じって内外黒色処理の土器が現れてくる。黒色土器では耳皿や高台付坏が出土している。黒色耳皿は灰釉陶器に類似形を探すと10世紀後半頃の時期のものと思われる。

本遺跡の集落は10世紀段階で廃絶したと考えられるが、自然河川と思われるS X 13から、輸入磁器の青磁椀片と初鉄年1017年の渡来銭が出土しており、中世段階においても生活の痕跡が窺える。青磁椀は15世紀頃の遺物であり、渡来銭はおそらく青磁碗等と同じく中世に使われていたものと推測される。



第6図 奈良・平安時代遺構分布図

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 繩文時代（第7・8図、表13、図版14）

繩文時代晚期終末に相当する土器及び石器が出土した。これらは、堅穴住居跡や土坑、ピット、グリッド等から出土しているが、遺構に伴うものではない。本遺跡周辺に同時期の遺跡が確認されていることや、土器が古墳時代の堅穴住居跡から完形に近い状態で混入していることから判断すると、生活跡が存在していた可能性は十分に考えられる。遺物は、第8図に見られるように、調査区中央の古墳時代～奈良・平安時代の遺構密集地域から西側にかけて散見される。これらのことから、既に繩文時代晚期には、この地域で生活が営まれており、その後、立谷川の氾濫により遺構が破壊された様相が推測される。

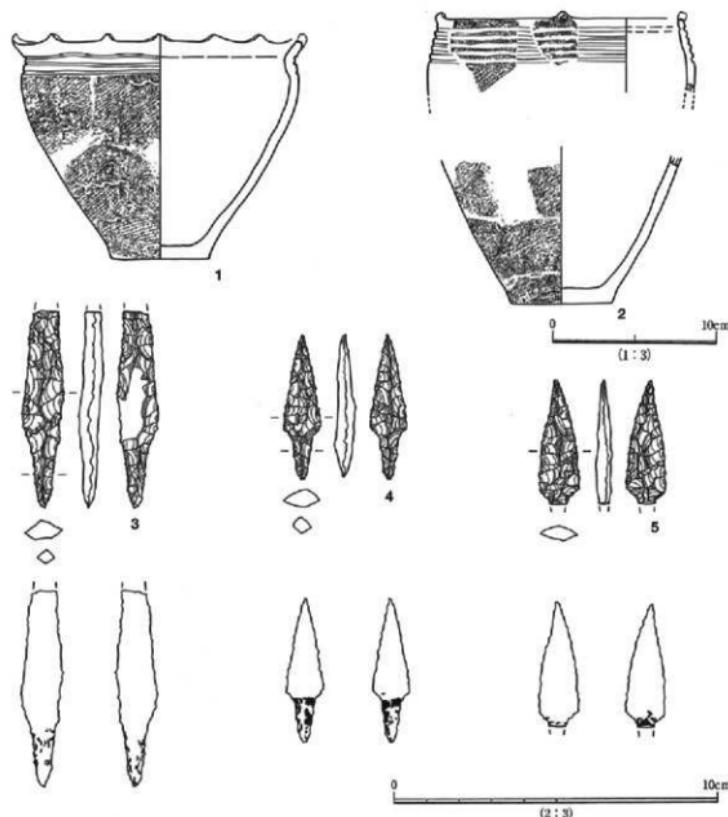
1は、鉢形で小波状口縁を持つ土器である。S I 2下のD-9(c) グリッド中から逆位に倒立した状態で口縁部～体部上半までが、S I 2の掘り方から体部下半～底部が出土した。ほぼ完形で、器高が13.2cm、口径が17.4cm、底径が6.0cm、器厚が6～8mmを測る。口頸部が「く」の字状に強く括れ、最大径を体部上半に持つ。頸部に沈線を3条巡らすが、線は弱く、沈線間の幅も一定ではない。体部には単節LRを施し、所々に「S」字状の結節文が認められる。口唇部側面に赤色顔料が付着する。内面は研磨されており、口辺部は特に丁寧に磨かれている。外面は磨耗している。胎土は石英・長石・海綿骨針を多量に含み、色調は灰黄褐色を呈する。晚期終末の大洞A'式に併行すると考えられる。

2は、鉢形で小形の山形突起を持つ土器である。S I 31の覆土中から出土した。体部下半と口縁部片が残存し、推定器高が18.0cm、推定口径が14.2cm、底径が6.2cm、器厚が6～9mmを測る。口辺部が緩く内彎し、体部上半に最大径を持つ。口唇部及び口縁内側に沈線を1条引く。口縁部に5条の平行沈線を施し、3条目と5条目に突起からややずらして匹字状の彫去が加えられるようであるが、破片の観察のため明確ではない。体部に単節LRもしくは無節Lを施す。内面は丁寧に研磨されている。外面は磨耗している。胎土は石英・長石を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。晚期終末の大洞A'式に併行すると考えられる。

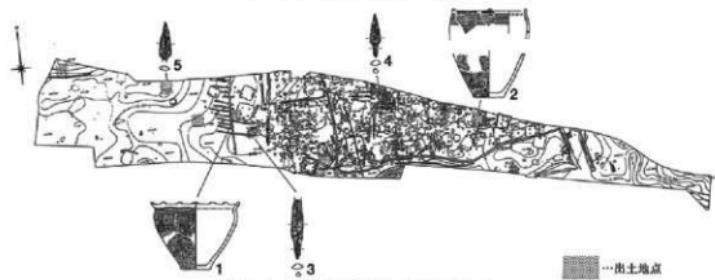
3は、珪質頁岩製の凸基有茎縫で、S I 1竈内から出土した。長さ6.0cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm、重さ4.2gを測る。先端部は欠損しており、矢柄装着部にタール状の黒色付着物が認められる。

4は、珪質頁岩製の凸基有茎縫で、S P 177の底面から出土した。長さ4.4cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.0gを測る。矢柄装着部にタール状の黒色付着物が認められる。

5は、珪質頁岩製の凸基有茎縫で、C-6(b) グリッドから出土した。長さ3.8cm、幅1.2cm、厚さ0.45cm、重さ1.9gを測る。矢柄装着部にタール状の黒色付着物が認められる。



第7図 縄文時代出土遺物



第8図 縄文時代遺物出土地点図

第2節 古墳時代

本遺跡で検出された古墳時代の遺構は、堅穴住居跡20軒、土坑2基、溝跡1条、不明遺構1ヶ所である。堅穴住居跡の形態及び出土遺物の違いから、前期と後期の2時期が認められる。以下、遺構毎に述べていく。

1 堅穴住居跡

(1) 古墳時代前期末

S I 2 (第9図、表1、図版3)

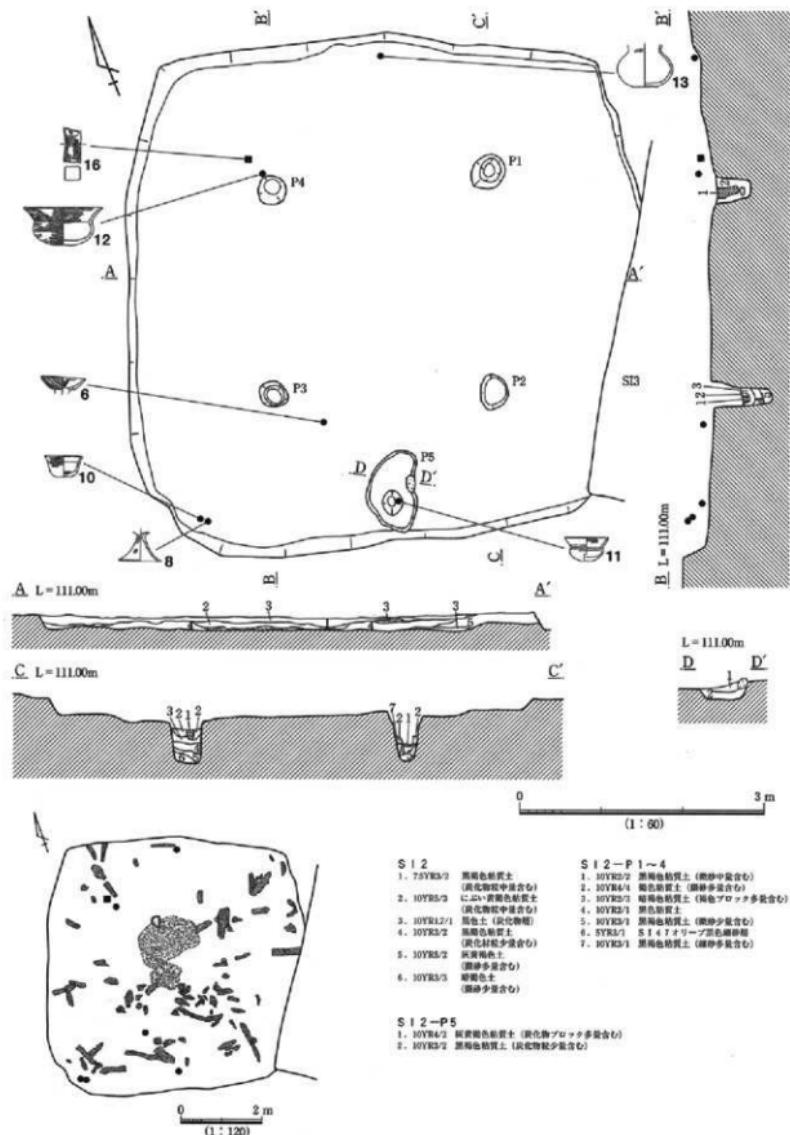
西地区D-9グリッドに位置し、南東隅を古墳時代後期のS I 3に切られる。規模は南北6.01m、東西6.18m、残存深度20cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。長軸方向はN-110°-Eを示す。覆土は炭化物・焼土粒子、微砂を含む灰黄褐色粘質土を基調とする。ピットは5基検出され、P1~4の4基が主柱穴に相当する。柱間は約2.7mである。P5が出入り口ピットに相当し、南西壁中央付近から検出されている。周溝は確認されなかった。掘り方は、住居跡の80~90cm内側を浅く掘り込み、さらに主柱穴の内側をやや低く削っている。炉は確認されなかったが、炭化物の分布する住居跡中央部に設置されていたと考えられる。遺物は、そのほとんどが覆土中への廃棄遺物である。炭化物の堆積と前後して埋没土壤とともに流入ないし投棄されたものと思われる。8・10の小形鉢と小形器台は互いに近接して壁際の覆土中層から、13の中形壺は壁際の覆土中層から、12の鉢と16の砥石は炭化物を含む層よりも上層から出土した。

S I 7 (第10図、表1、図版3)

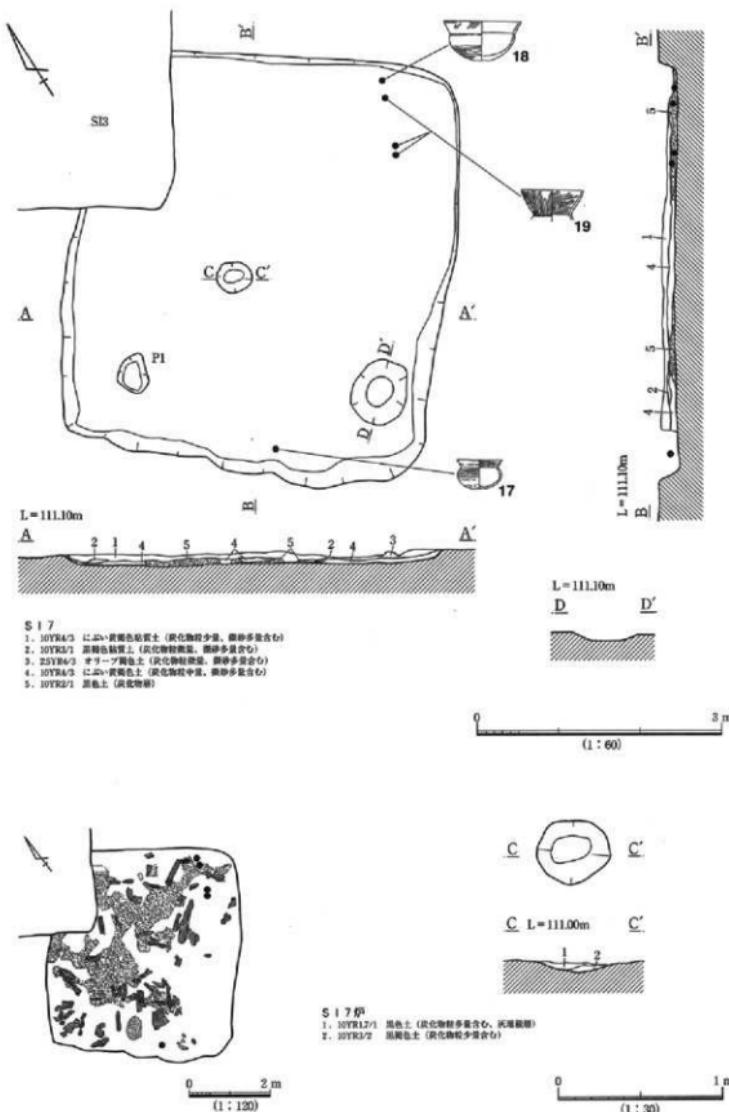
西地区E-10グリッドに位置し、北西端をS I 3に、また中央よりやや東側をS D 3・4に切られる。規模は南北4.84m、東西4.58m、残存深度14cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。長軸方向はN-38°-Eを示す。覆土は炭化物粒、微砂を含むぶい黄褐色粘質土である。主柱穴及び周溝は確認されなかった。南の角に貯蔵穴が検出される。規模は長径80cm、短径66cm、深さ12cmで、平面形は楕円形を呈する。炉は住居跡中央部やや西寄りに付設される。規模は長径44cm、短径38cm、深さ12cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は、18の鉢が東コーナー寄りの壁際床面近くから、17の有段口縁の小形鉢が南西壁際床上から出土している。19の壺口縁部破片は炭化物層とほぼ同じ高さから出土している。

S I 47 (第11図、表1、図版3)

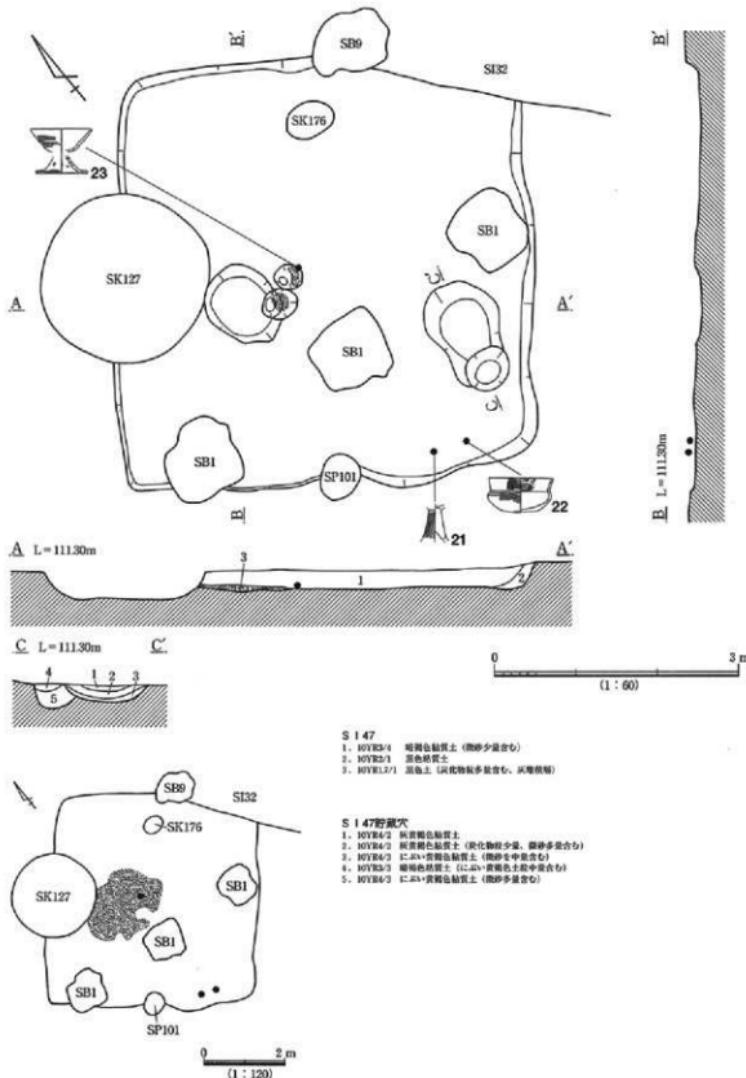
東地区E-11グリッドに位置し、北東端を古墳時代後期のS I 32に、中央から東全体を奈良・平安時代のS I 27に、また中央よりやや南側をS B 1に切られている。規模は南北5.01m、東西4.94m、残存深度は25cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。長軸方向はN-38°-Eを示す。覆土は炭化物粒、微砂を含む暗褐色粘質土である。主柱穴及び周溝は確認されなかった。南の角に貯蔵穴が検出される。規模は長径58cm、短径30cm、深さ30cmで平面形は楕円形を呈する。炉は中央部やや北西寄りに付設され、規模は長径107cm、短径85cm、深さ16cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は、22の鉢と21の高杯が住居跡の南東壁際の覆土中から、23の鉢は炉上に堆積した炭化物層から出土している。



第9図 S 1 2



第10図 S I 7

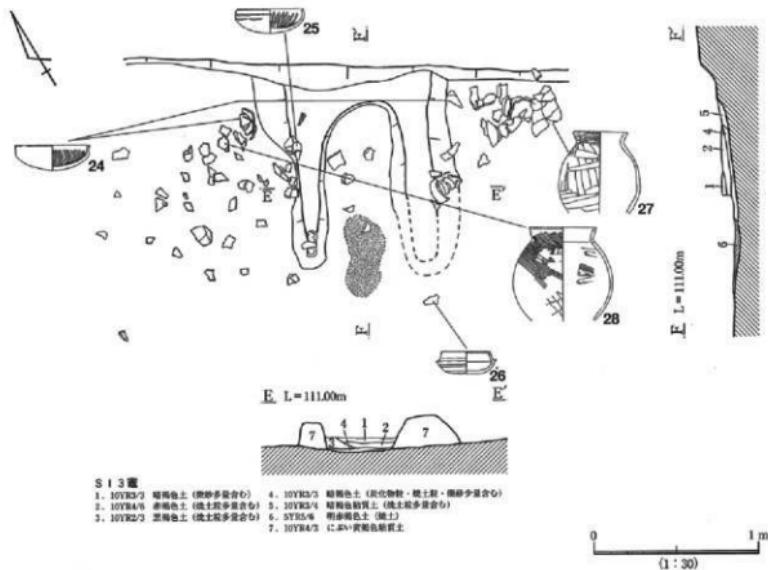


第11図 S.I.47

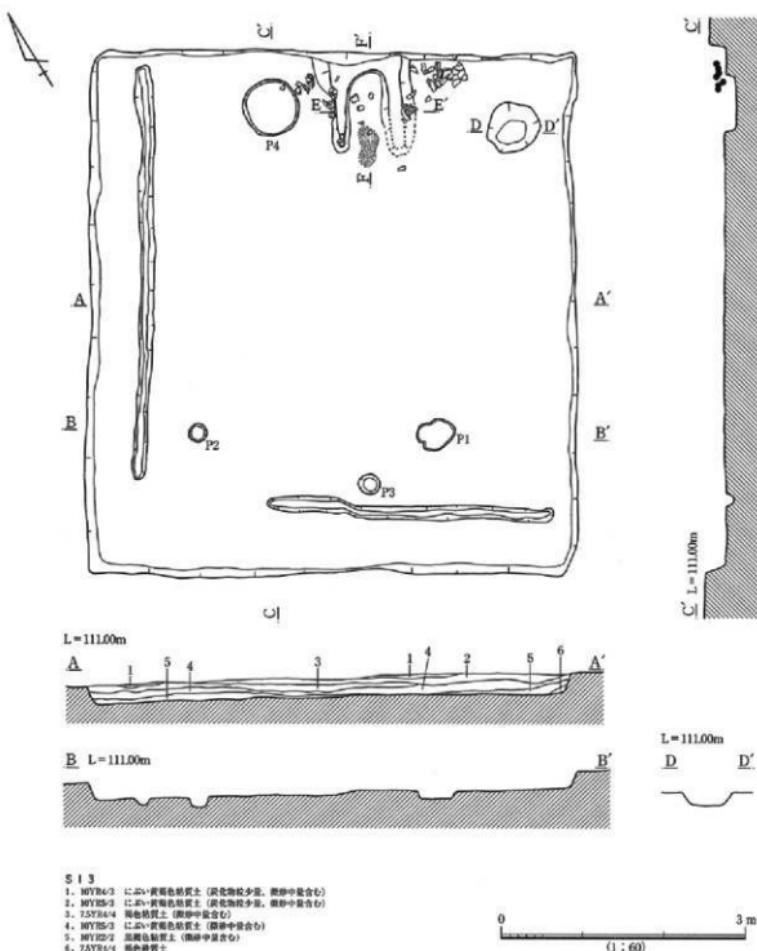
(2) 古墳時代後期初頭

S I 3 (第12・13図、表1、図版3)

西地区D-10~E-10グリッドに位置し、住居南西部でS I 2を、南東部でS I 7を切っている。規模は長軸6.36m、短軸5.76m、残存深度25cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-37°-Eを示す。覆土は、微砂を多く含むにぶい黄褐色粘質土である。ピットは4基検出され、P 1・2が主柱穴に相当する。P 3は出入り口ピットに相当するものと思われる。貯蔵穴は北東コーナー部で検出され、規模は長径66cm、短径60cm、深さ18cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。周溝は確認されなかった。南・西壁からそれぞれ約54cm内側をL字状に区画する細長い溝が検出された。住居の建替えに伴うものと考えられる。竈は北東壁のほぼ中央に付設され、煙道の掘り込みは壁外に認められない。袖は覆土とはほぼ同じ、にぶい黄褐色粘質土で構築され、西袖には凝灰岩の袖石が遺存する。焚口部から焚口寄りの燃焼部にかけて赤化している。燃焼部幅は40cmである。遺物は、竈の周囲の覆土から24・25の土師器壺、27・28の甕が出土している。同じく覆土中から出土した26の須恵器壺は、S I 5 覆土中から出土した破片と接合した。



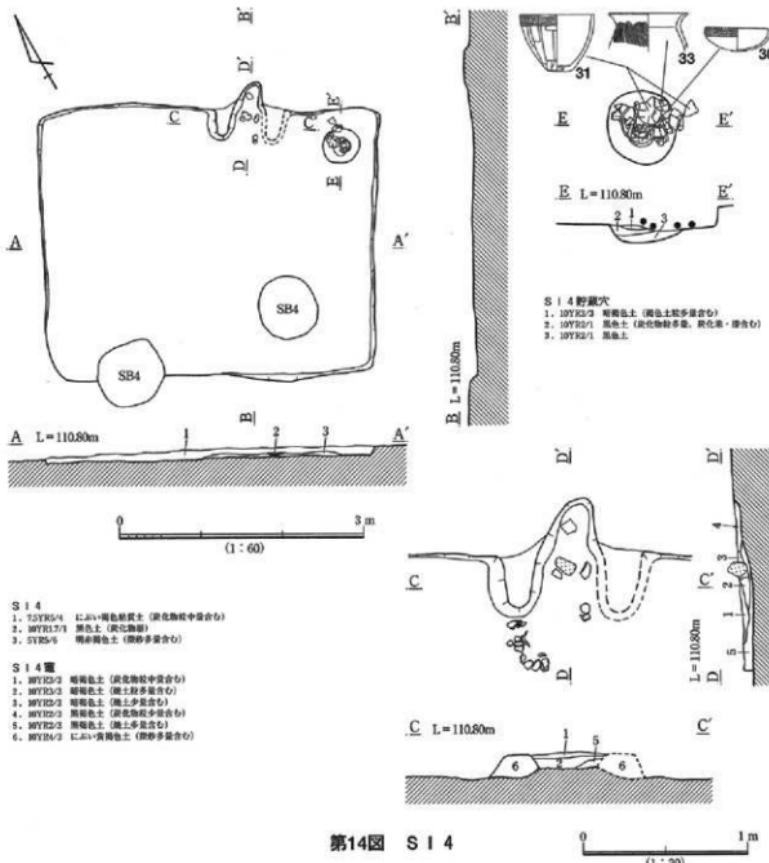
第12図 S I 3 突

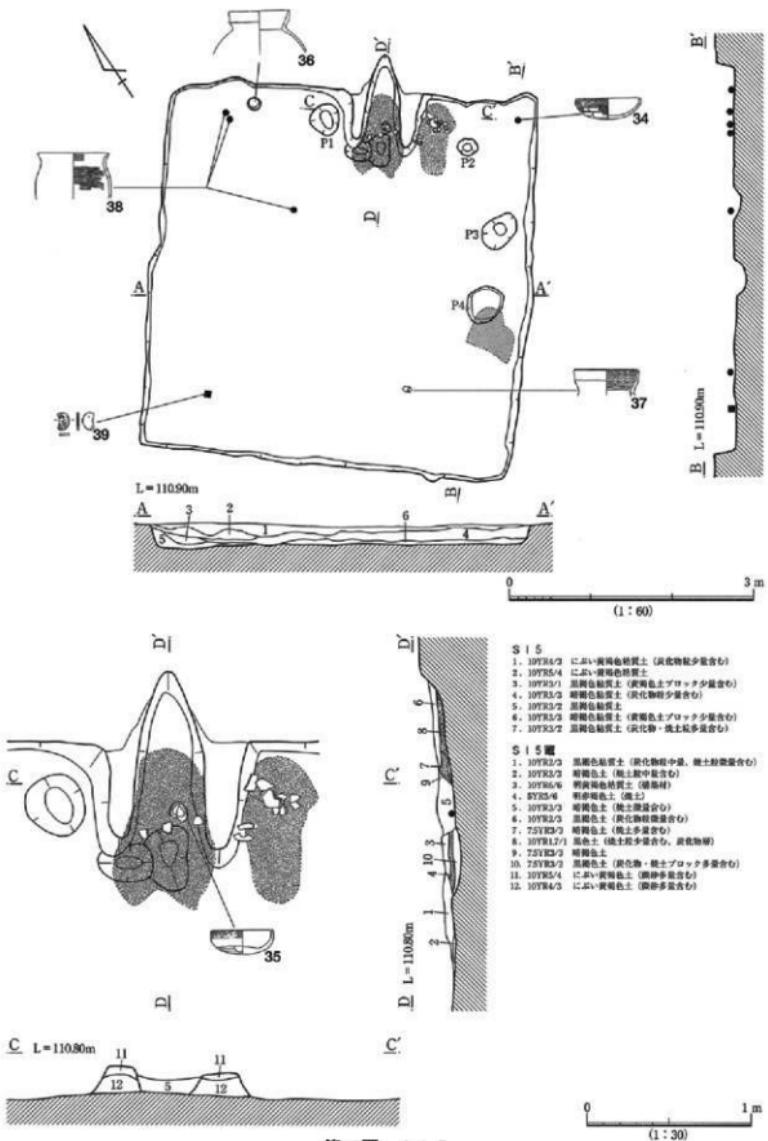


第13図 S I 3

S I 4 (第14図, 表1, 図版4)

西地区C-8グリッドに位置し、南西部をSB4に切られている。規模は長軸4.04m、短軸3.14m、残存深度12cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-30°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含むにぶい黄褐色粘質土である。柱穴・周溝は確認されなかった。北東コーナー部から貯蔵穴が検出された。規模は長径48cm、短径42cm、深さ9cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。竈は北東壁中央部やや東寄りに付設される。煙道は壁外へ削り込んでいる。袖は微砂を多く含むにぶい黄褐色粘質土で構築され、輝石安山岩の支脚が中央に遺存する。燃焼部幅は34cmである。遺物は、貯蔵穴付近の覆土中から30の壺、31の小形瓶、33の甕が出土している。貯蔵穴3層中からは、漆と炭化米〔「附章 第2節」参照〕が出土している。





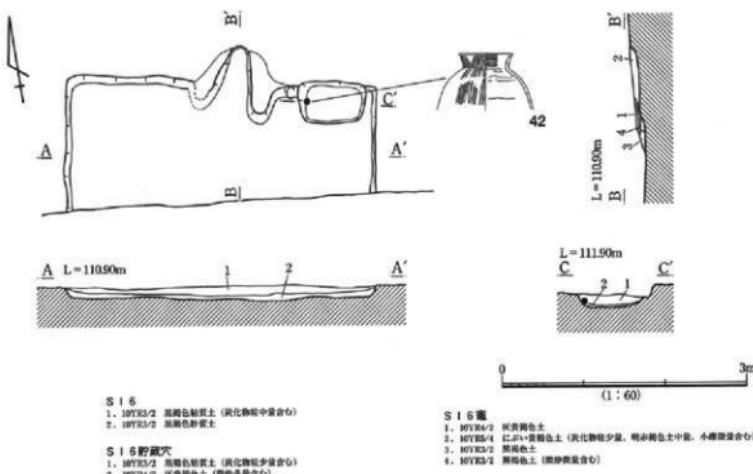
第15図 S I 5

S I 5 (第15図, 表1, 図版4)

西地区C-9～D-9グリッドにかけて位置する。規模は長軸4.56m、短軸4.48m、残存深度22cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-37°-Eを示す。覆土は2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土で、共に炭化物粒を含む。ピットは4基検出されたが、主柱穴に相当するものは確認できなかった。P3が、出入り口ピットに相当すると思われる。周溝は確認されなかった。竈は北東壁中央部やや東寄りに付設される。煙道は壁外に削り込まれている。袖は微砂を多量に混ぜたにぶい黄褐色土で構築される。焚口部の約30cm外側から燃焼部にかけて赤化している。燃焼部幅は36cmである。また、東袖の脇に焼土の堆積が認められた。遺物は、竈燃焼室内から35の土師器壺、住居跡東コーナー部の床面上から34の土師器壺が出土し、覆土下層からは38の土師器壺、36・37の壺が出土している。また、住居跡南西コーナー部の床面上から石製模造品の勾玉と白玉21個がまとまって出土している。東壁際から粘土の塊が出土している。

S I 6 (第16図, 表1, 図版4)

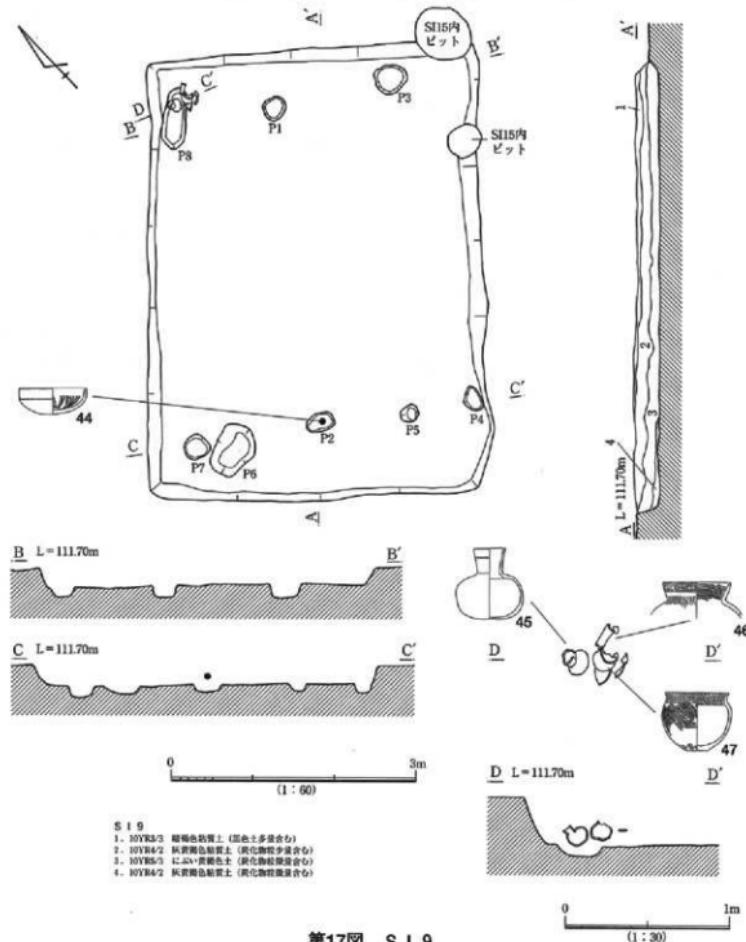
西地区F-8グリッドに位置する。住居の南側が調査区外に延びるため、全体像は不明である。規模は東西軸3.68m、残存深度18cmを測る。主軸はN-13°-E示す。住居は疊層を掘り込んで作られており、覆土は、炭化物粒を含む黒褐色粘質土である。北東壁直下に貯蔵穴が検出された。規模は長径96cm、短径52cm、深さ16cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。竈は北東壁ほぼ中央に付設され、煙道は壁外へ削り込まれている。燃焼部幅は30cmである。遺物は貯蔵穴の底面付近から42の土師器壺が出土している。



第16図 S I 6

S I 9 (第17図, 表1, 図版4)

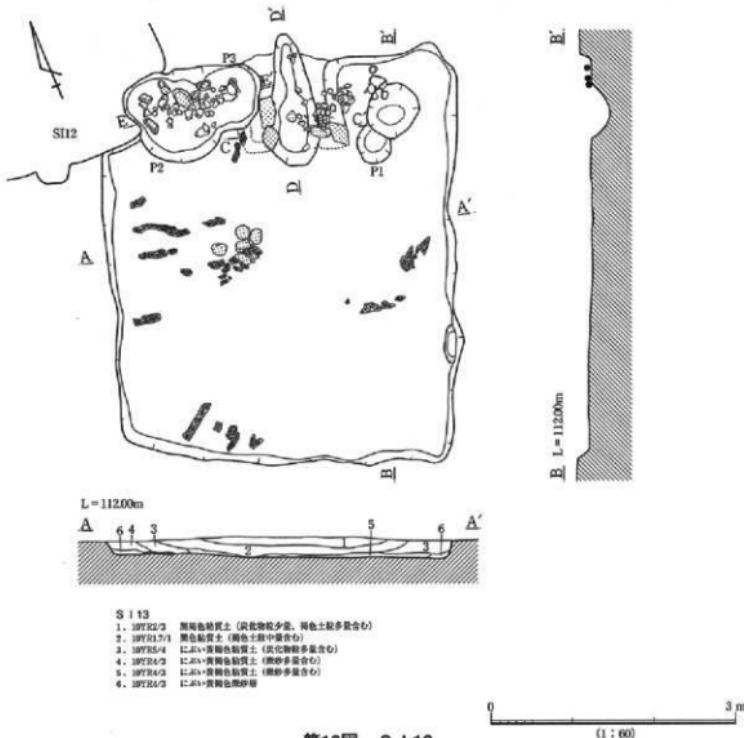
東地区F-17グリッドに位置し、北東部分をS I 15に切られている。規模は長軸5.24m、短軸3.84m、残存深度30cmを測り、平面形は長方形を呈する。長軸方向はN-41°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含む灰黄褐色粘質土である。ピットは8基検出され、P1・2が主柱穴に相当すると考えられる。周溝及び、炉・窓は検出されなかった。遺物は住居跡の北角から45の土師器の壺・46の甕・47の小形甕が、床面よりやや浮いた状態で出土した。



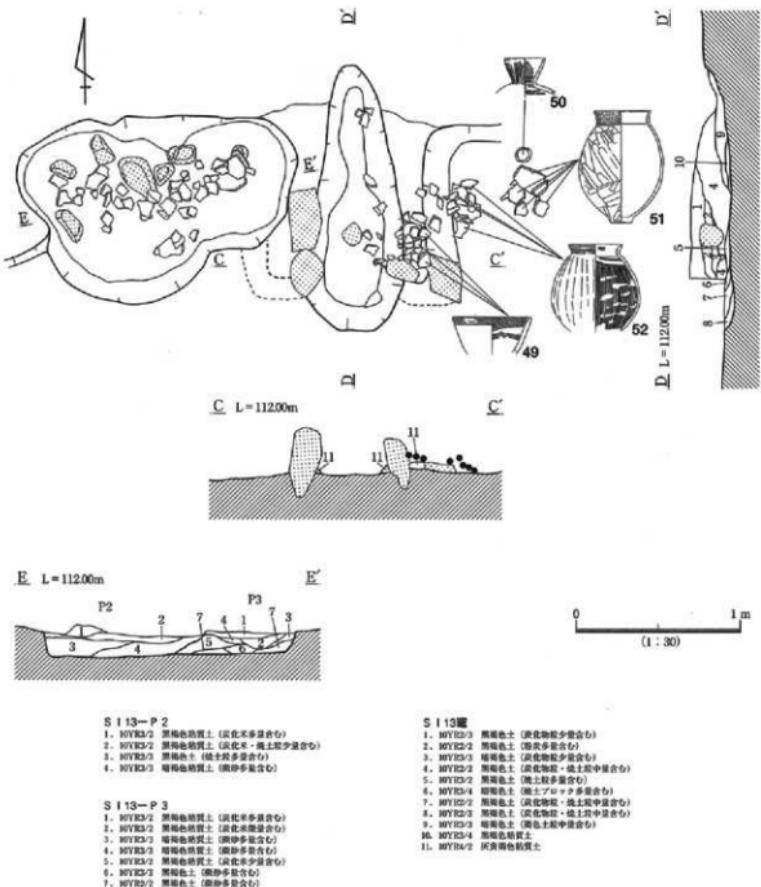
第17図 S I 9

S I 13 (第18・19図、表1、図版5)

東地区G-20グリッドに位置し、北西角をS I 12に切られる。規模は長軸4.80m、短軸4.12m、残存深度16cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-18°Eを示す。覆土は、上層が炭化物粒を含む黒褐色粘質土、下層がにぶい黄褐色土で、床面および床面からわずかに浮いた状態で炭化材が検出された。ピットは3基検出された。北東コーナー部に貯蔵穴が検出された。規模は長径67cm、短径60cm、深さ22cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。周溝は東壁の一部にだけ確認された。竈は北壁中央に付設される。煙道は壁外へ削り込まれる。袖は灰黄褐色粘質土を構築材とし、支脚・袖石ともに遺存している。支脚は輝石安山岩を用い、ほぼ中央に遺存している。袖石は凝灰岩である。燃焼部幅は32cmである。遺物は、壊れた竈に向かって右袖の上面から竈右側の床上にかけて51・52の土器器の壺、50の中型壺、49の甌が床面からわずかに浮いて出土している。53の壺はP 2・3の覆土中から出土している。住居跡覆土全体からは、炭化米が出土しており、特にP 2・3からは土器片や砾とともに多量に確認されている。



第18図 S I 13



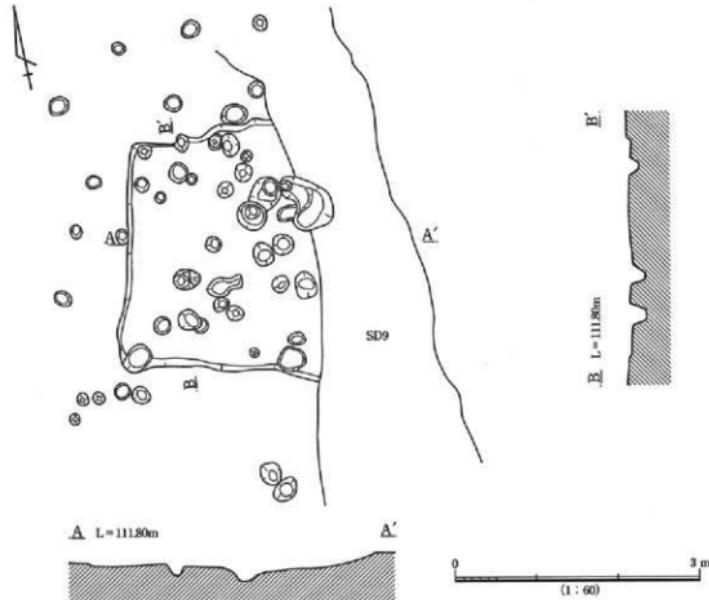
第19図 S I 13竈

S I 22 (第20図, 表1, 図版5)

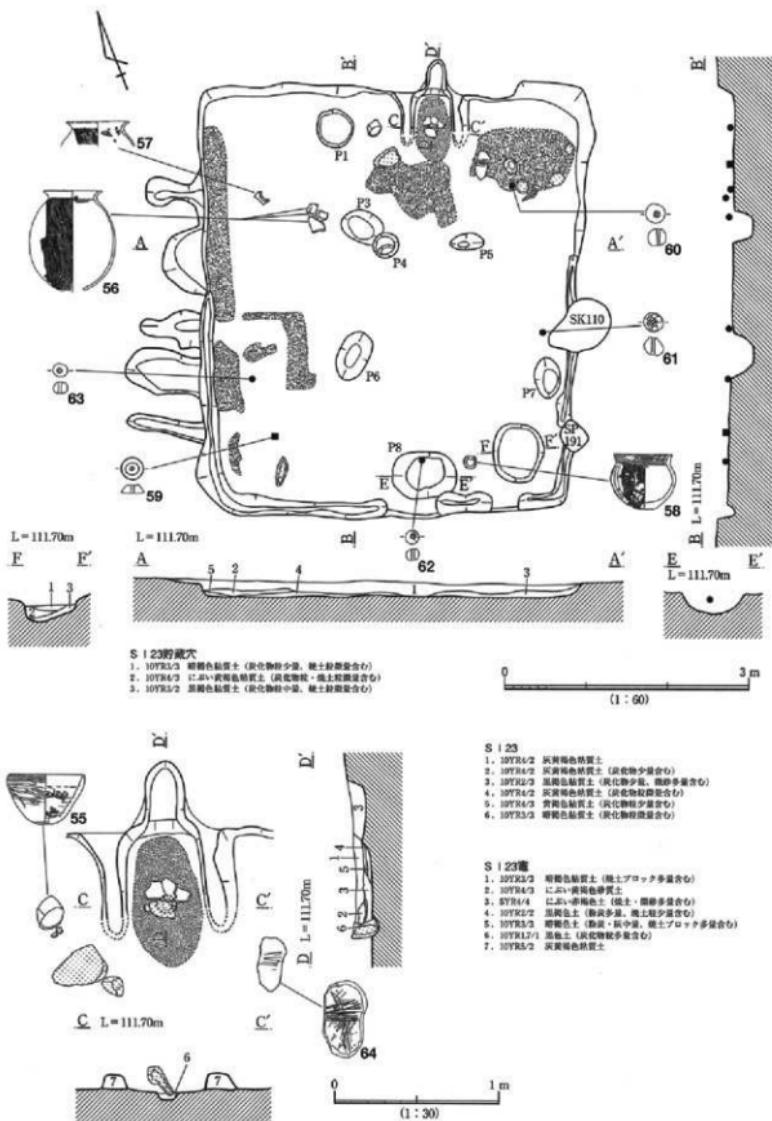
東地区G-21グリッドに位置する。東側をSD9に切られる。規模は南北軸2.92m、残存深度6cmを測り、平面形は長方形を呈すると思われる。南北軸はN-16°-Eを示す。多数のピットに切られており、住居に伴うピットは判別できなかった。周溝・竪ともに確認されなかつた。遺物は覆土中から内面黒色処理の土師器短脚高壊脚部片が出土している。

S I 23 (第21図, 表1, 図版5)

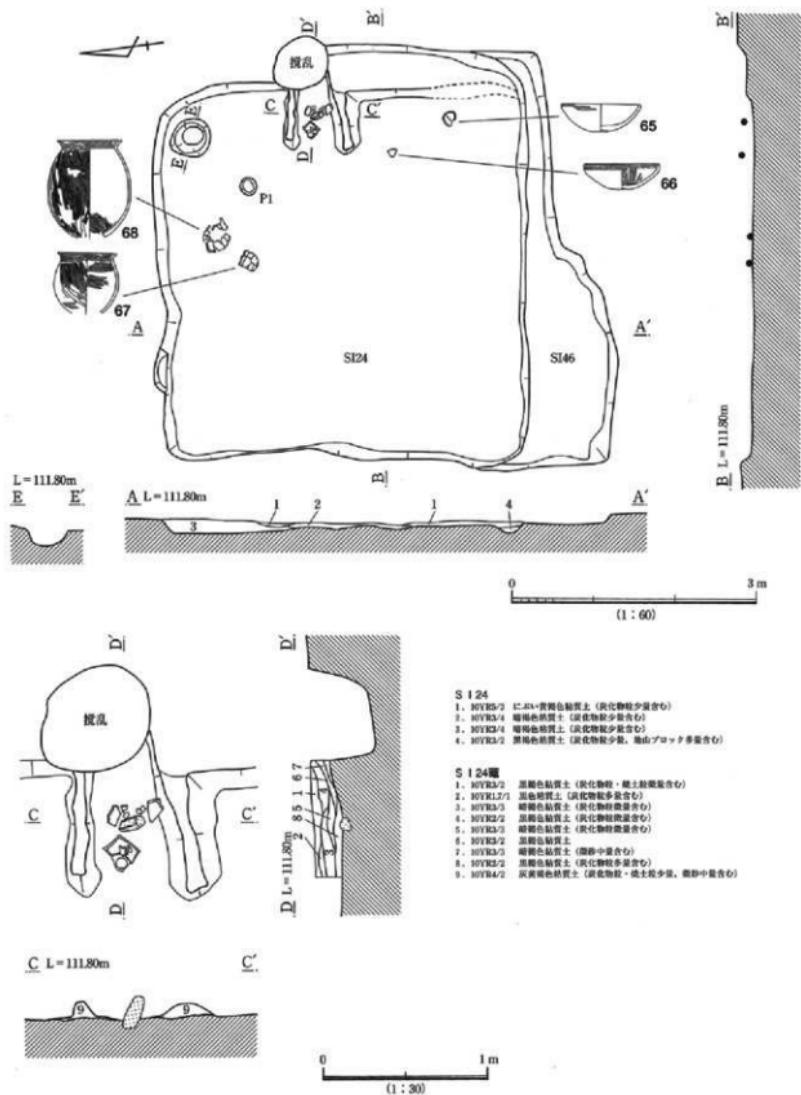
東地区F-19グリッドに位置する。規模は、長軸5.04m、短軸4.52m、残存深度22~30cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-26°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含む灰黄褐色粘質土が主体となり、炭化材や炭の分布する範囲が散見される。ピットは8基検出され、P8が出入り口ピットと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。規模は長径72cm、短径62cm、深さ48cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。周溝は、窓の付設される北東壁を除いて廻る。竪は北東壁中央部やや東寄りに付設される。煙道は壁外へ削り込んでいる。袖は灰黄褐色粘質土で構築され、輝石安山岩の支脚が中央に遺存している。焚口部の約20cm外側から燃焼部にかけて赤化している。燃焼部幅は47cmである。遺物は、竪に向かって左側床面から55の土玉が出土している。



第20図 S I 22



第21図 S I 23



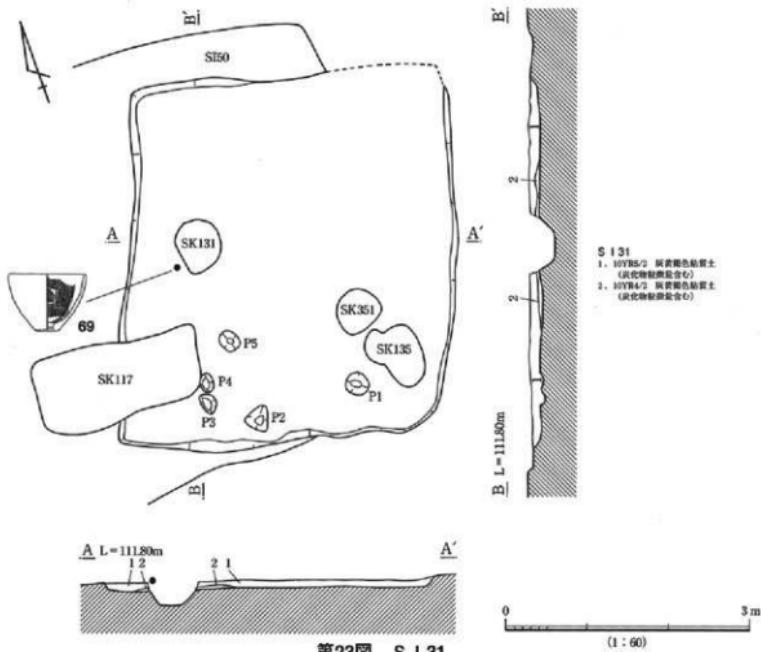
第22図 SI 24・SI 46

S I 24 (第22図, 表1, 図版5)

東地区E-19~F-19グリッドに位置し、S I 30・46に切られる。規模は長軸5.12m、短軸4.58m、残存深度約18cmを測り、平面形は正方形を呈する。主軸はN-95°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含む暗褐色粘質土である。ピットは1基検出されたが、性格は不明である。北東コーナー部に貯蔵穴が検出された。規模は、長径53cm、短径49cm、深さ19cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。主柱穴・周溝は確認されなかった。竈は東壁北寄りに付設される。煙道は壁外へ削り込んでいるが、先端が攪乱を受けているため立ち上がりは不明である。袖は微砂、焼土・炭化物粒を含む灰黄褐色粘質土で構築され、輝石安山岩の支脚が中央に遺存している。燃焼部幅は41cmである。遺物は、北壁寄りの床面から67・68の土師器の甕が、覆土中層から65・66の甕が出土している。

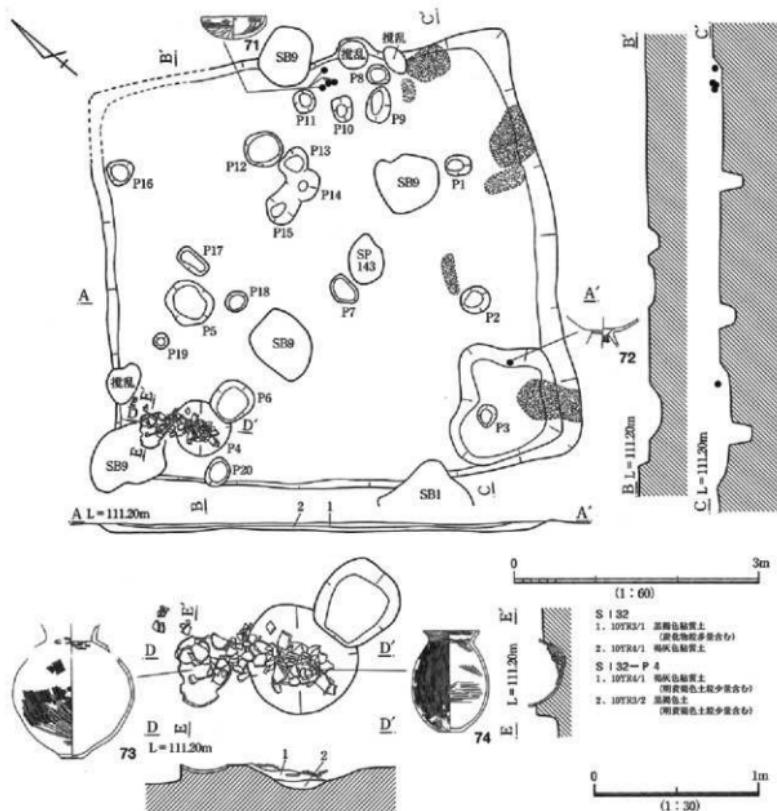
S I 31 (第23図, 表1, 図版6)

東地区E-18~F-18グリッドに位置し、中央から西側をS I 50に切られる。規模は、長軸4.32m、短軸3.88m、残存深度16cmを測り、平面形は長方形を呈する。長軸方向はN-19°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含む灰黄褐色粘質土である。ピットは5基検出された。炉・竈共に確認されなかった。遺物は覆土中から69の土師器甕と70の甕が出土している。

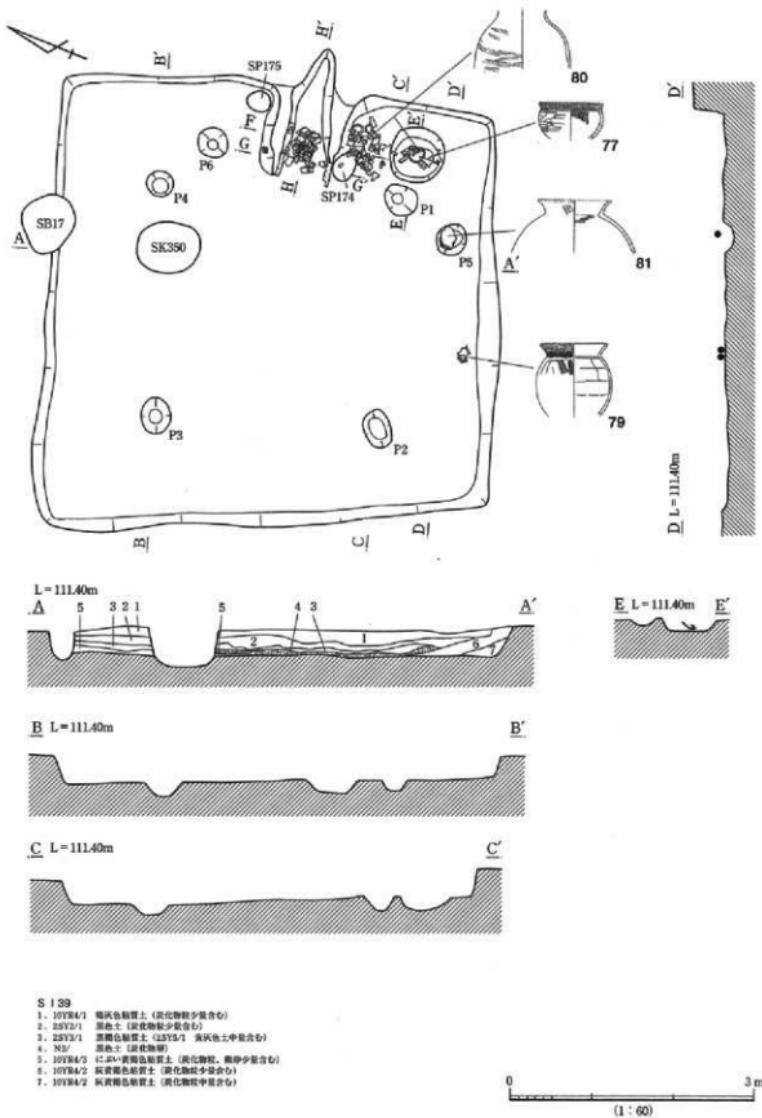


S I 32 (第24図, 表1, 図版6)

東地区E-11グリッドに位置し、SB1・9に切られる。規模は、長軸5.04m、短軸5.20m、残存深度10cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-47°-Eを示す。覆土は、上層が炭化物を多量に含む黒褐色粘質土、下層が褐灰色粘質土である。ピットは20基検出され、P1～5が主柱穴に相当し、6本主柱構造になると考えられる。周溝は確認されなかった。竈はピットに壊されており不明であるが、北東壁中央部やや東寄りに焼土が見られ、他の住居の形態と比較して、この位置に煙道を壁外へやや削り込む竈が付設されていたと思われる。遺物は、73の土師器甕が南北角床面に下端を埋め込むようにして出土している。74の甕はP4の覆土中から完形に復元可能な破片で出土している。その他覆土中から72の高杯と71の杯が出土している。



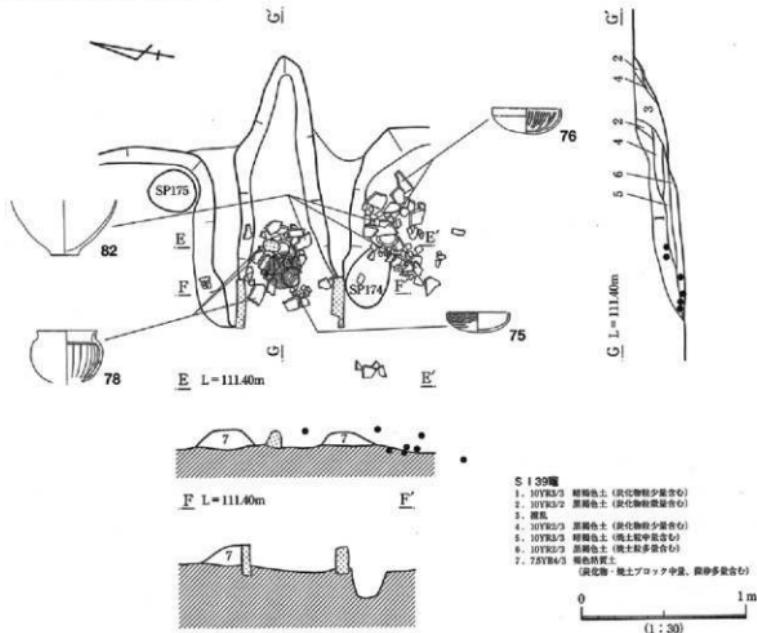
第24図 S I 32



第25図 S I 39

S I 39 (第25・26図, 表1, 図版6)

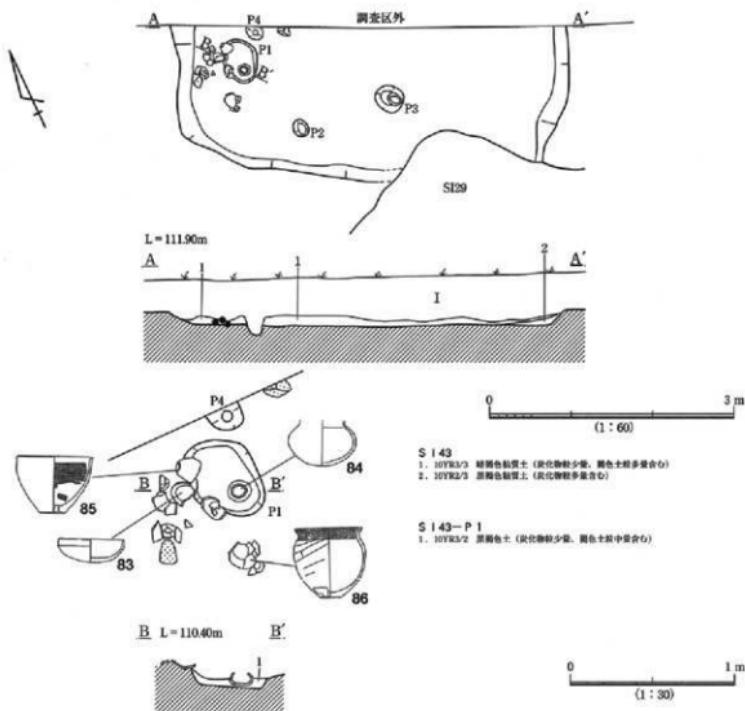
東地区 E - 12 ~ E - 13 グリッドにかけて位置し、北壁を S B17 に切られる。規模は、長軸 5.24m、短軸 5.20m、残存深度 36cm を測り、平面形は方形を呈する。主軸は N - 73° - E を示す。覆土は、上層が炭化物を含む褐色粘質土で、下層が含有物を同じくする黒褐色土である。床面付近に約 10cm の厚さの炭層がレンズ状に堆積している。ピットは 6 基検出され、P 1 ~ 4 が主柱穴に相当する。柱間は約 3.0m である。P 5 が出入り口ピットに相当するものと思われる。貯蔵穴は東コーナー部で検出された。規模は長径 68cm、短径 67cm、深さ 17cm を測り、平面形はほぼ円形を呈する。周溝は確認されなかった。窓は東壁ほぼ中央に付設される。煙道は壁外へ削り込まれており、壁外へ出る位置で一段高くなる。袖は焼土・炭化物ブロックを中量、微砂を多量に含む褐色土で構築され、輝石安山岩の支脚、凝灰岩の袖石が共に遺存している。支脚は中央部やや北寄りに遺存している。燃焼部の支脚手前部分が直径約 22cm の円形状に赤化している。焚口部幅は 52cm、燃焼部幅は 40cm である。遺物は、崩れた窓内から 75 の土器器の壊・78 の鉢、窓の南側からの貯蔵穴覆土にかけて 76 の壊、80 の壺が出土している。出入り口ピットと判断される P 5 の覆土中から 81 の壺、窓南側の床上から 82 の壺破片が出土している。いずれも住居廃絶後の廃棄遺物と見られる。



第26図 S I 39窓

S I 43 (第27図, 表1, 図版6)

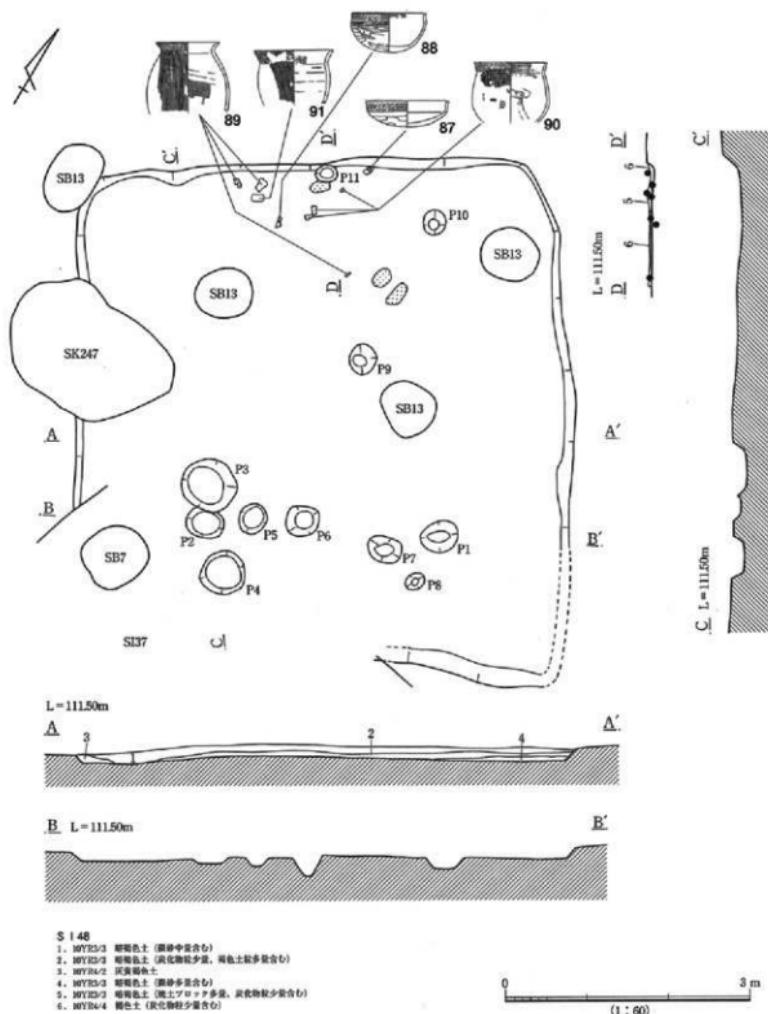
東地区D-16グリッドに位置する。南東隅をS I 29に切られる。北側が調査区外に延びるため、全体像は不明である。規模は、東西軸4.46m、残存深度14cmを測る。南北軸はN-32°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含む暗褐色粘質土である。遺物は、住居跡南西コーナー部のP 1から短頭壺形の土師器壺(84)が出土している。いずれも住居廃絶後の廃棄遺物と見られる。



第27図 S I 43

S I 48 (第28図, 表1, 図版6)

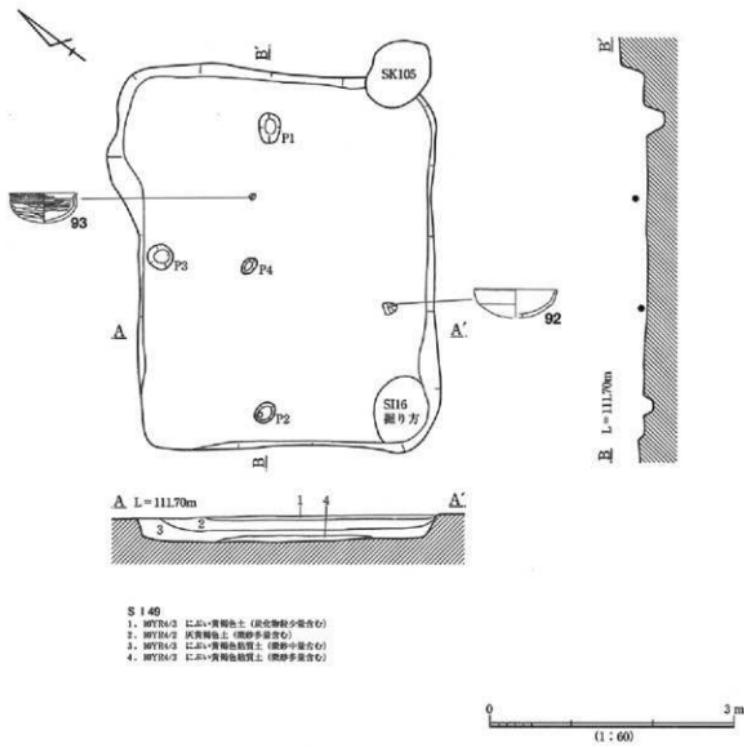
東地区E-14~E-15グリッドにかけて位置し、南西部をS I 37に、住居内をS B 13に切られる。規模は、長軸6.12m、短軸5.96m、残存深度14cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-32°-Wを示す。覆土は、炭化物を少量含む暗褐色粘質土である。ピットは11基検出された。4本主柱構造の可能性があり、P 1・2が相当すると推測される。周溝は確認されなかった。北壁付近に、焼土・炭化物を多く含む層の堆積が見られることから、竈は北壁のはば中央に付設されていたと考えられる。遺物は竈想定部付近の覆土中から出土している。



第28図 S 148

S I 49 (第29図, 表1, 図版7)

東地区F-16グリッドに位置し、南の角をS I 16に切られる。規模は、長軸4.38m、短軸3.48m、残存深度28cmを測り、平面形は長方形を呈する。長軸方向はN-53°-Eを示す。覆土は、炭化物粒を含むに近い黄褐色粘質土である。ピットは4基検出され、P1・2が主柱穴に、P3が出入口ピットに相当するものと思われる。周溝及び、竈・炉は確認されなかった。遺物は覆土下層から92・93の土師器の壺・碗、覆土中層から94・95の壺が出土している。

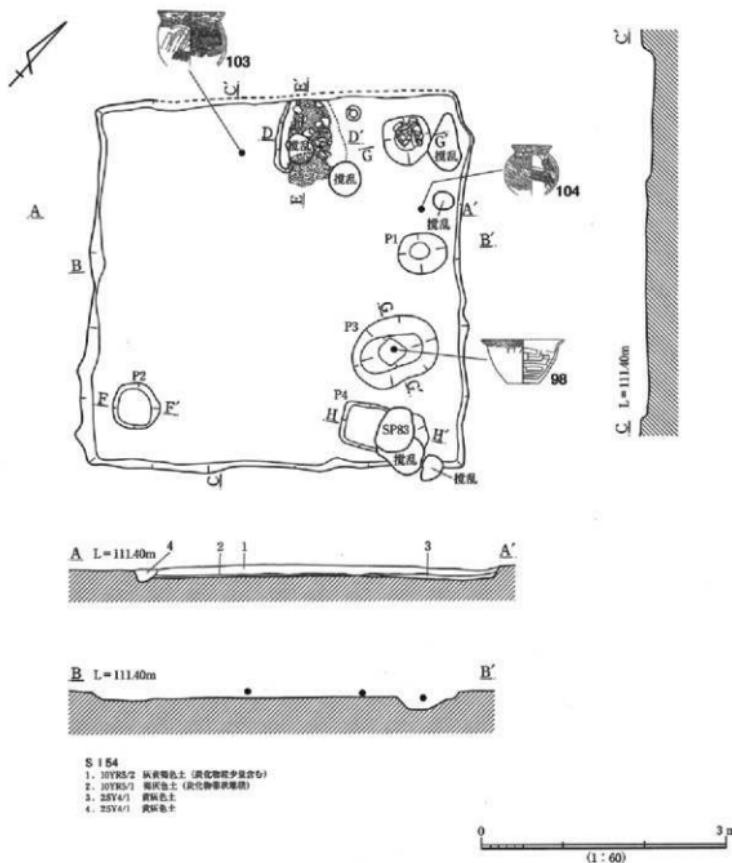


第29図 S I 49

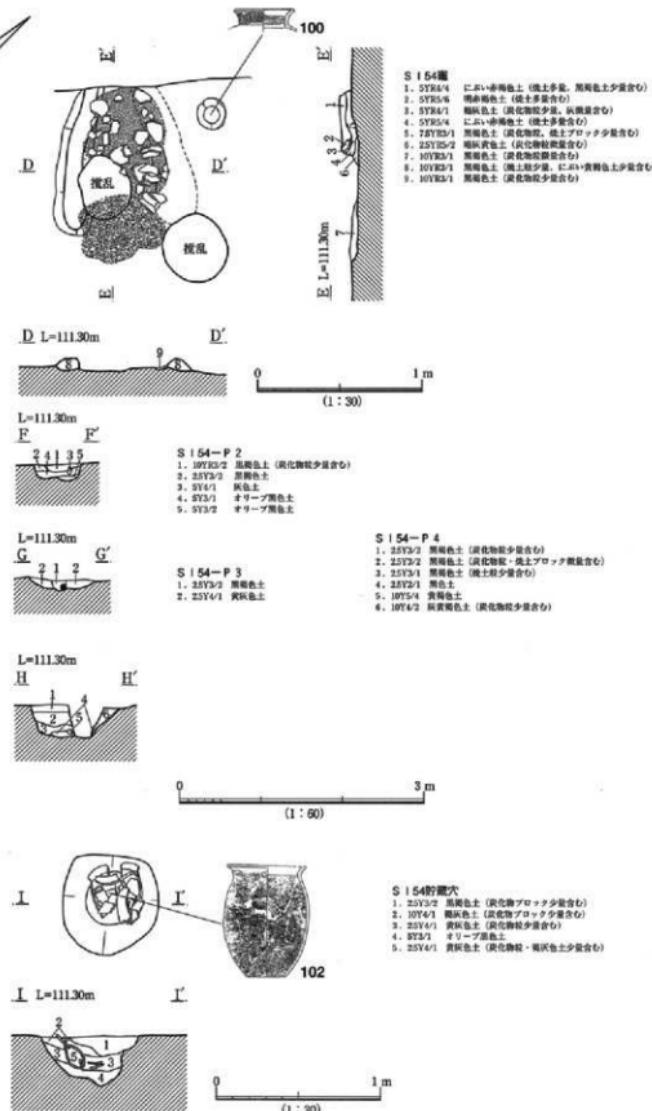
S I 54 (第30・31図, 表1, 図版7)

東地区F-12グリッドに位置する。規模は、長軸4.36m、短軸4.48m、残存深度20cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-40°-Wを示す。覆土は、炭化物粒を含む灰黄褐色粘質土である。ピットは4基検出され、P1が出入口ピットと思われる。北コーナー部に貯蔵穴がある。

検出された。規模は長径62cm、短径59cm、深さ30cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。また、P3・P4はこの遺構に伴うかどうか不明である。規模は長径109cm、短径58cm、深さ40cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。竈は北西壁中央部やや東寄りに付設される。煙道は壁外に削り込まれていた可能性がある。袖は焼土粒・にぶい黄褐色土を少量含む黒褐色土で構築される。燃焼部から煙道にかけて赤化している。焚口部に炭化物が認められる。燃焼部幅は36cmである。遺物は、竈向かって左側の覆土中から103の土師器甕が、P3の覆土中から98の鉢が出土している。



第30図 S 154



第31図 S I 54竪

2 土坑

S K 69 (第32図、表6)

東地区G-14グリッドに位置する。規模は長軸174cm、短軸60cm、残存深度16cmを測り、平面形は梢円形を呈する。遺物は底面から、105の古墳時代前期後半頃の壺形土器が出土している。

S K 78 (第32図、表6)

東地区F-11グリッド、S I 55内に位置する。規模は長軸104cm、短軸96cm、残存深度24cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土は上層に炭化物粒、下層にシルトブロックを含む。遺物は覆土中から、106の底部に木葉痕のある手捏土器が出土している。

3 溝跡

S D 10 (第32図、表9、図版13)

東地区H-20~21グリッドにかけて位置する。東西方向に直線的に延び、西端は南に曲がり調査区外へと延びる。東端は礫層によって壊されているが、西端同様さらに東に延びた後、南へ曲がると考えられ、本来は隅丸長方形に廻るものと推測される。規模は、上端幅1.74~3.58m、下端幅0.84~2.24m、長さ約15.0m、残存深度12~68cmを測る。断面形態は擂鉢状を呈する。底面の標高を比較すると、東・西端に比べ中央部が深くなる。覆土は上層に粘土の堆積が認められ、次いで炭化物層、粘土層の順に堆積し、粘土層が炭化物層を互層状態で挟んだ自然堆積である。この粘土層と炭層の広がりは、礫に壊される東端以外は溝全体に広がっている。堆積状況は、南側がやや厚みを持っているため、南から北へ堆積していったのではないかと考えられる。また東西方向では、東から西に向って堆積が厚くなっている。遺物は溝中央部から、炭化物層である6層上面で5世紀末頃の土師器壺片が出土している。

4 不明遺構

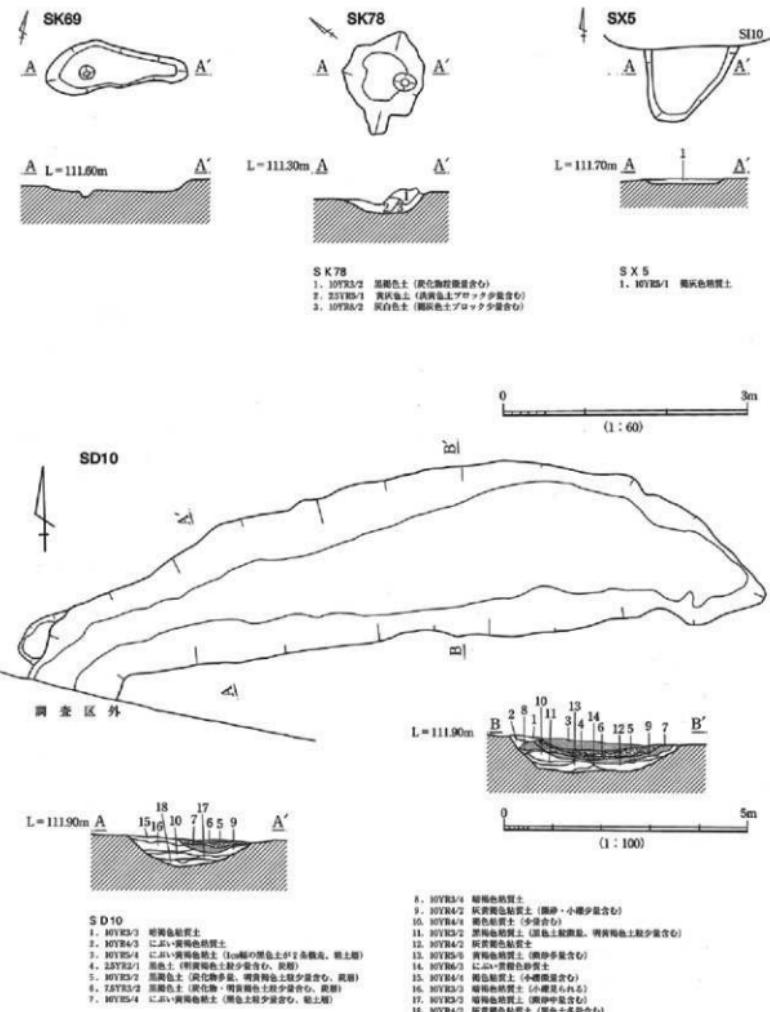
S X 5 (第32図)

東地区F-16グリッドに位置し、北側をS I 10に切られる。規模は東西方向100cm、残存深度8cmを測り、平面形は梢円形を呈すると思われる。覆土は褐色灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から107の滑石製の双孔円板が出土している。

5 遺構外出土遺物

108の土師器壺は、東地区E-11(a)グリッドから出土した。付近に古墳時代住居跡の覆土と同じ炭化物の薄く堆積する場所が確認されたため、住居跡を想定してサブトレンチを設定し調査を進めたが、平面・断面ともに住居跡のプランを捉えることが出来なかった。

112の円筒埴輪片は表採遺物である。



第32図 SK69・SK78・SD10・SX5

6 出土遺物（第33～41図、表13～15、図版14～19）

古墳時代の遺物は前期の土師器と石製品、後期の土師器・須恵器・土製品・石製品・漆が出土している。

前期の土器は、S I 2・7・47やSK 69・78から小形器台・高坏・鉢・壺・壺が出土している。S I 2では燃えた竪穴建築材とともに覆土中から11の小形丸底鉢や6・7・8の小形器台、9の高坏、深身で口縁部が外反する12の鉢、13の直口の中形壺、頸部に指頭圧痕の粘土紐帯を持つ15の壺が出土している。S I 7からは、18の深身外反鉢、19の直口の中形壺、S I 47では22の深身口縁外反鉢、中実で脚部から裾部に向かって若干開き気味の21の高坏、23の台付鉢が見られる。石製品は、S I 2から16の凝灰岩製の砥石が出土している。

古墳時代後期の遺物は、土師器・須恵器・石製模造品・土玉・砥石・漆が出土している。古墳時代後期の土器は遺跡の概要を述べたとおり後期初頭の時期のものが最も多い（S I 3・4・5・6・9・13・22・23・24・31・32・39・43・46・48・49・54）。

この時期の土師器は壺・椀・鉢・高坏・瓶・壺・壺が出土している。壺・椀類では底部丸底で、底部からそのまま口縁部が内彎するものと体部と口縁部の境に弱い稜を持って口縁部が直立するものが大部分を占める。口縁部の内彎するものの中では、S I 24から65・66の底部が小さく窪んだ平底形態のものが2点出土している。やや深身の椀の内、93は半球形の体部にわずかに外反する口縁で、口縁端部内面に内斜面を持つ。

鉢はS I 54出土の98の鉢がある、平底で口縁部に向かって緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部でさらに短く外反する器形である。福島県南部の佐平林新段階（青山 1999）に類似形のものが見られ、6世紀後半頃のものと見られる。住居内に穿たれた土坑状の穴の中から出土したもので竪穴住居跡の時期と異なるものと思われる。

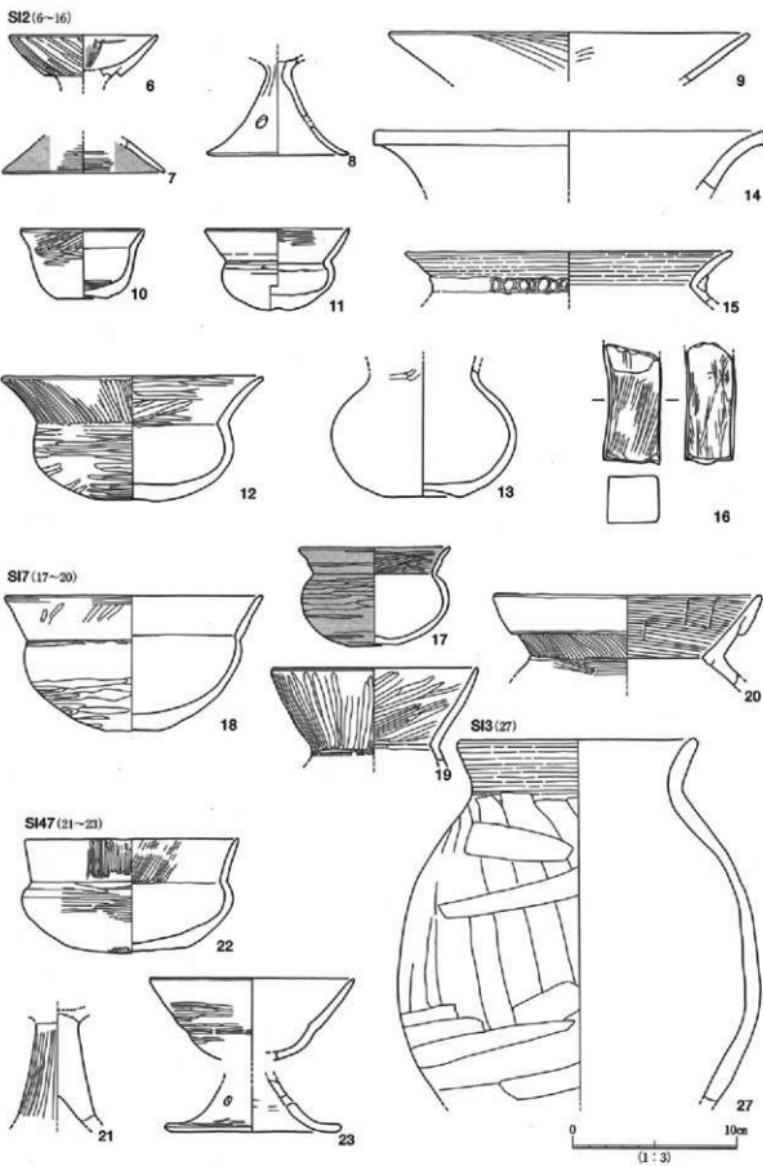
高坏は短脚傾向が見られ、S I 22から出土した54の内面黒色処理の高坏脚部と、S I 32から出土した72の高坏がある。

瓶は大形と小形のものが出土している。大形の瓶はS I 54出土の102の変形瓶がある。S I 48出土の口縁部径が大きく口の開く90・91の変形も瓶になる可能性がある。小形瓶は、S I 4・31・43出土の砲弾型のものと、同じ砲弾型でもS I 13やS I 23出土の造りが粗雑で器厚が厚いものに分かれる。

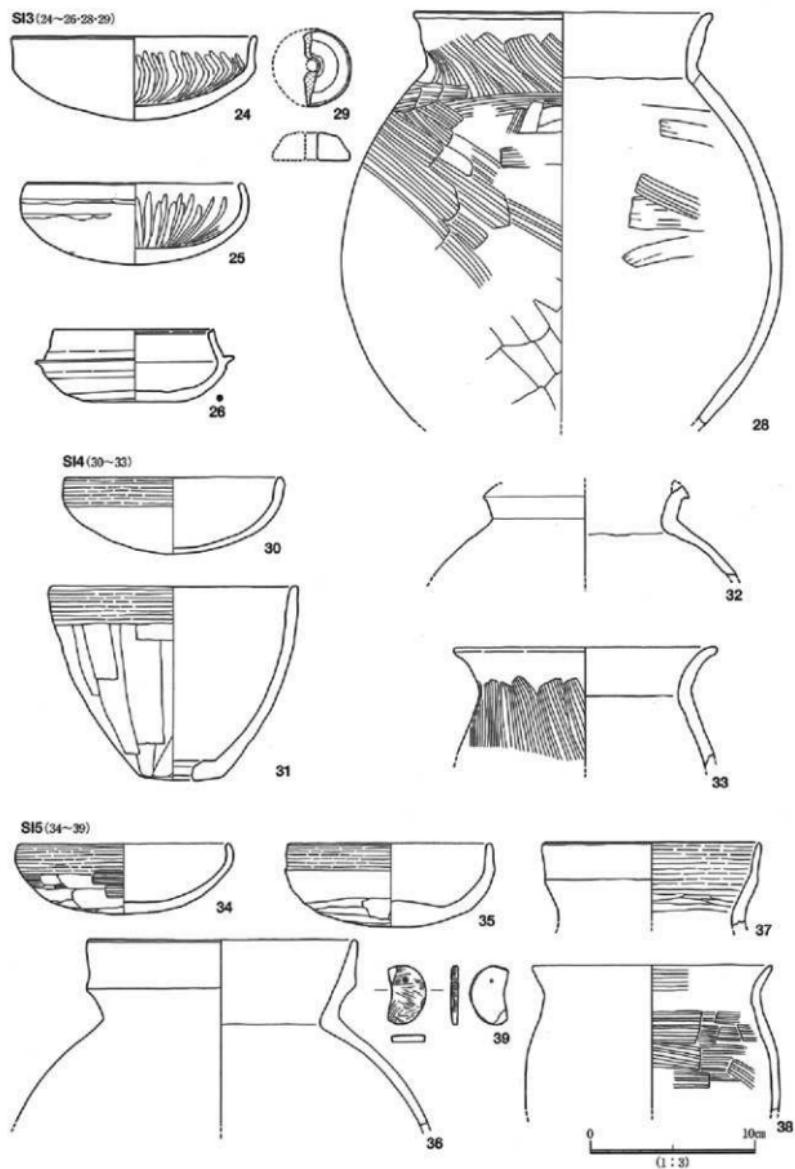
壺は体部から口縁部にかけて全体にミガキを施すものがほとんどである。大形のものと長頸の小形の壺がある。大形のものは口縁部の形状で大きく2種類ある。一つは壺の口縁形状に似た「く」の字状に外反するものと、一つは口縁部外面に凸状の稜線を持ち内彎気味に立ち上がるものである。

壺は、やや長胴で下眼れ気味の壺が主体で、S I 24出土の壺は口縁部が「く」の字状で短く外反する。小形壺は体部に丸味を持つものと、体部が膨らまずややす胴形のものがある。

須恵器は、S I 3出土の壺、S I 6・9出土の壺体部片がある。S I 3出土の26の須恵器壺は口径が小さくやや器高が高い形態で、口縁端部には沈線を持ち内傾しており、弱い段のよう見える。陶邑田辺編年のTK 47型式に近い特徴を持っている。壺はS I 6のものが外面格子

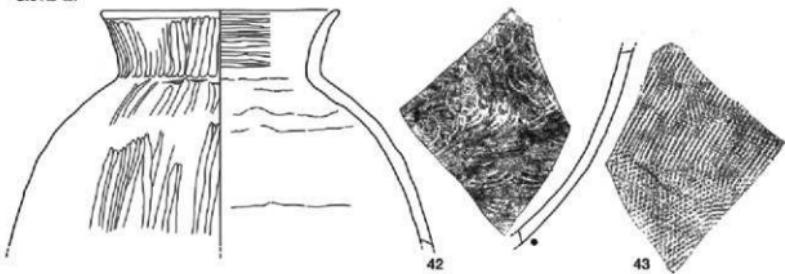


第33図 S I 2 • 3 • 7 • 47出土遺物

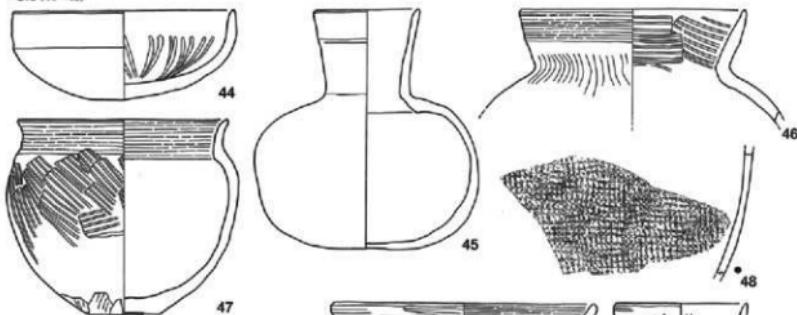


第34図 S 1 3・4・5 出土遺物

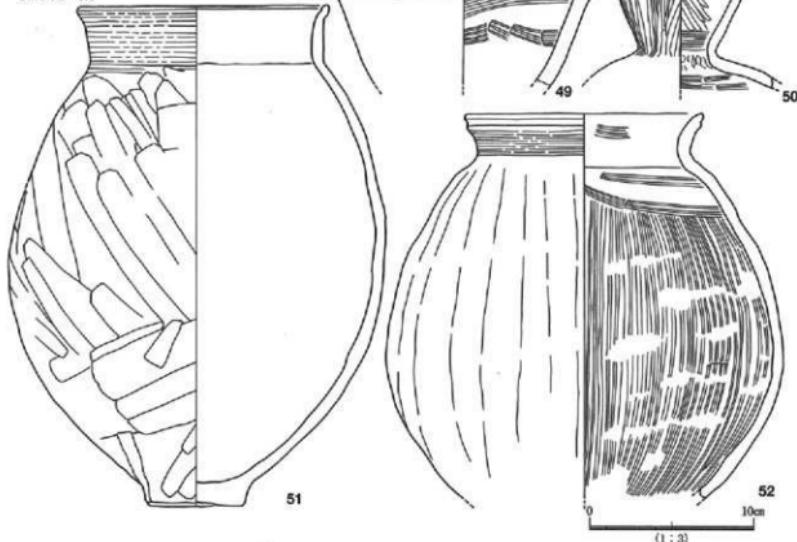
SI6(42-43)



SI9(44-48)

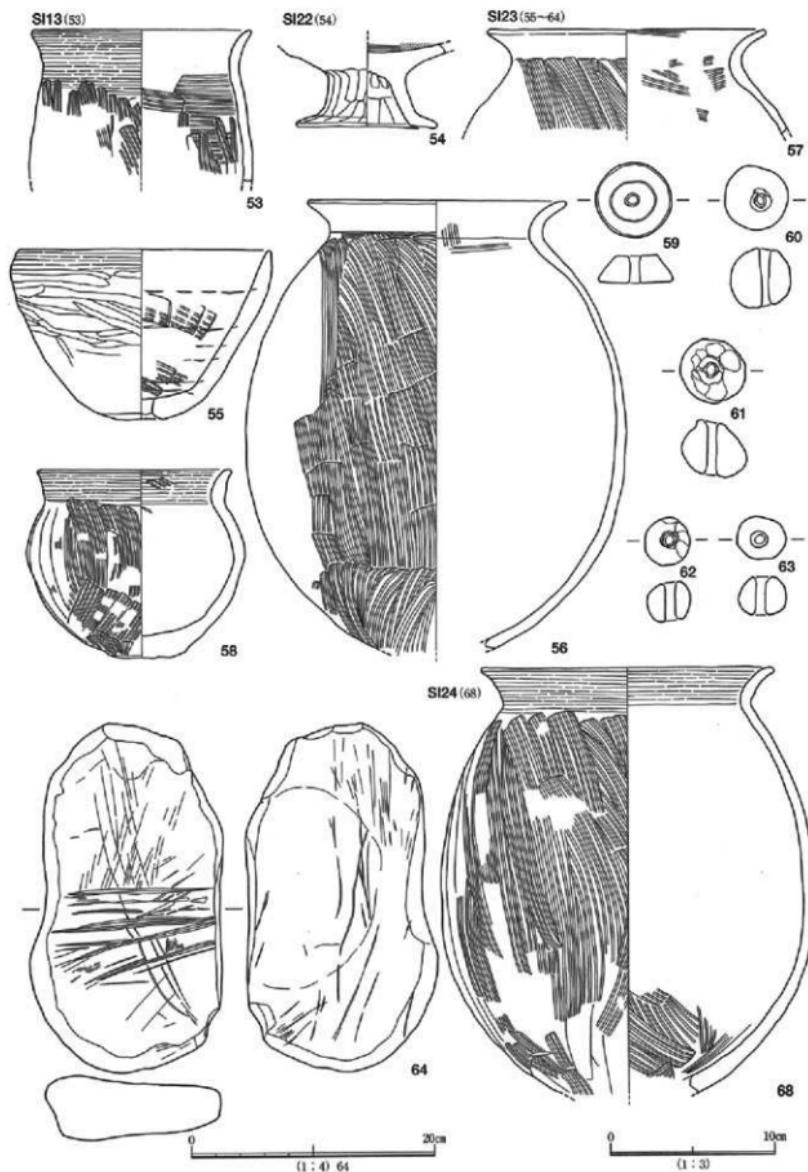


SI13(49-52)

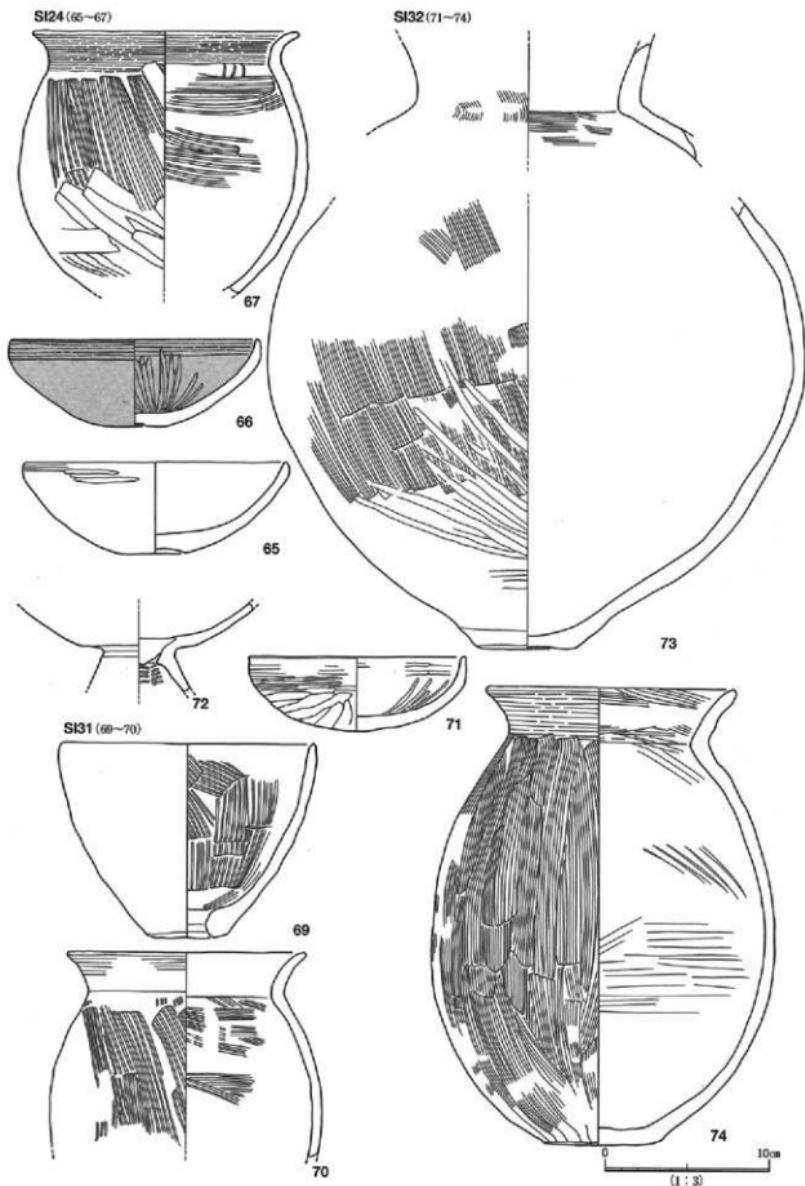


第35図 S I 6 • 9 • 13出土遺物

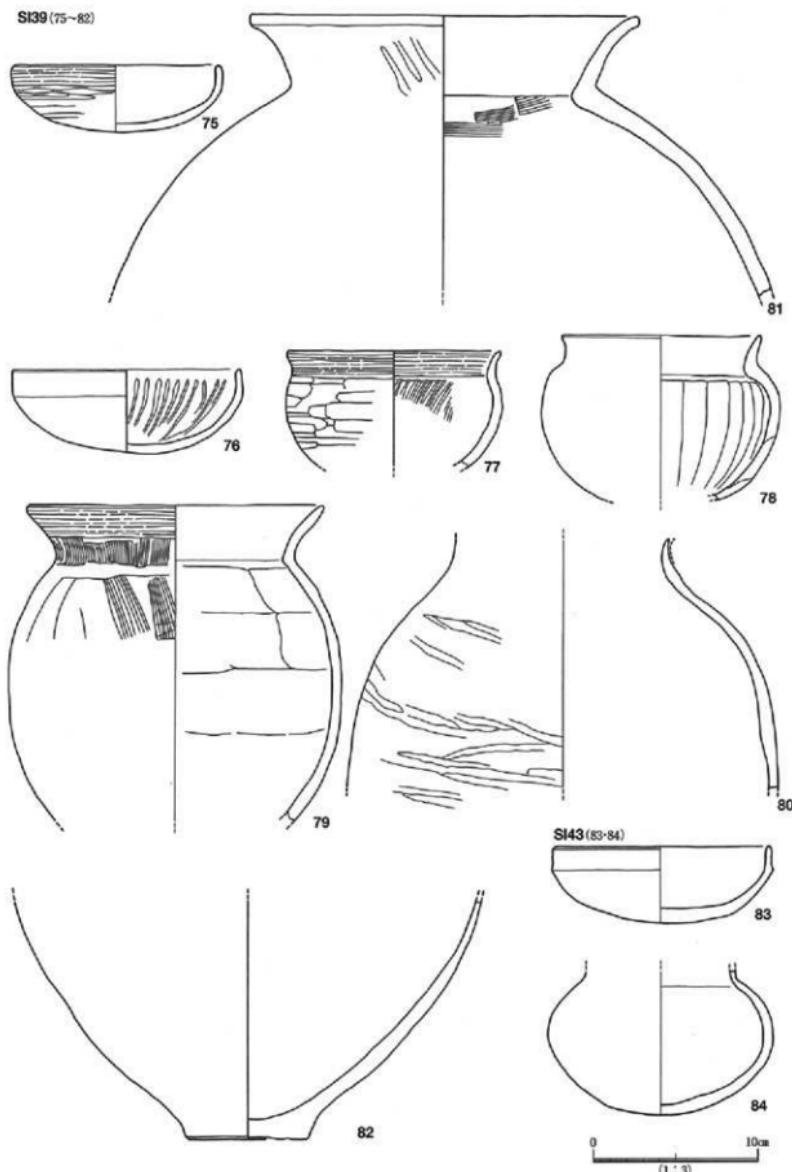
(1 : 3)



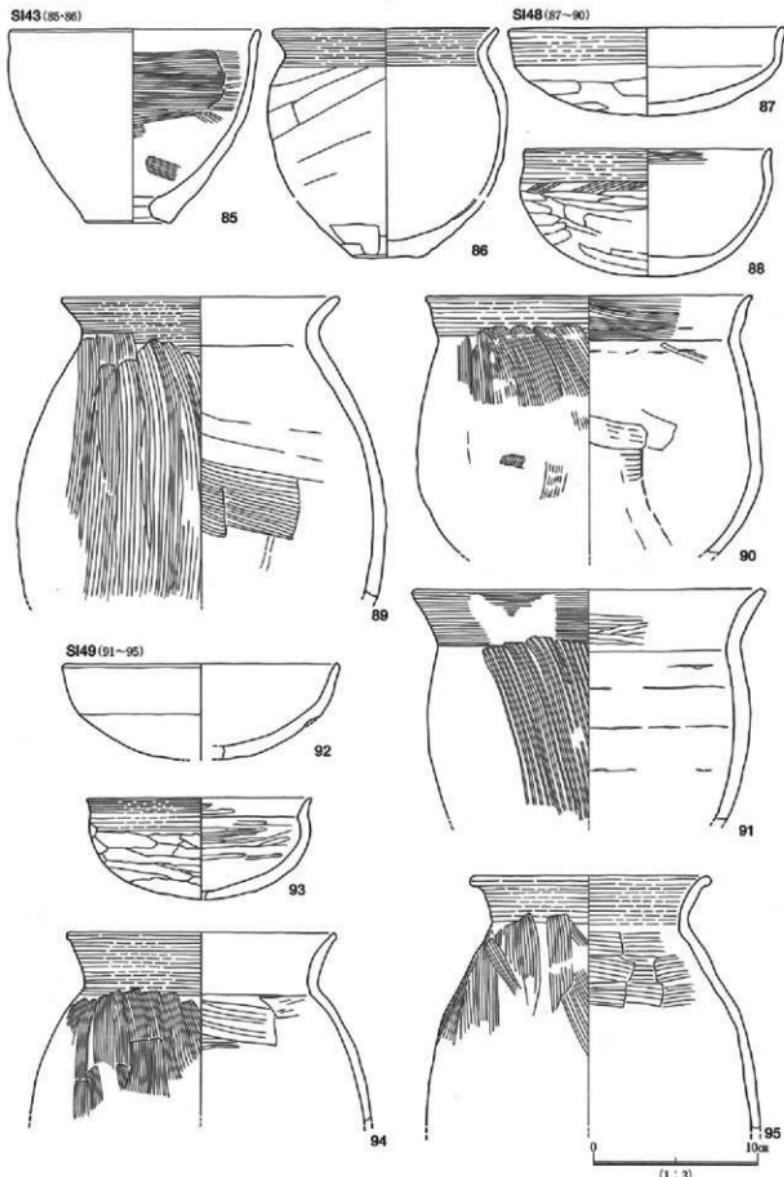
第36図 S II 13・22・23・24出土遺物



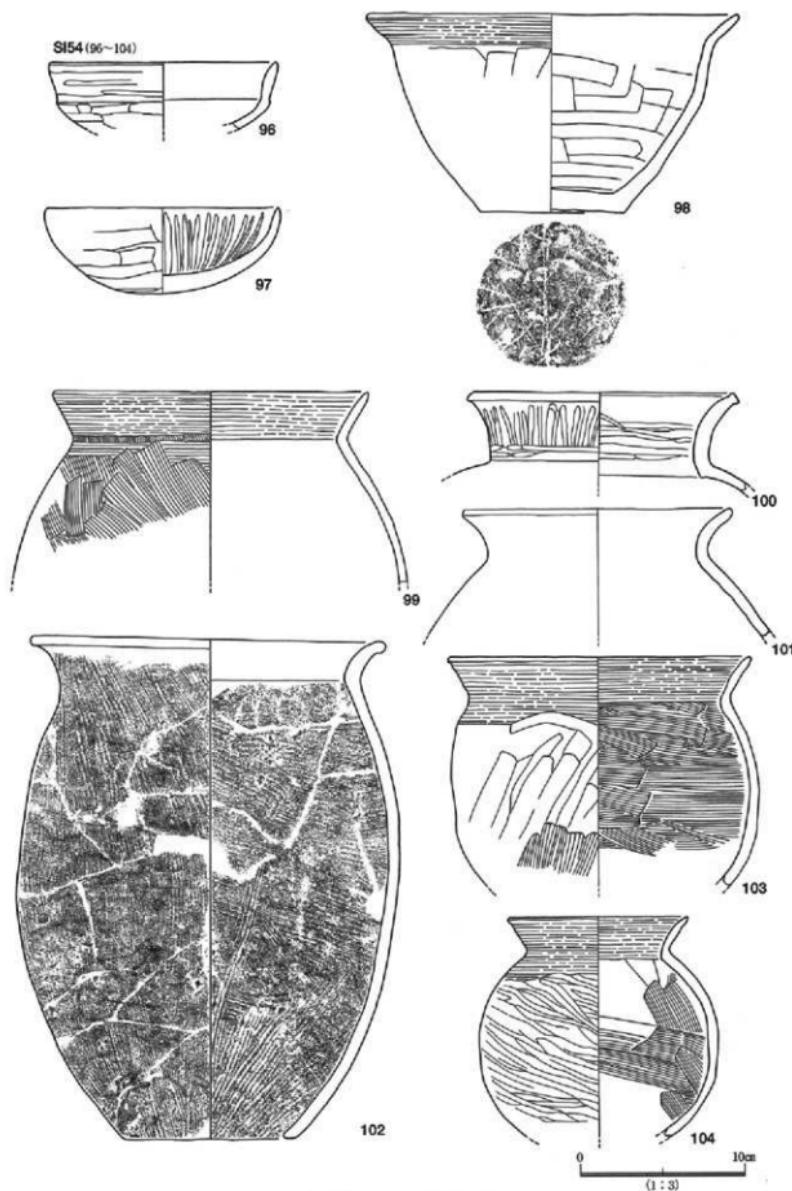
第37図 S I 24・31・32出土遺物



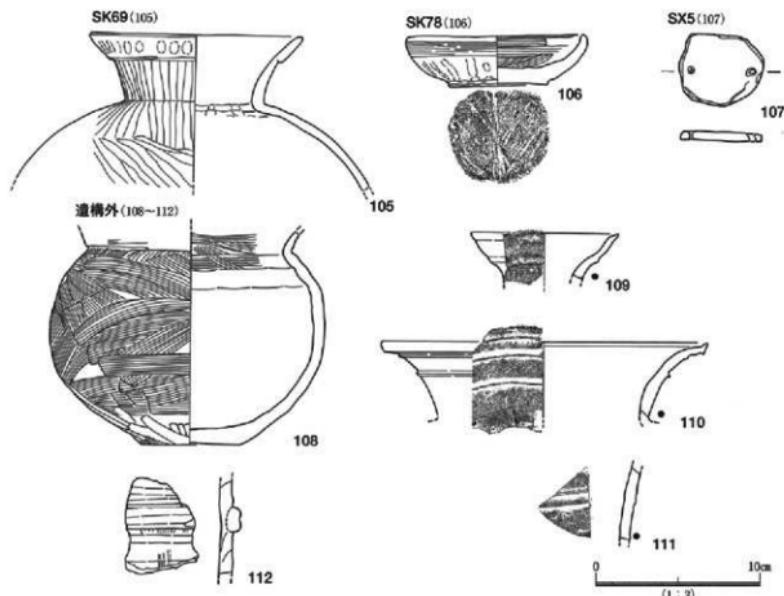
第38図 S I 39・43出土遺物



第39図 S I 43・48・49出土遺物



第40図 S I 54出土遺物



第41図 SK69・78・SX5・遺構外出土遺物

タタキ、内面同心円文のスリ消し、S I 9のものが外面平行タタキに内面スリ消しである。その他遺構外から瓦や甕口縁部の小片、甕部体破片が出土している。

石製品は、石製模造品と砥石が出土している。S I 5からは石製模造品の滑石製勾玉1点と白玉が総数約120個出土している。写真図版15の40の白玉は勾玉の近くから21個が繋がった状態で、41の白玉は散在した状態で出土している。

砥石は、S I 23出土の64が凝灰岩の自然石を利用したものである。

土製品は、S I 23から土玉8個と紡錘車1個、S I 3から紡錘車1個が出土している。

漆は、S I 4の貯蔵穴から炭化米とともに出土した。発掘調査時に確認した際、漆の可能性を考慮し、自然科学分析が必要であると判断された。東北芸術工科大学保存科学研究室の御好意により、赤外線分光分析装置を用いて測定していただいた。比較試料である生漆の測定結果と比較し、漆であると判明した。



S14出土漆

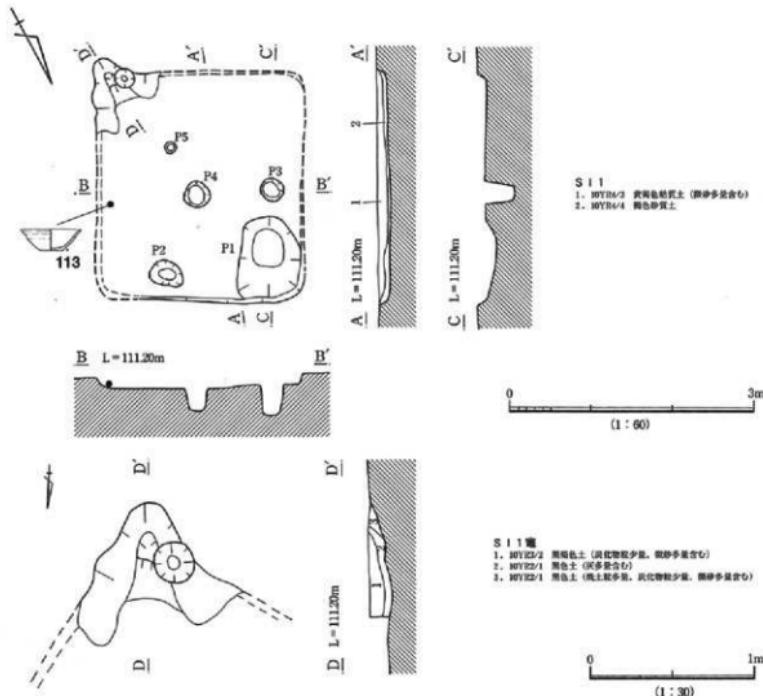
第3節 奈良・平安時代

本遺跡で検出された奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡10棟、柵列1条、土坑266基、溝跡3条、ピット157基である。土坑・ピットの形態については、第75・76図及び附図で示すこととし、報告書に遺物を掲載した土坑のみ個別に掲載することとした。時期は8世紀から10世紀代までが認められる。以下、遺構毎に述べていく。

1 竪穴住居跡

S I 1 (第42図、表2、図版7)

西地区E-9グリッドに位置する。規模は、長軸2.76m、短軸2.46m、残存深度16cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-30°-Eを示す。覆土は、上層が炭化物粒を含むくびい黄褐色粘質土、下層が微砂を多く含む褐色土である。ピットは5基検出されたが性格は不明である。窓は南東角に付設され、煙道は壁外に削り込まれている。遺物は、113の赤焼土器が東壁際の覆土下層から出土している。赤焼土器は10世紀第1四半期頃のもので、遺構の廃絶期に近い時期の遺物と思われる。



第42図 S I 1

S I 10 (第43図、表2、図版7)

東地区F-16・17グリッドにかけて位置する。8世紀後半のS I 41を切る。規模は長軸5.04m、短軸4.94m、残存深度18cmを測り、平面形は方形を呈する。長軸方向はN-4°-Wを示す。覆土は、炭化物・微砂を含む灰黄褐色土で、床面は明黄褐色土ブロック・微砂を含む黒褐色粘質土である。周溝は南・西壁で検出された。竈は確認されなかったが、攪乱で壊された北壁に付設されていたと推測される。遺物は、115の赤焼土器坏と114の須恵器坏が住居跡南壁側の床面近くから他の土器片とともに出土している。114の須恵器は底部へラ切り離し無調整で、底部周縁に丸みを持つ。窯跡資料との比較では、久保手2号段階から小松原1・2号窯段階頃の時期のものと思われる、9世紀前半代となる。その他に土師器の内面黒色処理の坏、須恵器の回転糸切り底の坏が出土しており、須恵器坏は小松原2号窯段階のものに類似している。

S I 41 (第43図、表2、図版7)

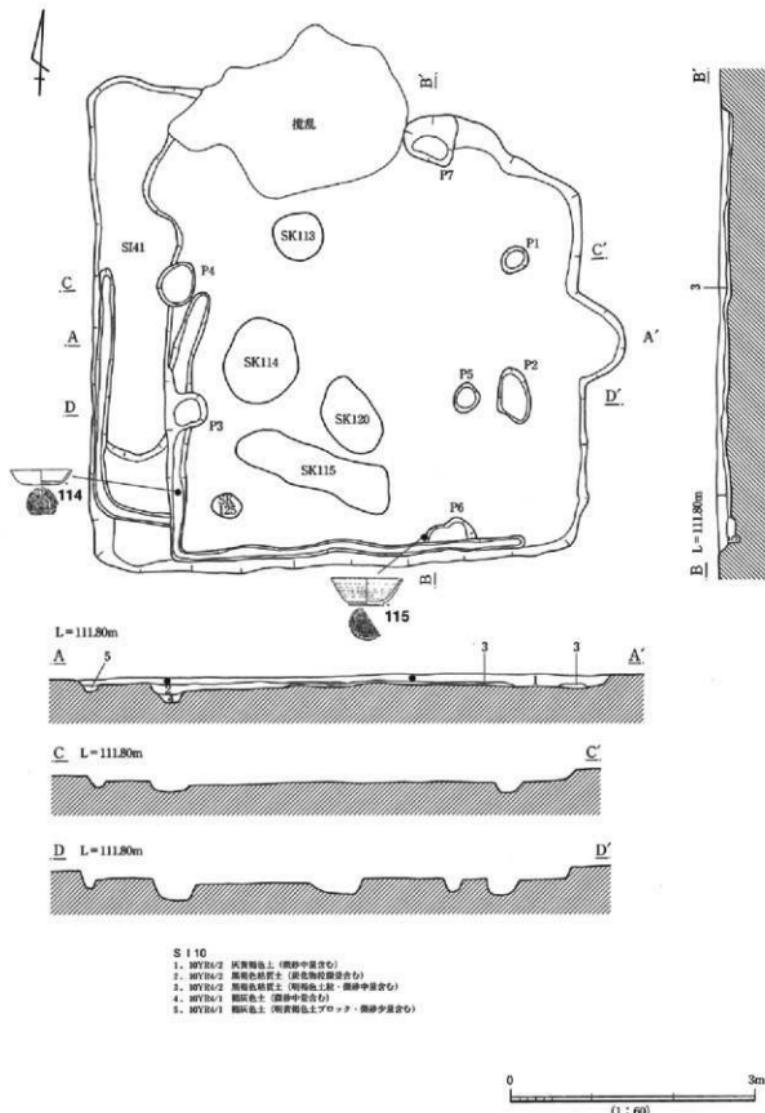
東地区F-16・17グリッドにかけて位置する。9世紀前半のS I 10に切られる。規模は南北方向5.74m、東西方向推定6.00m、残存深度8cmを測り、平面形は方形と考えられる。南北軸N-4°-Wを示す。覆土はS I 10と同様に灰黄褐色土である。ピットは7基検出されたが性格は不明である。P 1~4を主柱とする4本主柱構造になると考えられる。柱間は南北方向に約1.8m、東西方向に約4.2mである。西壁に周溝が検出される。遺物は、覆土から8世紀後半の土器が出土している。

S I 11 (第44図、表2、図版7・8)

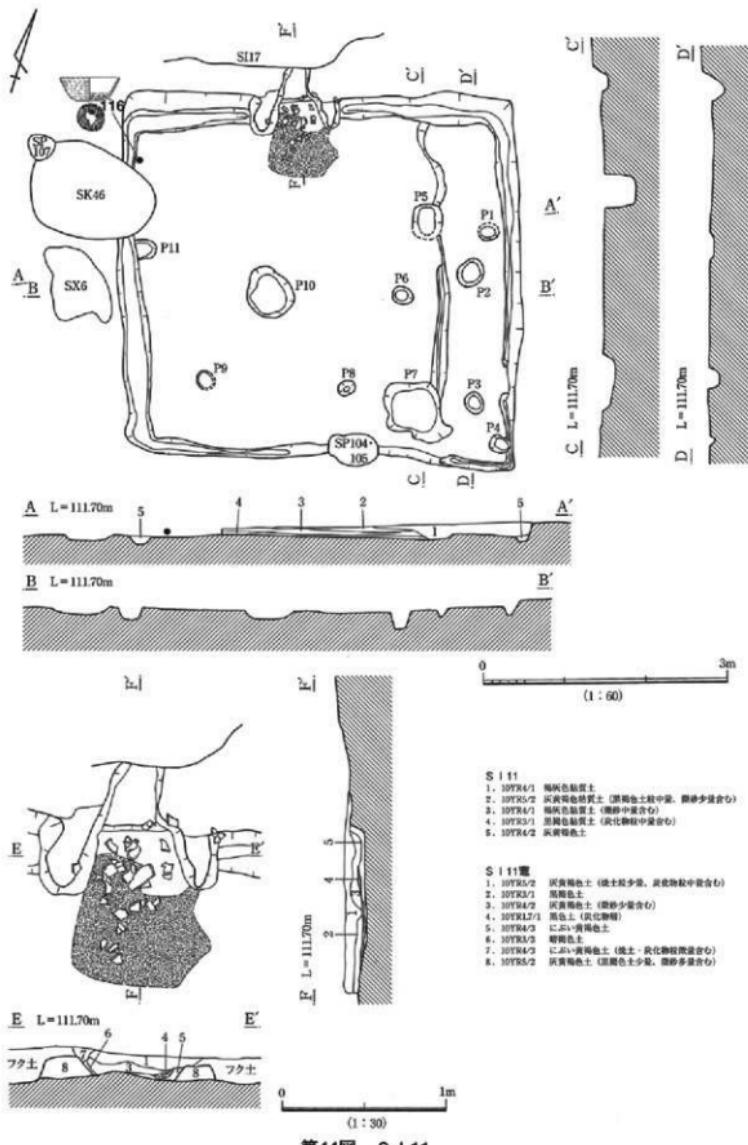
東地区F-16~G-16グリッドにかけて位置し、竈の先端をS I 17に切られる。規模は、長軸4.80m、短軸4.24m、残存深度14cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-19°-Wを示す。覆土は大きく2層に分かれ、上層が黒色土ブロックと微砂を含む灰黄褐色粘質土、下層が炭化物粒を含む黒褐色粘質土である。ピットは11基検出されたが性格は不明である。周溝は竈を除き全周する。住居跡東側の一段高くなった部分の内側にも周溝が確認され、東側へ拡張したと考えられる。竈は北壁中央部やや西寄りに付設される。煙道は壁外へ削り込み、燃焼部から煙道にかけて一段高くしている。袖は黒褐色土を少量、微砂を多量に含む灰黄褐色粘質土で構築される。焚口部から外側にかけての約60cmの範囲に炭化物が確認される。燃焼部幅は44cmである。遺物は、土師器焼破片と116の赤焼土器坏が出土している。116は住居跡西壁際の床から6cm程浮いた状態で出土している。器高が4.8cmと高く、三木木窯出土の赤焼土器に類似しており10世紀前半頃のものと思われる。

S I 12 (第45図、表2、図版8)

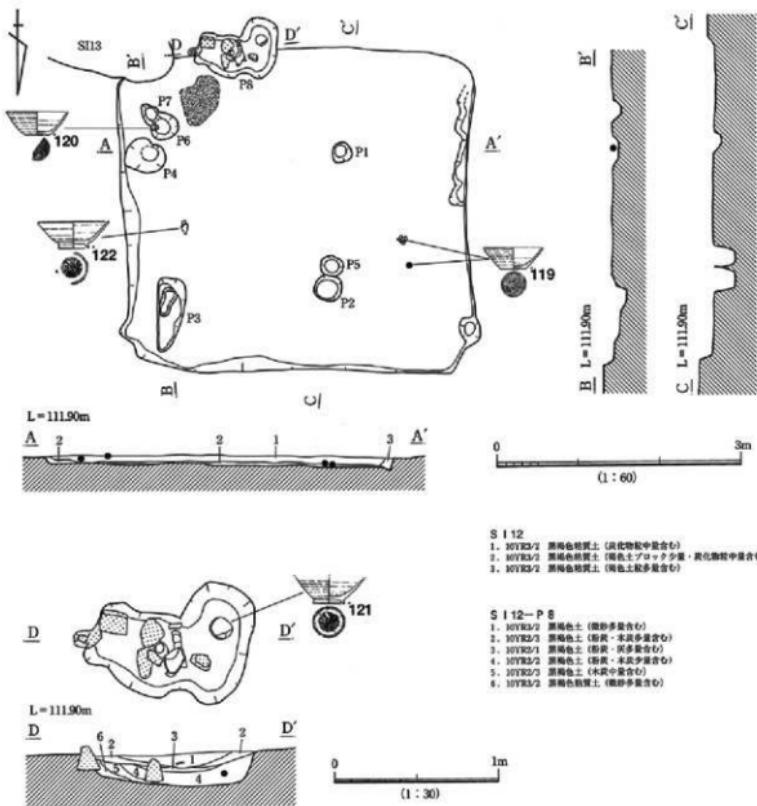
東地区F-20グリッドに位置し、南東角でS I 13を切る。規模は、長軸4.06m、短軸3.84m、残存深度14cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-3°-Wを示す。覆土は、褐色土ブロック・炭化物粒を多量に含む黒褐色粘質土である。ピットは8基検出された。P 1~4が、東に寄っているが主柱穴に相当する可能性がある。周溝は西壁の一部で確認された。竈は、P 8の覆土中に木炭が多く含まれていたことから、南壁に付設されていたと考えられる。遺物は赤焼土器が主体で、119・120の坏と121・122の高台付坏があり、ほとんどの遺物は床面から覆土



第43図 S I 10・S I 41



第44図 S I 11



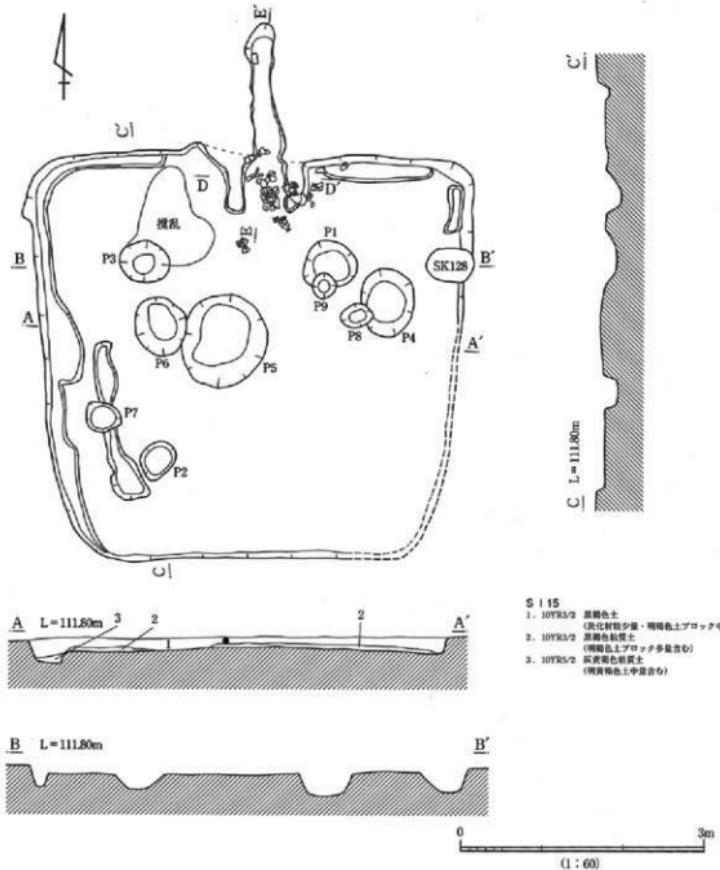
第45図 S I 12

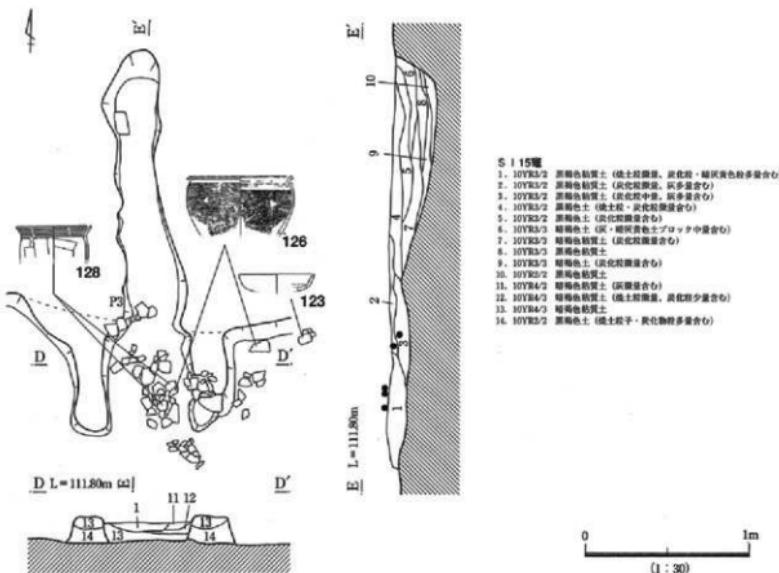
下層にかけて出土している。121は住居跡南側のP 8の覆土中から灰や木炭とともに出土している。119・120は10世紀前半頃とされる馬上台遺跡SK 4出土の赤焼土器に類似している。

S I 15 (第46・47図, 表2, 図版8)

東地区F-18グリッドに位置し、南東部分が礫層により壊されている。規模は、長軸が北壁で5.28m、南壁で3.72m、短軸4.96m、残存深度18cmを測り、平面形は台形を呈する。主軸はN-2°-Wを示す。覆土は明黄褐色土ブロック・炭化物粒を含む黒褐色粘質土である。ピットは9基検出された。P 1~3が主柱穴に相当し、4本主柱構造であったと考えられる。柱間は約2.4mである。周溝は北・西・東壁の一部で検出された。竈は北壁中央に付設される。煙道は壁外

へ長く削り込まれ、煙出口に向けて深く掘り込まれている。袖は焼土・炭化物粒を多く含む黒褐色土で構築され、東の袖には凝灰岩や土器片が混入している。燃焼部幅は42cmである。遺物は覆土中から出土した破片が大半を占める。燃焼部から窓の周囲の覆土中にかけて123・124・125・126・128が出土している。125の須恵器坏は底形が大きく、回転ヘラによる切り離し後、回転によるナデ調整が施されている。123は非クロロの浅身の土師器坏である。須恵器坏は8世紀第3四半期頃、土師器壺は8世紀中葉前後のものかと思われる。





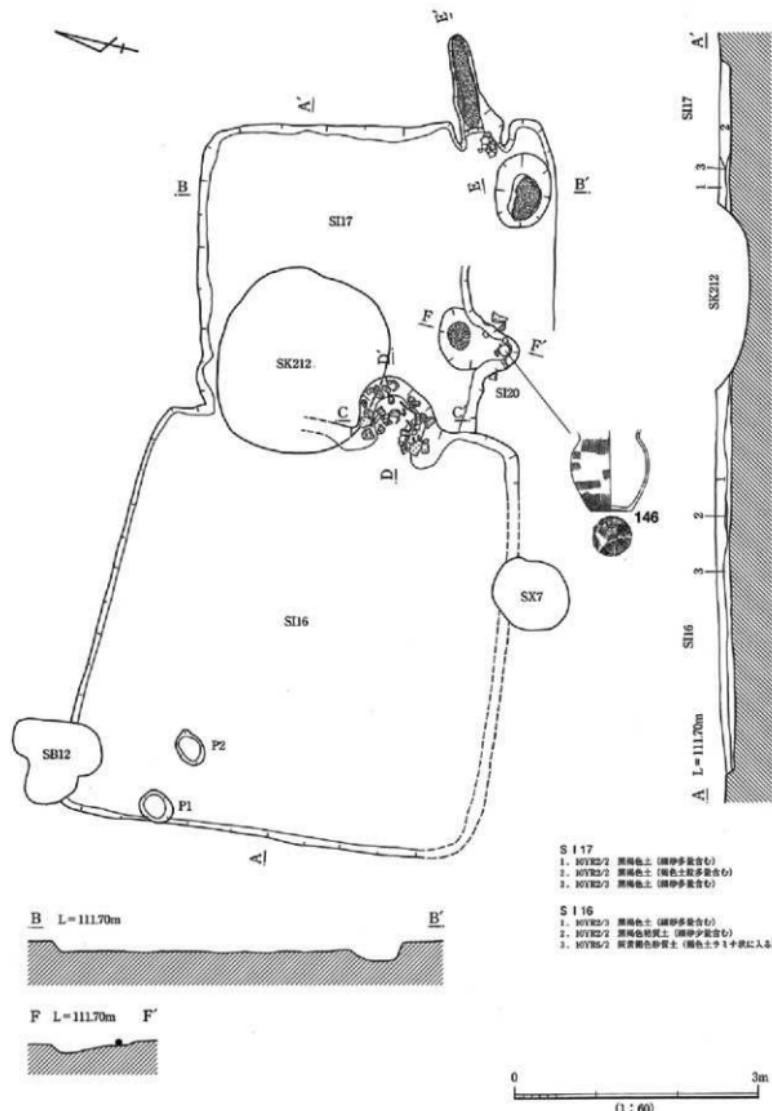
第47図 S I 15窓

S I 16 (第48・49図, 表2, 図版8)

東地区F-15グリッドに位置し、S I 17・S I 20・S B 7・S K212と重複関係にある。新旧関係はS I 17→S I 20→S I 16→S B 7・S K212となる。規模は長軸5.04m、短軸4.76m、残存深度18cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-83°-Eを示す。覆土は上層が微砂を多く含む黒褐色粘土質土、下層が灰黄褐色砂質土である。ピットは2基検出されたが、性格は不明である。周溝は確認されなかった。竈は東壁中央から南寄りに付設される。煙道を壁外へ削り込んで作っている。廃絶時に破壊されたと見られ、袖等は遺存していないが、竈の構築材に使用したと見られる角礫岩が多数出土した。遺物は、133の赤焼土器高台付壺、134の土師器小形甕が燃焼部から、その他は覆土中から出土している。131の須恵器蓋・130のつまみ、134の甕は9世紀第2四半期頃の遺物と思われる。

S I 17 (第48・49図, 表2, 図版9)

東地区F-16グリッドに位置し、S I 16・S I 20・S K212に切られる。規模は東西軸4.12m、残存深度14cmを測り、平面形は長方形を呈すと考えられる。主軸はN-68°-Eを示す。覆土は黒褐色粘土質土である。南東コーナー部のピットは貯蔵穴に相当するものと思われる。規模は長径92cm、短径68cm、深さ24cmを測り、平面形は梢円形を呈する。覆土中層に炭化物が堆積している。周溝は確認されなかった。竈は東壁南角に付設される。煙道は壁外へ削り込み、燃焼

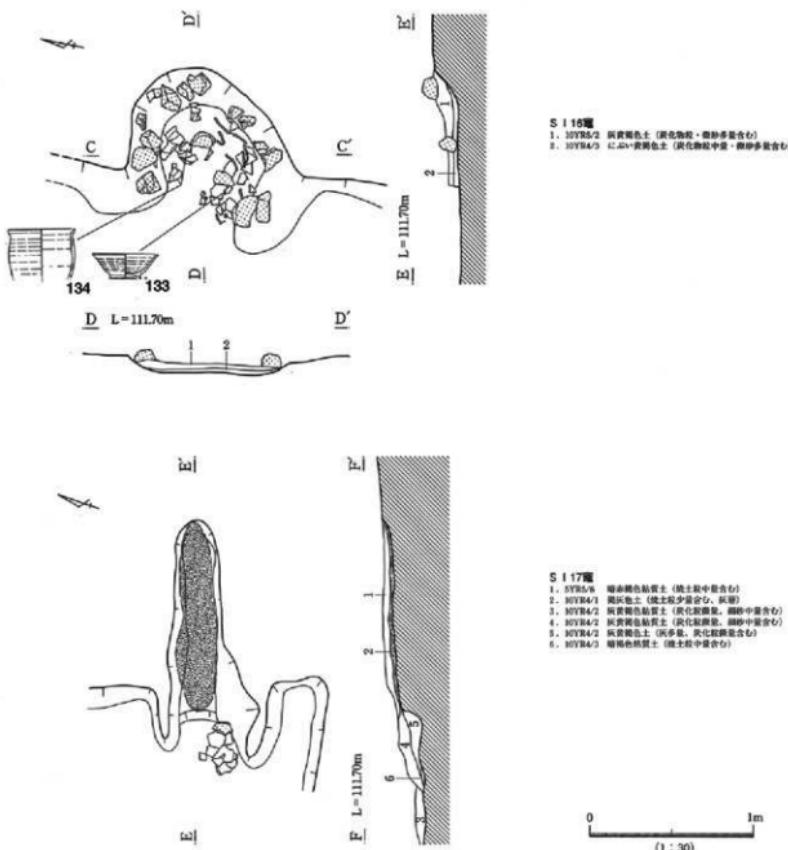


第48図 S I 16・S I 17・S I 20

部から煙道にかけて一段高くしている。燃焼部から煙道にかけて炭化物が堆積している。燃焼部幅は23cmである。遺物は、覆土中から135の須恵器壺底部片、136の須恵器壺が出土している。135は回転ヘラ切り離し後周縁回転ナデ調整で底形が大きく、8世紀第2四半期頃とされている。平野山遺跡12地点S Q 1下灰原Cブロック出土遺物に類似形態品がある。

S I 20 (第48図, 表2, 図版9)

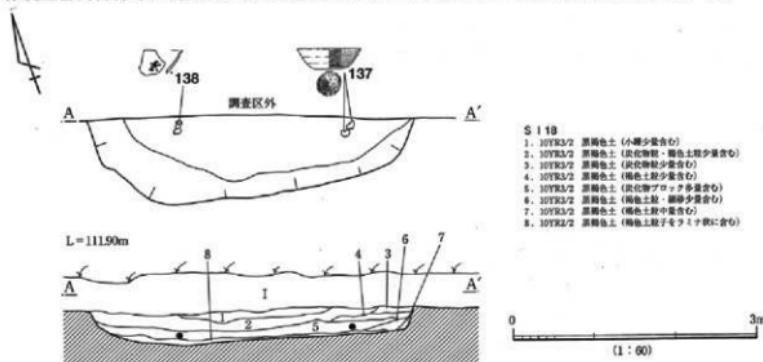
東地区F-16グリッドに位置する。S I 16・17と重複し、住居プランは不明である。南壁に竈を持つ。遺物は146の土師器小形壺が竈内から出土している。



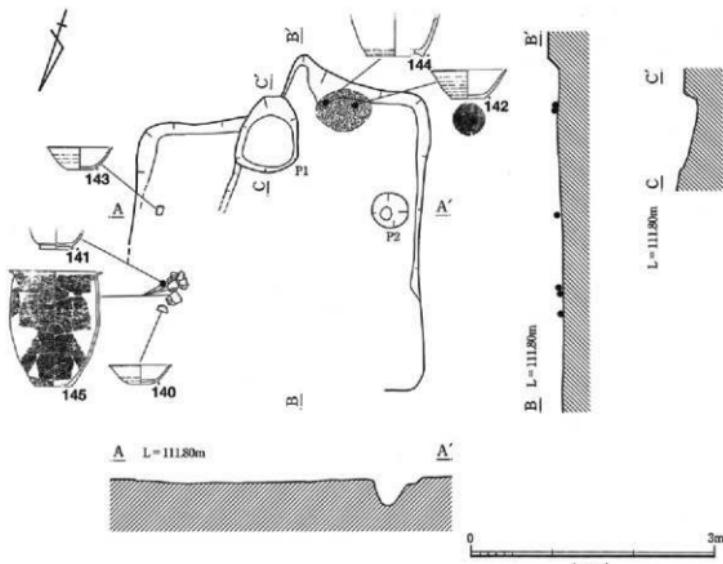
第49図 S I 16竈・S I 17竈

S I 18 (第50図, 表2, 図版9)

東地区F-20グリッドに位置する。北側が調査区外に延びるため全体像は不明である。覆土は炭化物粒を含む黒褐色粘質土である。遺物は、覆土中から137の内面黒色処理の土師器壺、138の「安」と墨書きされた須恵器壺片が出土している。その他、端部をつまみ上げる土師器壺や赤焼土器高台付壺、底径5.8cm程の須恵器壺片等、9世紀第4四半期頃の遺物を含んでいる。



第50図 S I 18



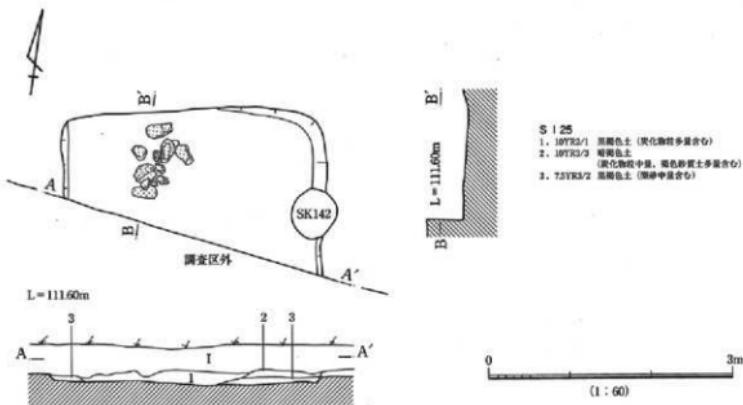
第51図 S I 19

S I 19 (第51図, 表2, 図版9)

東地区F-19グリッドに位置する。規模は長軸3.52m、短軸3.30m、残存深度14cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸はN-21°-Wを示す。覆土は炭化物粒を含む黒褐色粘質土である。竈は南壁に付設され、煙道は壁外へ削り込まれている。竈の西側に炭化物が堆積している。遺物は全て覆土中から出土している。

S I 25 (第52図, 表2, 図版9)

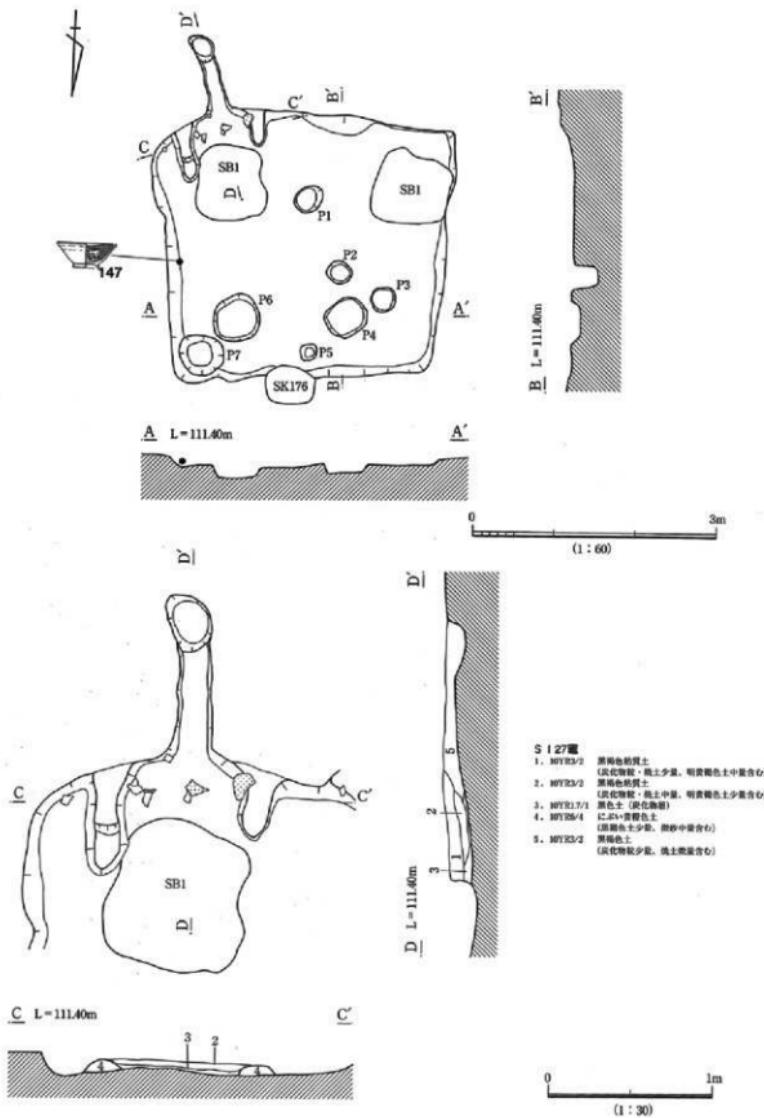
東地区G-12~13グリッドにかけて位置する。南側が調査区外に延びるため全体像は不明である。規模は東西軸3.02m、残存深度10cmを測る。覆土は微砂をやや多く含む黒褐色粘質土である。



第52図 S I 25

S I 27 (第53図, 表2, 図版9)

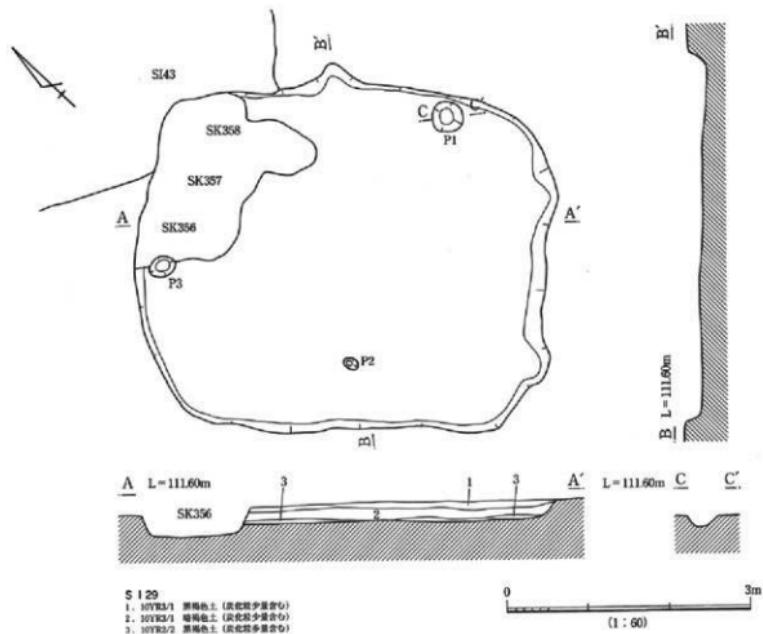
東地区E-11グリッドに位置する。S I 47・S B 1と重複関係にあり、新旧関係はS I 47→S B 1→S I 27となる。規模は長軸の南壁が3.62m、北壁が2.84m、短軸3.10m、残存深度10cmを測り、平面形は台形を呈する。主軸はN-15°-Wを示す。ピットは7基検出されたが性格は不明である。周溝は確認されなかった。竈は南壁東端に付設される。煙道は壁外へ長く削り込まれており、端部は膨らみを持つ。袖は黒褐色土・微砂を含むにぶい黄褐色粘質土で構築される。燃焼部幅は70cmである。遺物は南壁際の覆土中から、147の内面黒色処理の土器高台付壺が出土している。



第53図 S I 27

S I 29 (第54図, 表2, 図版9)

東地区E-16グリッドに位置する。北の角でS I 43を切り、SK 356・357・358に切られる。規模は長軸4.80m、短軸4.00m、残存深度22cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-48°-Eを示す。覆土は上層が炭化物粒を含む暗褐色粘質土で、下層が炭化物粒を含む黒褐色粘質土である。ピットは3基検出されたが性格は不明である。周溝は確認されなかった。竈は北東壁の中央のやや突き出した部分に付設されていたと考えられる。遺物は全て覆土中から出土している。149の須恵器坏は底径6.1cmでやや器高が高く、二子沢E地点併行期と見られ、9世紀第4四半期頃と思われる。他に149と同形態である148の生焼けの須恵器坏と150の赤焼土器坏が出土している。

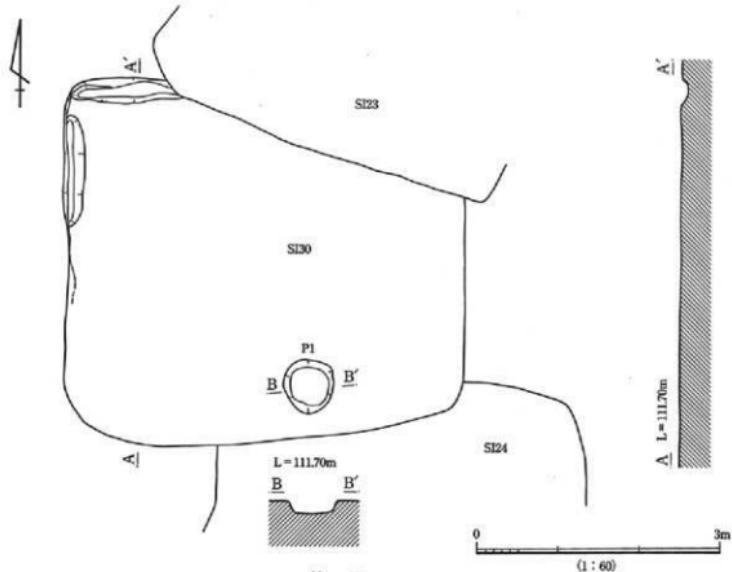


第54図 S I 29

S I 30 (第55図, 表2, 図版9)

東地区F-19グリッドに位置する。古墳時代の住居跡のS I 23・24を切るが、残存深度が浅いため、確認は困難を極めた。規模は長軸4.92m、短軸4.48m、残存深度5cmを測り、平面形

は方形を呈する。長軸方向はN-90°-Eを示す。ピットは南壁直下で1基検出され、出入り口ピットと見られる。周溝は北・西壁で検出された。遺物はP1の覆土中から須恵器壺底部片が出土している。その他覆土中からは、151・152の須恵器蓋・壺が出土しており、久保手1号段階か、その前段階（9世紀初頭前後の時期）頃のものと思われる。



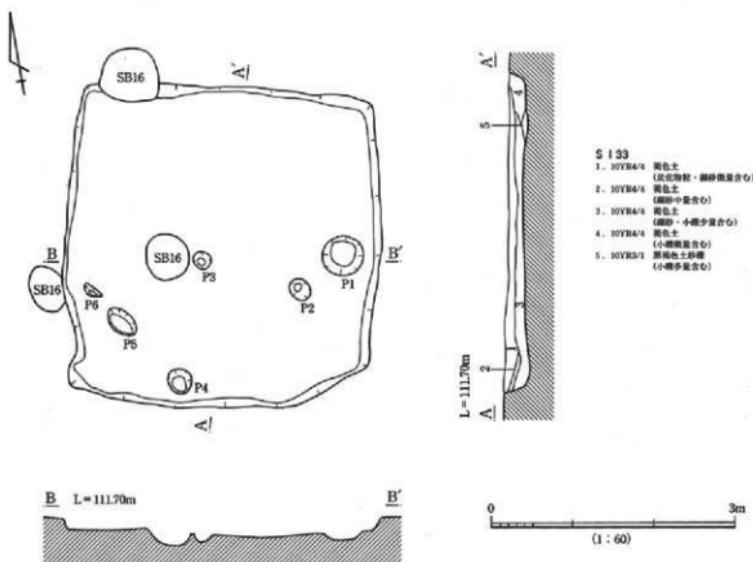
第55図 S I 30

S I 33（第56図、表2、図版10）

東地区E-17グリッドに位置し、西側をS B16に切られる。規模は長軸3.74m、短軸3.72m、残存深度16cmを測り、平面形は方形を呈する。長軸方向はN-13°-Eを示す。覆土は微砂を含む褐色粘質土である。ピットは6基検出されたが性格は不明である。周溝は確認されなかった。遺物は、三本木段階頃と見られる153の生焼け須恵器壺、その他は同じ時期の赤焼土器壺が出土している。

S I 37（第57図、表2、図版10）

東地区E-14~15グリッドにかけて位置する。南西角をS I 38に、住居跡内をS B 7・12に切られる。規模は5.08m、短軸4.52m、残存深度16cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-23°-Eを示す。覆土は炭化物粒を多く含む黒褐色粘質土である。ピットは5基検出されたが性格は不明である。周溝は東壁で一部検出された。壺は北東壁中央の焼土跡部分に付設されていたと考えられる。遺物は覆土中から出土している。155の須恵器壺は9世紀第3四半期頃のものかと思われる。



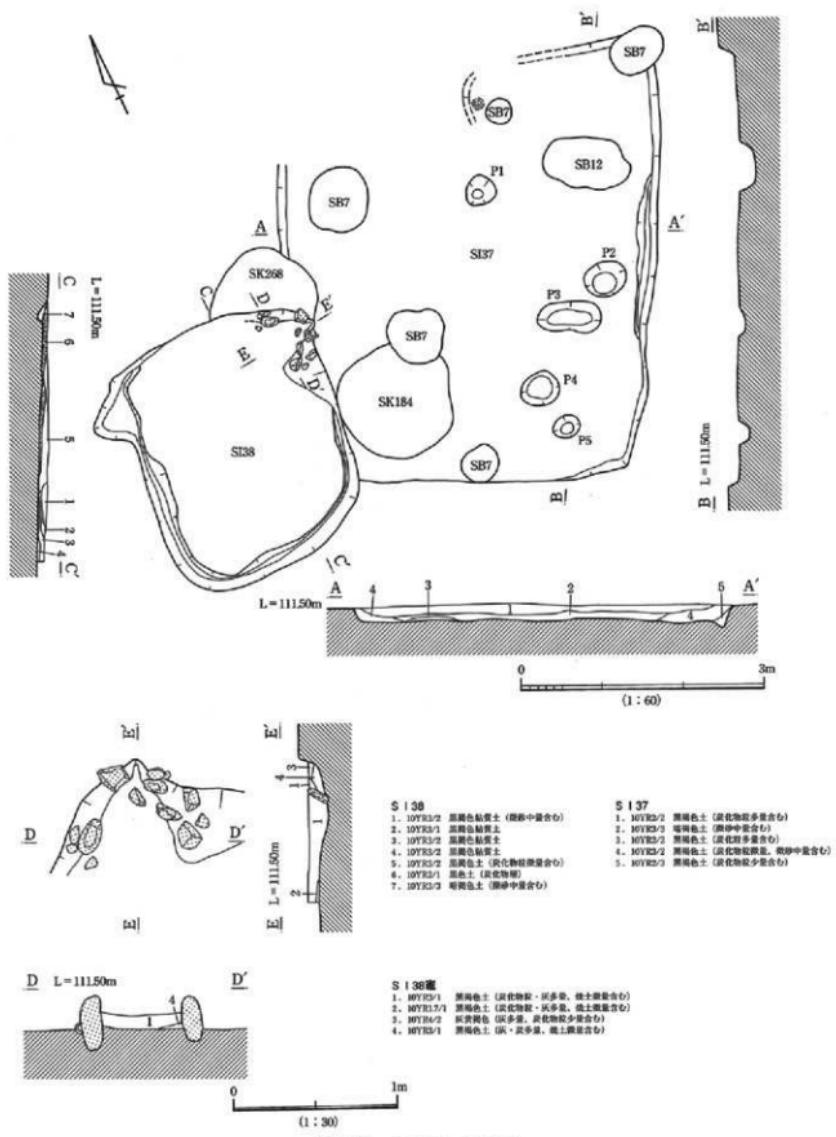
第56図 S 133

S 138 (第57図, 表2, 図版10)

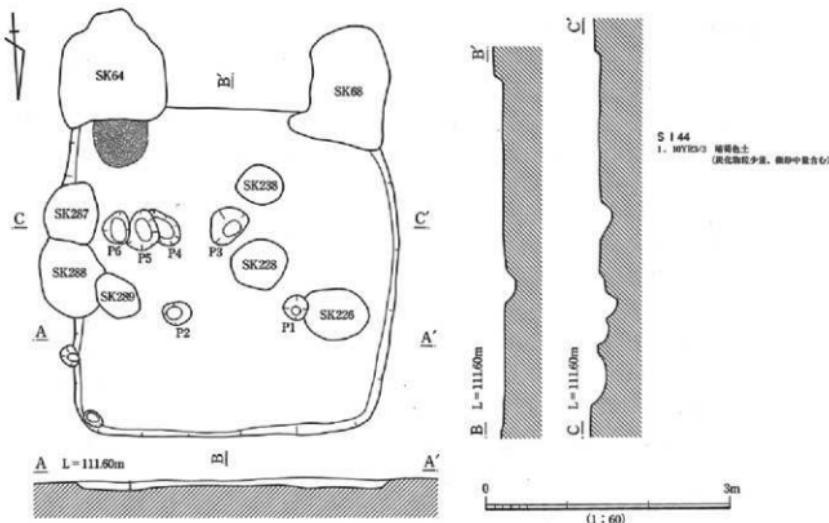
東地区E-14グリッドに位置し、北東角でS 137を切る。規模は長軸2.92m、短軸2.44m、残存深度14cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-92°-Eを示す。覆土は炭化物粒を多く含む黒褐色粘質土である。周溝はほぼ全周する。竈は北東角に付設され、主軸は住居跡と同方向である。廃絶時に壊されたと思われ、掘り方のみが確認された。西壁に竈と対面して検出された北西角の落ち込みは、旧い段階の竈の痕跡と思われる。遺物は159・160の土師器壺が竈から、157の須恵器壺、158の須恵器壺が覆土中から出土している。

S 144 (第58図, 表2, 図版10)

東地区F-14~15グリッドにかけて位置する。規模は長軸3.94m、短軸3.70m、残存深度9~21cmを測り、平面形は方形を呈する。長軸方向はN-6°-Eを示す。覆土は上層が炭化物粒を少量含む暗褐色粘質土、下層が微砂を多く含む黒褐色粘質土である。ピットは6基検出されたが性格は不明である。周溝は確認されなかった。南東角から焼土が検出され、竈が付設されていた可能性がある。遺物は161の赤焼土器高台付壺が出土している。10世紀代の遺物であろうと思われる。



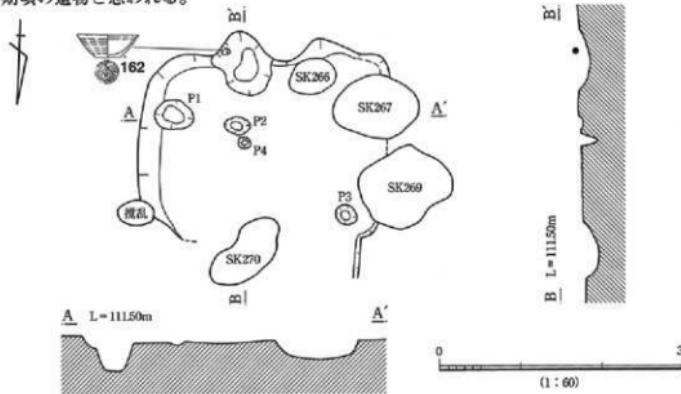
第57図 S 137・S 138



第58図 S 144

S 145 (第59図, 表2, 図版10)

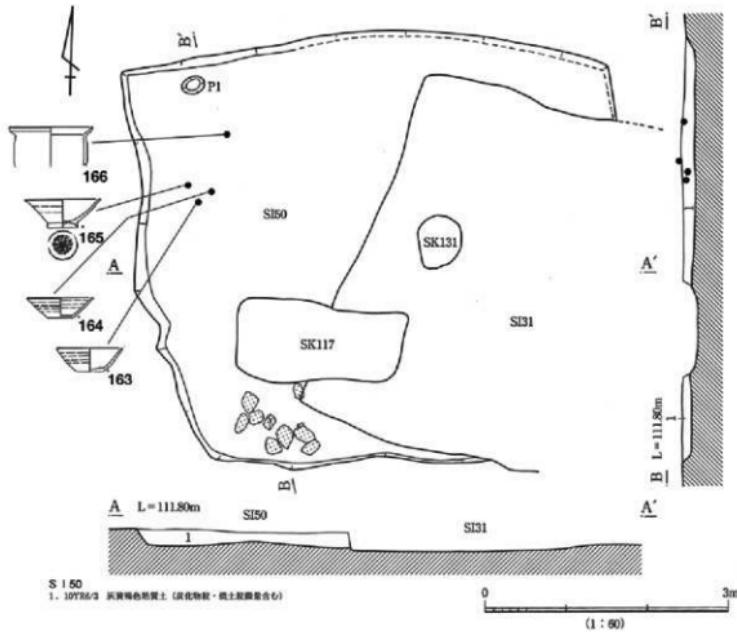
東地区E-14グリッドに位置し、S X11と重複する。規模は長軸3.12m、短軸2.70m、残存深度9cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-4°-Wを示す。ピットは4基検出されたが性格は不明である。周溝は確認されなかった。南壁東寄りの位置に壁外に突き出した土坑が竈に相当すると考えられる。遺物は162の赤焼土器壺が同土坑から出土している。10世紀後半期頃の遺物と思われる。



第59図 S 145

S I 50 (第60図, 表2, 図版10)

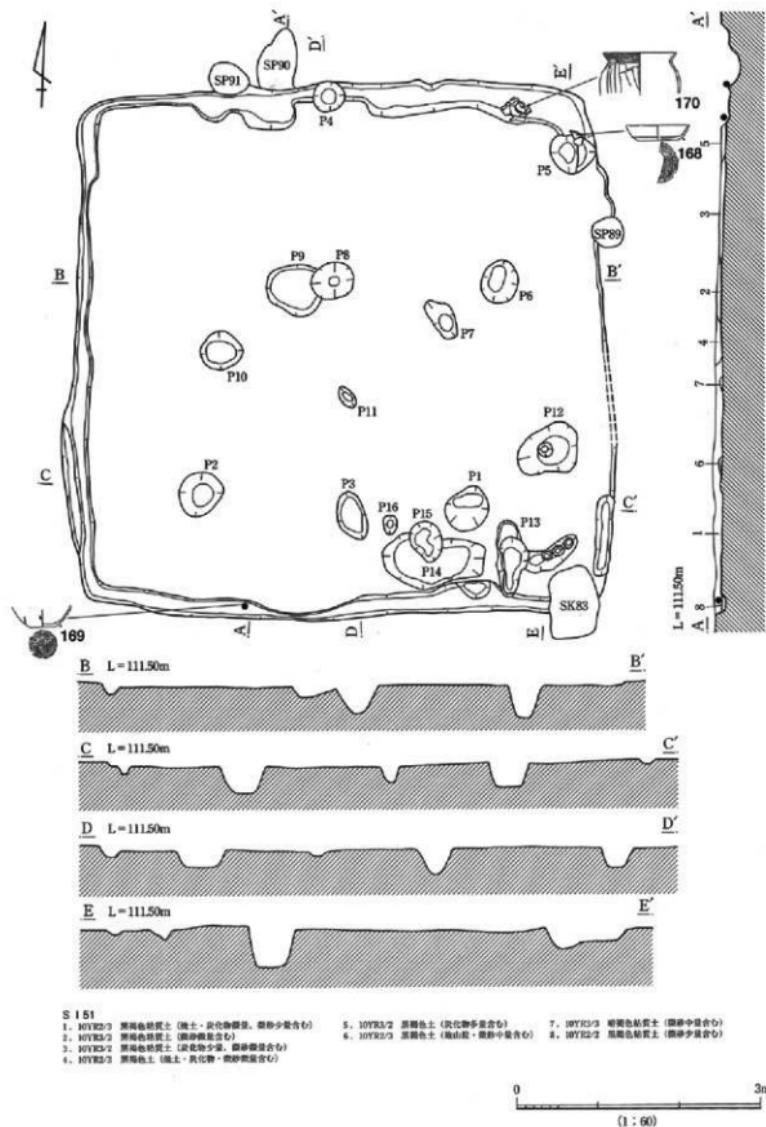
東地区 E - 18 ~ F - 18 グリッドに位置し、S I 31を切る。規模は、長軸5.86m、短軸5.02m、残存深度20cmを測り、平面形は長方形を呈する。長軸方向はN - 85° - Eを示す。覆土は焼土・炭化物粒を含む灰黄褐色粘質土である。周溝、竈共に確認されなかった。遺物は、住居跡北西部の覆土中から165の赤焼土器高台付壺が出土しており、10世紀第1四半期頃のものと思われる。



第60図 S I 50

S I 51 (第61図, 表3, 図版10)

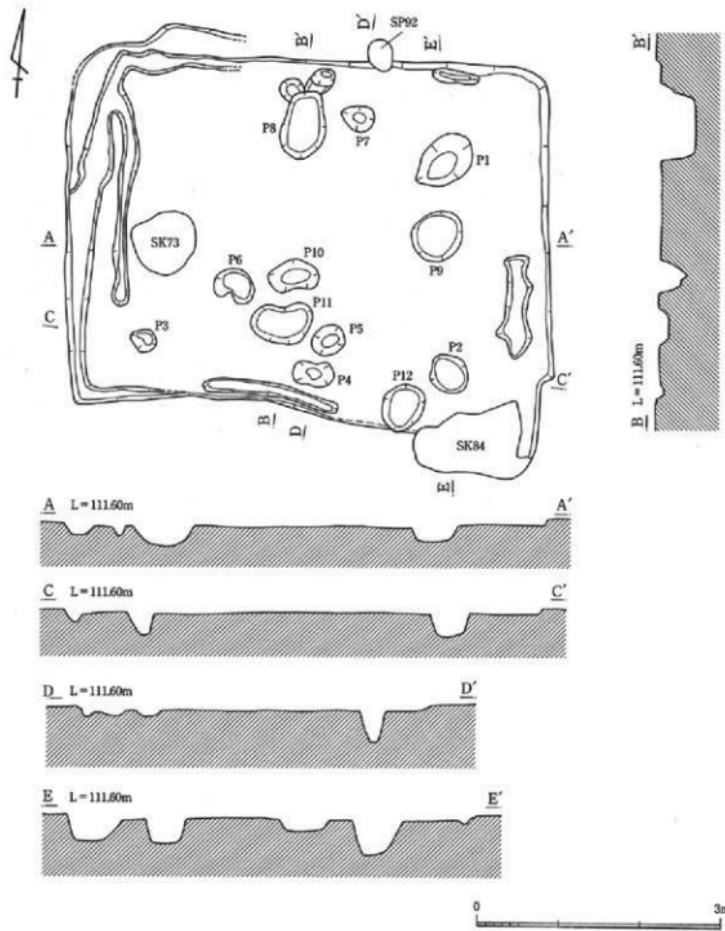
東地区 F - 13 グリッドに位置する。規模は長軸6.48m、短軸6.40m、残存深度10cmを測り、平面形は方形を呈する。長軸方向はN - 3° - Wを示す。覆土は焼土・炭化物粒を微量に含む黒褐色粘質土である。ピットは16基検出された。主柱は4本主柱構造と考えられ、P 1・2が相当する。柱間は約3.3mである。P 3が出入り口ピットと見られる。周溝は北・南・西壁で検出された。竈は確認されなかった。遺物は、住居跡北東の壁直下の床上から170の土師器壺が、覆土中から167の非ロクロの土師器壺が、P 5の覆土中から168の須恵器壺が出土している。169の墨書きの入った赤焼土器壺は、遺構外遺物に挙げた233の土師器皿とともに、攪乱等で混入したものと思われる。住居跡に伴うと考えられる167・170が8世紀第四半期頃、169・233が9世紀後半代の遺物である。



第61図 S 151

S 152 (第62図, 表3, 図版10)

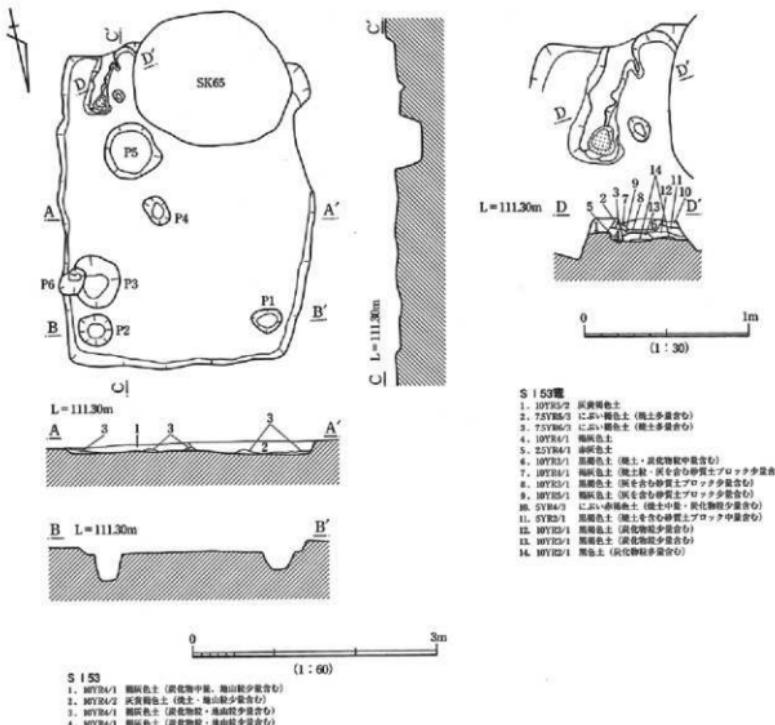
東地区 F - 15 ~ G - 15 グリッドにかけて位置し、規模は長軸5.88m、短軸4.14m、残存深度8 cmを測り、平面形は長方形を呈する。長軸方向はN - 87° - Eを示す。ピットは12基検出された。P 1 ~ 3 が主柱に相当し、4本主柱構造と推定される。P 4 が出入り口ピットに相当する。周溝は北・南・西壁で検出された。竈は確認されなかった。



第62図 S 152

S I 53 (第63図、表3、図版10・11)

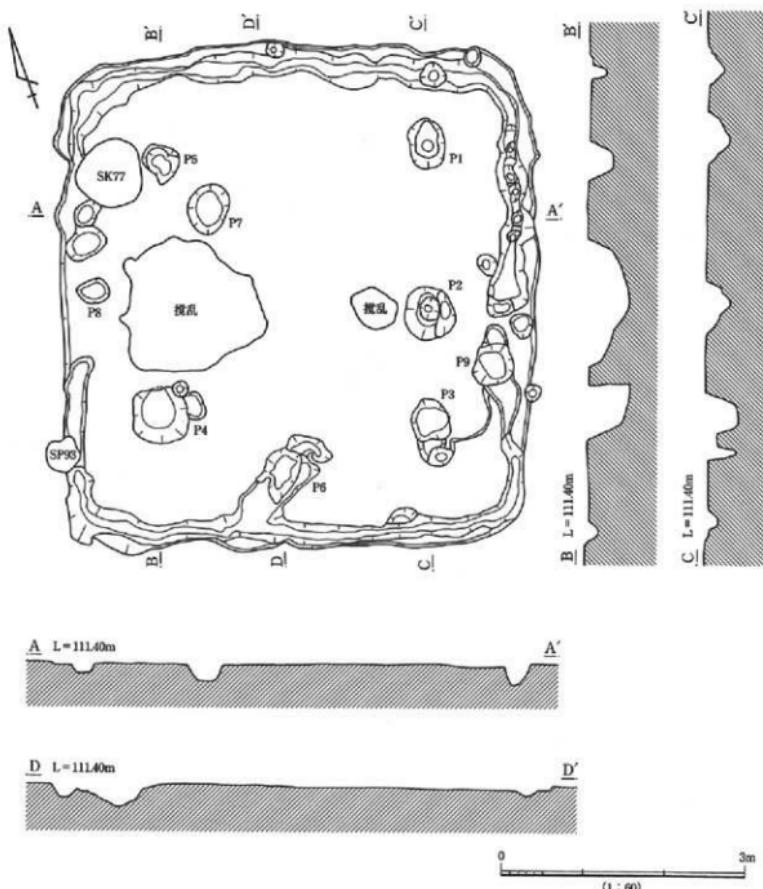
東地区E-10~F-10グリッドにかけて位置する。規模は長軸3.64m、短軸2.96m、残存深度13cmを測り、平面形は長方形を呈する。主軸はN-12°-Eを示す。覆土は炭化物粒を多量に含む褐灰色土と、焼土を少量含む灰黄褐色土である。ピットは5基検出され、P1・2が主柱穴となる可能性がある。周溝は確認されなかった。竈は南壁東端に付設される。煙道は壁外へやや削り込まれている。袖は灰黄褐色土を構築材とする。遺物は竈内から、172の土師器小形甕が出土している。10世紀第1四半期頃に相当する。



第63図 S I 53

S 155 (第64図, 表3, 図版11)

東地区 F-11～G-11グリッドにかけて位置する。規模は長軸6.08m、短軸5.74m、残存深度4 cmを測り、平面形は方形を呈する。長軸方向はN-18°-Eを示す。ピットは7基検出された。P 1～5は主柱に相当し、6本主柱構造と考えられる。P 6は出入り口ピットに相当すると思われる。周溝はほぼ全周する。竈は確認されなかった。

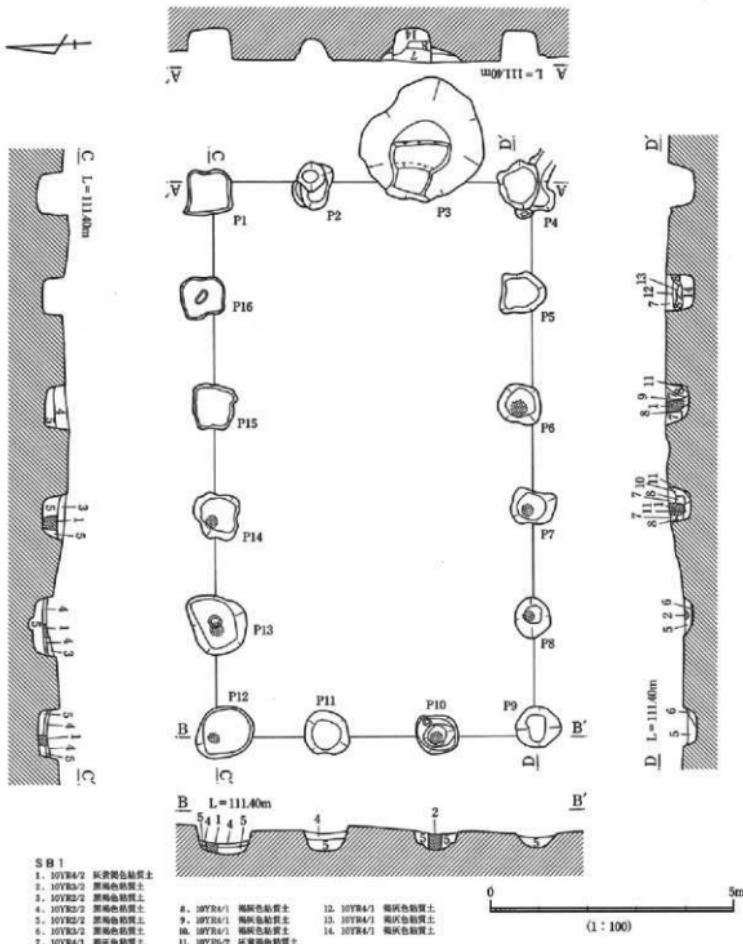


第64図 S 155

2 堀立柱建物跡

S B 1 (第65図、表4、図版11)

西地区E-10~東地区F-11グリッドに位置する。桁行11.4m (38尺)、梁行6.6m (22尺)を測る。5×3間規模の大型の側柱式東西棟建物で、棟方向はN-95°-Eを示す。柱间距は桁間・梁間共に2.1m (7尺)~2.4m (8尺)である。柱直径は長軸22~28cmで、東側では確認でき

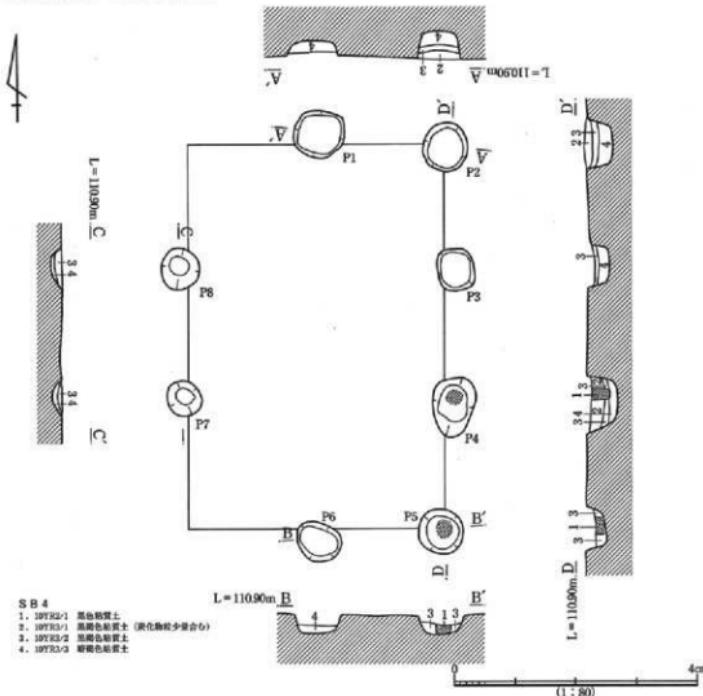


第65図 S B 1

なかった。柱掘形は北側の桁行が大形の略方形を、南側の桁行がやや小形の梢円形を主体とする。規模は長軸76~137cm、短軸66~114cm、残存深度20~64cmを測る。

S B 4 (第66図、表4、図版11)

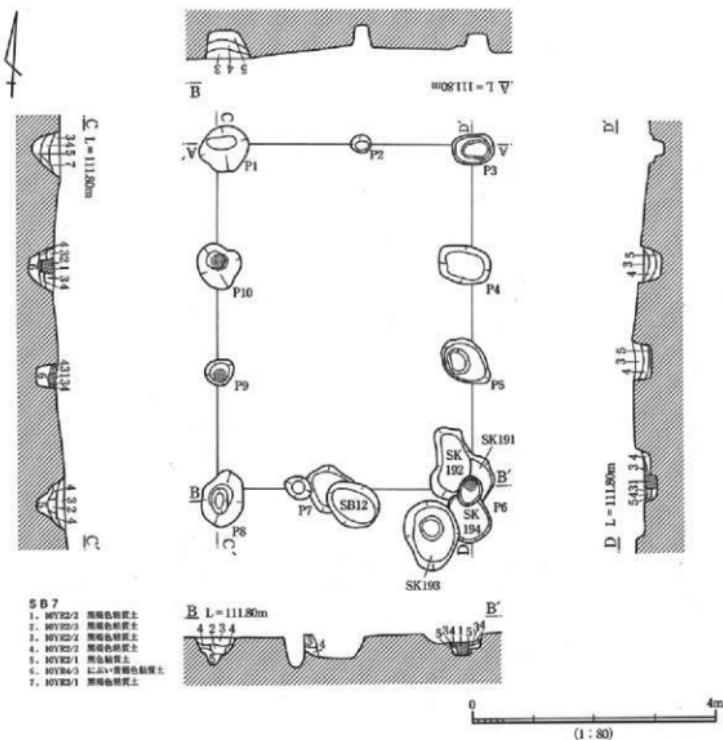
西地区D-8グリッドに位置する。桁行6.3m(21尺)、梁行4.2m(14尺)を測る。3×2間規模の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-1°-Eを示す。柱間距離は桁間・梁間共に2.1m(7尺)の等間である。柱直径は長軸18~30cmで、平面では確認できるが断面ではP4・5のみしか確認できなかった。柱掘形はほぼ円形及び梢円形を呈する。規模は長軸60~101cm、短軸56~77cm、残存深度17~50cmを測る。



第66図 S B 4

S B 7 (第67図、表4、図版11)

東地区E-15~F-15グリッドに位置する。桁行5.7m(19尺)、梁行4.2m(14尺)を測る。3×2間規模の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-3°-Wを示す。S B 12と重複関係にあり、本建物跡の方が古い。柱間距離は桁間1.8m(6尺)~2.1m(7尺)、梁間1.8m(6尺)~2.4m(8尺)である。柱痕はP4・5で確認され、径は20cm前後である。柱掘形はほぼ円形及び梢円形

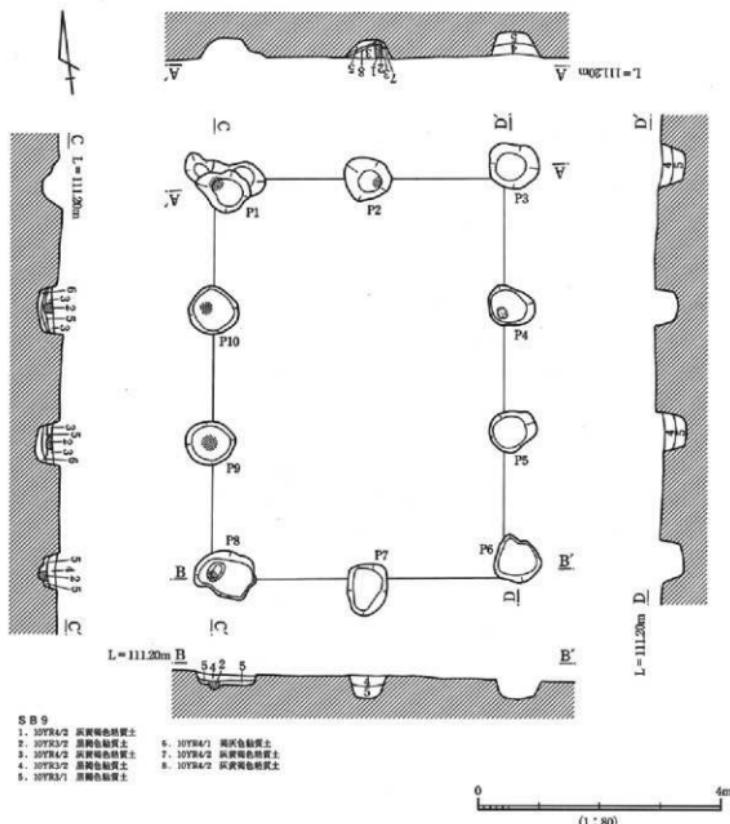


第67図 SB 7

を呈する。規模は長軸33~91cm、短軸31~78cm、残存深度30~56cmを測る。遺物はP1覆土中から173の須恵器坏が出土している。9世紀第2四半期頃のものと思われる。

SB 9 (第68図、表4、図版11)

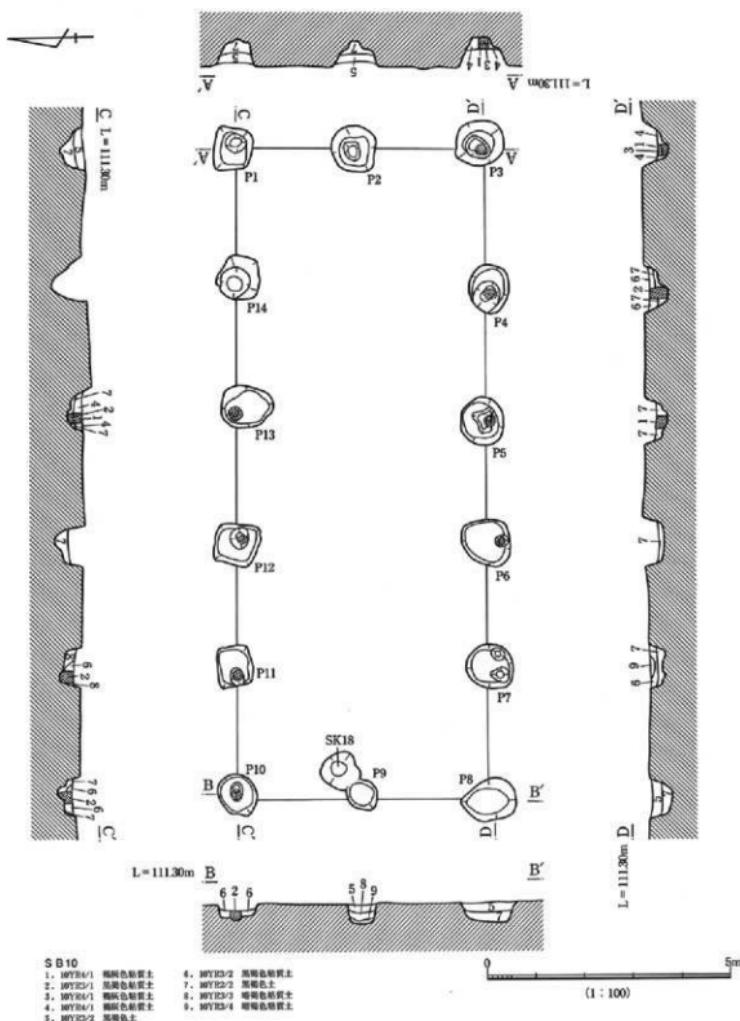
東地区E-11グリッドに位置する。桁行6.6m(22尺)、梁行4.8m(16尺)を測る。3×2間規模の隅柱式南北棟建物で、南北軸はN-8°-Eを示す。柱間距離は桁間2.1m(7尺)、梁間2.4m(8尺)である。柱痕径は16~24cmである。柱掘形はほぼ円形及び稍円形を呈する。規模は長軸76~102cm、短軸62~76cm、残存深度32~45cmを測る。桁間を全て7尺で建物規模を割り出した場合、P10のみ、軸からやや南方へずれる。遺物は、P1覆土中から174の深身の須恵器高台付坏が、P9覆土中から175の灰釉陶器長頸瓶が出土している。二子沢D段階のものに類似し、9世紀後半頃のものと思われる。



第68図 S B 9

S B 10 (第69図、表4、図版12)

西地区C-10~東地区D-12グリッドに位置する。桁行13.5m(45尺)、梁行5.1m(17尺)を測る。5×2間の大型の側柱式東西棟建物で、棟方向はN-92°-Eを示す。柱間距離は桁間2.4m(8尺)~3.0m(10尺)、梁間2.4m(8尺)~2.7m(9尺)である。柱痕径は22~30cmである。柱掘形は北側の桁行が略方形を、南側の桁行が椭円形を主体とし、S B 1と共通する。規模は長軸70~107cm、短軸60~96cm、残存深度29~57cmを測る。この建物跡を区画するようにSD 5が周囲を巡り、この建物跡と一緒に機能していたのではないかと推測される。遺物は、P12覆土中から176の須恵器短頸壺、P3覆土中から177の須恵器長頸瓶底部片が出土している。



第69図 S B 10